

# 天神堂遺跡

—特別養護老人ホーム「ヒルズ勝沼」建設に伴う発掘調査報告書—

2008年3月

甲州市教育委員会  
社会福祉法人 景雲会  
財)山梨文化財研究所

# 天神堂遺跡

—特別養護老人ホーム「ヒルズ勝沼」建設に伴う発掘調査報告書—

2008年3月

甲州市教育委員会  
社会福祉法人 景雲会  
(財)山梨文化財研究所

## 序

本書は甲州市勝沼町下岩崎に所在する天神堂遺跡の発掘調査報告書であります。

この遺跡が立地する勝沼町は、笛吹市一宮町とまたがる釧迦堂遺跡や、宮之上遺跡など著名な縄文時代の遺跡の宝庫であることも、かねてから知られるところであります。中世においては勝沼氏館跡、近世においては甲州街道沿いに勝沼宿が営まれ、原始古代から中世・近世に至り連綿と人々の生活が営まれたことが推察されます。

今回調査対象となりました天神堂遺跡は、縄文時代中期、古墳時代前期、奈良時代、平安時代、近世各時代の遺構・遺物が発見され、中でも縄文時代の井戸尻式土器とされる蛇体突起付深鉢は、広く世間の注目を集めることとなり、縄文時代を代表するモニュメントとして位置付けられ、本県はもとより中部山岳地帯の縄文社会を探るうえで欠かせない遺跡となっております。

また、特別養護老人ホーム「ヒルズ勝沼」建設に伴う発掘調査ということで、調査面積は1376m<sup>2</sup>と限られた調査範囲ではありましたが、古墳時代、奈良時代、平安時代の堅穴住居、掘立柱建物、近世の屋敷地に関わる配石、埋め桶、畝状遺構なども発見されており、当地の歴史的景観の変遷過程が、あざやかに復元されます。

このように古くから豊かな歴史のあるこの地域で、貴重な発見の多かった天神堂遺跡の報告書を刊行できることは喜ばしいことであり、今回の報告書刊行を機会として本市の歴史を再認識する資料となれば幸甚であります。

最後になりましたが、遺跡発掘調査ならびに報告書作成に關係して、多大なるご理解とご協力を賜った関係諸機関および関係者の皆様方に深く感謝申し上げる次第であります。

平成20年3月31日

甲州市教育委員会

教育長 古屋正吾

## 例　　言

- 1 本書は山梨県甲州市勝沼町下岩崎 2089 番地ほか所在の天神堂遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は特別養護老人ホーム建設に伴い、社会福祉法人景雲会より委託を受けて甲州市教育委員会の指導監督のもと、(財)山梨文化財研究所が実施した。
- 3 本書の原稿執筆・編集は櫛原功一が行った。
- 4 発掘調査における基準点測量、空中写真撮影、全体図作成は㈱テクノ・ブランディングによる。
- 5 本書に関わる出土品、記録類は甲州市教育委員会で保管している。
- 6 石器類の石材については、河西学(財)山梨文化財研究所に鑑定していただいた。

- 7 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい(順不同、敬称略)。  
医療法人景雲会 小林孝文・名執昭仁・島村猛、甲州市教育委員会生涯学習課 室伏徹・飯島泉・村田一信、㈱テクノ・ブランディング 森谷忠・柴田直樹、三枝興業 三枝哲男、㈱昭和測量 勝田一郎、山梨県埋蔵文化財センター 小野正文、今福利恵、国学院大学 小林達雄、昭和女子大学 山本暉久、北杜市教育委員会 佐野隆、駿遊堂遺跡博物館 秋山主子、望月秀和、塩谷風季、(財)山梨文化財研究所 平野修・宮澤公雄、河西学・畠大介・鈴木稔、杉本悠樹

## 凡　　例

- 1 図8におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系(原点:北緯36度00分00秒)、東経(138度30分00秒)に基づく座標数値である(世界測地系数値)。各造構平面図中の北を示す方位はすべて座標北である。
- 2 造構および遺物の縮尺は次のとおりである。

聚穴	1:60
炉・竈	1:40
上坑・ピット	1:40
溝	1:100
土師器・陶磁器・石器	1:3
縄文土器・縄文上器片	1:4
土製品	1:2
石器ほか小形石器	2:3
- 3 造構図版中の遺物間実線は接合した2点の接合関係を示す。
- 4 土器断面図中の破線は接合帯を示す。平面図中の遺物表示は、●土師・縄文、▲石器、◆土製品・鉄滓、■須恵器である。
- 5 土層説明における上色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。
- 6 造構図版中の平面・断面図中の遺物番号、遺物実測図番号、写真図版番号、遺物観察表番号は一致している。
- 7 本書図1は国土地理院発行の1/200,000 地勢図「甲府」、図2は1/25,000 地形図「石和」、図7は1/2,500 「甲州市都市計画基本図」、図4は1/20,000 明治22年 大日本帝国陸地測量部を使用した。
- 8 本文の註・参考文献については各節(章)ごとにまとめた。

## 本文目次

例 言	
本文目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	
写真図版目次	
第1章 経 過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経過	6
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の方法と成果	10
第1節 調査の方法	10
第2節 層 序	13
第3節 遺 構	13
第4節 遺 物	23
第4章 総 括	28
第1節 時期別構造と成果・課題	28
第2節 蛇体突起付深鉢について	30
第3節 27号土坑の記号文	33
報告書抄録	
奥 付	

## 挿図目次

図1 遺跡の位置	2
図2 周辺の遺跡	2
図3 京戸川扇状地を中心とした縄文遺跡の分布	4
図4 京戸川扇状地と遺跡	5
図5 (伝)岩崎氏館跡と調査区	8
図6 (伝)岩崎氏館跡周辺小字名図	8
図7 遺跡と周辺	9
図8 調査区とグリッド配置図	10
図9 天神堂遺跡全体図	11・12
図10 試掘坑	13
図11 1号掘立柱建物跡	27
図12 奈良・平安時代の凹み石	29
図13 蛇体突起付深鉢の類例	32
図14 記号文をもつ土器	34
図15 遺物分布図	35

## 表 目 次

第1表 京戸川扇状地周辺遺跡分布図	3
第2表 土器類観察表	36
第3表 石器類観察表	38
第4表 上製品他観察表	38

## 挿写真目次

写真1 27号土坑2展開写真	25
----------------	----

## 図版目次

第1図 1号堅穴、6・58・59号ピット	39
第2図 2号堅穴、47~53・57号ピット	40
第3図 4号堅穴	41
第4図 7・8号堅穴、60・62・63号ピット	42
第5図 8号堅穴	43
第6図 8号堅穴	44
第7図 8・9号堅穴	45
第8図 9号堅穴	46
第9図 10号堅穴、43・44号土坑	47
第10図 11号堅穴、42号ピット、 62・63号土坑、石祠、1号墓	48
第11図 1・2号配石、1~3号埋甕	49
第12図 1~6・8・10・13・14号土坑、 5号ピット	50
第13図 7・9・11・12・15~17号土坑、 10・12・13号ピット	51
第14図 18~24・31号土坑、 14・15・17~20号ピット	52
第15図 25~30・32・36号土坑、 33・34号ピット	53
第16図 33・35・37~42号土坑、 35~37・41・43号ピット	54
第17図 45・50~59・65・66号土坑	55
第18図 60・61・68・69・74・75号土坑、 9・26~29号ピット	56
第19図 64・72・73・79号土坑、1~4・6~8・ 30~32・38・40・44~46号ピット	57
第20図 67・70・71・76~78号土坑、21~25号ピット	58
第21図 54~56・61・64号ピット、1~6号構	59
第22図 1号堅穴 遺物	60
第23図 1・2号堅穴 遺物	61

## 写真図版目次

第24図	4・7号竪穴 遺物	62	
第25図	8号竪穴 遺物	63	
第26図	8号竪穴 遺物	64	図版1 空中写真
第27図	8号竪穴 遺物	65	図版2 1号竪穴
第28図	8号竪穴 遺物	66	図版3 2号竪穴
第29図	8号竪穴 遺物	67	図版4 4・7号竪穴
第30図	9号竪穴 遺物	68	図版5 8号竪穴
第31図	9号竪穴 遺物	69	図版6 8・9号竪穴
第32図	10号竪穴、1・11号土坑 遺物	70	図版7 9・10号竪穴
第33図	12・16・17・19・21・26号土坑遺物	71	図版8 11号竪穴・墓石・石祠
第34図	27号土坑 遺物	72	図版9 1・2号配石・1~3号埋甕・土坑
第35図	27・30・32・38号土坑 遺物	73	図版10 土坑
第36図	39~41・44・45・58・59号土坑 遺物	74	図版11 27号土坑
第37図	60~62・64・67・70号土坑 遺物	75	図版12 完掘状況
第38図	70・74号土坑 9号ピット、畝 遺物	76	図版13 1号竪穴 遺物
第39図	1~3号埋甕・2号配石・4号溝 遺物	77	図版14 2・4・8号竪穴 遺物
第40図	遺構外 遺物	78	図版15 8号竪穴 遺物
第41図	遺構外 遺物	79	図版16 8号竪穴 遺物
第42図	遺構外 遺物	80	図版17 8・9号竪穴 遺物
第43図	遺構外 遺物	81	図版18 9号竪穴 遺物
第44図	遺構外 遺物	82	図版19 10号竪穴・土坑 遺物
第45図	石祠・1号墓 遺物	83	図版20 土坑 遺物
第46図	1号墓 遺物	84	図版21 土坑 遺物・2の記号文 図版22 土坑 遺物 図版23 土坑・埋甕・遺構外 遺物 図版24 遺構外 遺物 図版25 遺構外 遺物

# 第1章 経過

## 第1節 調査の経過

平成18年、医療法人景雲会が甲州市勝沼町下岩崎地内に特別養護老人ホーム建設を計画したところ、予定地は天神堂遺跡に該当することがわかった。景雲会からの文化財保護法第93条の届出を受け、甲州市教育委員会（以下、市教委）では本調査の必要性の有無、本調査範囲の確認をするため平成18年5月に試掘調査を実施した結果、縄文時代中期を主とした遺物が多数出土し、市教委では本調査が必要であるとする旨の報告を事業者あてに提出した。市教委と景雲会との協議を経て、本調査を山梨文化財研究所に委託することとなり、平成18年8月より10月まで本調査を実施することとなった。

調査にあたっては景雲会・甲州市教育委員会・山梨文化財研究所の三者間で協定を締結し（特別養護老人ホーム「ヒルズ勝沼」整備事業工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書）、市教委の指導監督のもとで発掘調査が実施された。

## 第2節 発掘作業の経過

試掘調査は平成18年5月23日～29日に甲州市教委により、東西方向に幅1.5mのトレチ10本（総延長255m）を設定、重機による掘削のち、精査が行われた。

試掘によれば予定地内西側の畠地では表土が極めて薄く、遺構・遺物は確認されなかった。中央部では縄文時代中期の土器が多数出土し、多数の土坑、平安時代の竪穴が確認された。また東側は緩やかに深く傾斜し、地山が確認しにくい状況であることがわかった。こうした状況をもとに、建物建設によって掘削される地点を中心とする約1300m<sup>2</sup>の範囲について、本調査の必要があると判断された。

山梨文化財研究所による本調査は平成18年8月7日～10月14日まで、約2か月間実施した。調査参加者は次のとおり。

### [発掘調査参加者]

秋山高之助・伊井寅・工藤忠誠・窪田信一・小林森雄・手塚松雄・長沢晴雄・波木井祥和・岸本美苗・樋原ゆかり・長谷川規愛

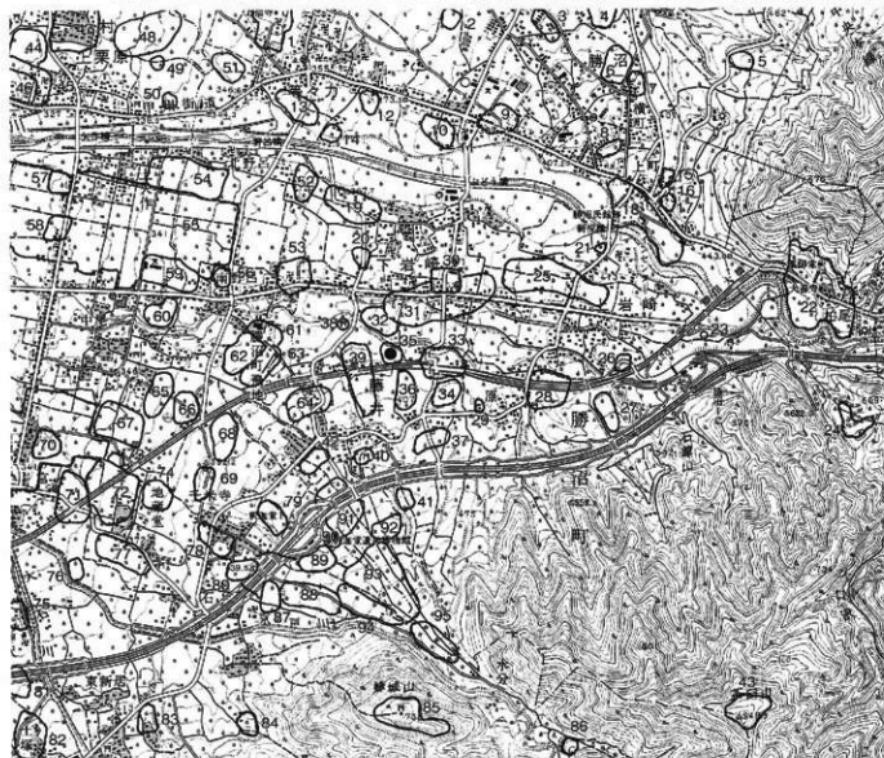
調査範囲は試掘データと建物建設に伴う切り土、盛り土の設計図により市教委で決定した区画に基づく東西45m、南北30mのほぼ長方形の区画である。北向きの斜面に、近世以降の屋敷地といわれる

平坦面2面があり、畠地として利用されてきたが、近年は放置されていたため、予定地内にはカヤ等が生い茂り、藪と化していた。そこで、まず重機で藪を払い、畠地間の東西に存在する切り石積みの石垣を除去し、表土を掘削した。畠2面は斜面を大きく切り盛りして造成された平坦面で、埋め土された畠の北側では表土が深く、切り土された南側では表土が浅く、そうした状況を見きわめながら表土剥ぎを実施した。調査区東端の堆積状況が良好に残る地点では、断面観察のための深掘りを行った。調査区内には地表面に石祠1基があったため、平面図作図ののち取り上げたほか、調査区外、南側には墓石があり、取り扱いについて市教委と検討した結果、調査したうえで移動することとした。

また調査の過程で調査区にかかるように竪穴などの遺構が検出されたことから、1号竪穴については南側、10号竪穴については北側を拡張し、竪穴の全体像を把握した。また1・2号配石については東側にのびる遺構と推測されたことから、東壁を拡張し、全貌を明らかにしたが、周辺にはなお柱穴、土坑など、近世屋敷地の一角をなす遺構面が続いていることがわかった。また北東隅では土師器の出土を追って一部拡張したところ、竈と思われる焼土が検出されたが、焼土を確認するに留めた。同様に南壁西寄りの地点でも16号土坑として調査した遺構が竈らしいと判明されたが、その範囲を確認するに留め、竪穴全体については未確認のままとなった。また南壁中央付近では1号掘立柱建物の柱穴3本が調査区壁面で確認できたが、建物全体は調査区外に大きく広がると思われたことから全貌を明らかにできなかった。

2面の畠のうち、斜面上方の南側上段では盛り土で旧表土が残り、遺構の遺存状況も良好であった。斜面下方にあたる北側、下段では切り土の影響で中央以南の遺構が削平され、さらに近世以降の耕作痕が東側では著しく、古代以前の遺構は主に北側に良好に遺存したが、灌漑用の配管が縱横に通り、遺構を横切っていた。

調査の過程で、27号土坑から優れた造形をもつ蛇体突起の土器が出土し、8号竪穴などで土偶の出土も多かったことから、市教委主催の見学会実施を計画、2006年10月号の甲州市広報に案内を掲載したほか、10月7日には蛇体突起の土器の出土とともに



第1表 京戸川流域周辺遺跡分布図

団番号	遺跡コード	遺跡名	種別	所在地	時期	場所
1	3040074	日高台跡	古跡	等々力字西林	近世	
2	3040033	日高台遺跡	古跡	勝沼字下原	縄文・中世	
3	3040034	日高台遺跡	古跡	勝沼字下原	縄文・中世	
4	3040035	日高台遺跡	古跡	勝沼字下原	縄文・中世	
5	3040036	日高台遺跡	古跡	勝沼字下原	縄文・中世	
6	3040039	日高台遺跡	古跡	勝沼字下原	縄文・中世	
7	3040039	日高台遺跡	古跡	勝沼字下原	縄文・中世	
8	3040076	日高台遺跡	古跡	勝沼字下原・小路	縄文・中世	
9	3040071	日高台之上遺跡	古跡	勝沼字下原之上	縄文	
10	3040030	喜多原遺跡	古跡	勝沼字喜多原	縄文・平安	
11	3040031	喜多原土器窯	古跡	勝沼字喜多原	中・近世	
12	3040032	喜多原遺跡	古跡	喜多原字喜多原	縄文・平安	
13	3040032	喜多原遺跡	古跡	喜多原字喜多原	縄文・平安	
14	3040028	喜多原遺跡	古跡	喜多原字喜多原	縄文・平安	
15	3040071	喜多原遺跡	古跡	喜多原字喜多原	縄文・平安	
16	3040076	喜多原遺跡	古跡	喜多原字喜多原	近世	
17	3040079	寺内寺跡	古跡	喜多原字喜多原	中世	
18	3040040	寺内寺跡	古跡	喜多原字喜多原	縄文・平安・中世	
19	3040050	寺内寺跡	古跡	喜多原字喜多原	縄文・平安	
20	3040051	寺内寺跡	古跡	喜多原字喜多原	平安	
21	3040052	寺内寺跡	古跡	喜多原字喜多原	平安	
22	3040042	大字寺跡	古跡	喜多原字喜多原	平安	
23	3040091	上野御城跡	城跡	上野字御城跡	巾・近世	
24	3040059	五条遺跡	古跡	上野字五条	縄文・平安	
25	3040056	二子山遺跡	古跡	上野字二子山	縄文・平安	
26	3040058	五条遺跡	古跡	上野字五条	中世	
27	3040089	五条遺跡	古跡	上野字五条	縄文	
28	3040051	五条遺跡	古跡	上野字五条	平安	
29	3040052	五条遺跡	古跡	上野字五条	平安	
30	3040053	五条遺跡	古跡	上野字五条	平安	
31	3040061	深谷塚	古跡	上野字五条	平安	
32	3040046	五条遺跡	古跡	上野字五条	平安	
33	3040053	五条遺跡	古跡	上野字五条	平安	
34	3040055	五条遺跡	古跡	上野字五条	平安	
35	3040052	天保山遺跡	古跡	上野字五条	平安	
36	3040045	五条遺跡	古跡	上野字五条	平安	
37	3040050	五条遺跡	古跡	上野字五条	平安	
38	3040043	五条遺跡	古跡	上野字五条	平安	
39	3040045	五条遺跡	古跡	上野字五条	平安	
40	3040085	五条遺跡	古跡	上野字五条	平安	
41	3040094	五条遺跡	古跡	上野字五条	平安	
42	3040094	五条遺跡	古跡	上野字五条	平安	
43	3040040	日高山烽火跡	城跡	日高山烽火跡	平安	
44	139	西山遺跡	古跡	上野原字西山田	縄文・平安	甲斐市
45	178	朝日原御殿跡	城跡	上野原字西山田	中世	甲斐市
46	138	町堀跡	古跡	下野原字町上	古墳・平安・中世	甲斐市
47	141	東山遺跡	古跡	町谷字東山小谷	縄文・平安	甲斐市
48	142	東山遺跡	古跡	町谷字東山	縄文・平安	甲斐市
49	143	東山遺跡	古跡	町谷字東山六	縄文・平安	甲斐市
50	148	山中南遺跡	古跡	上野原字山中六	縄文・平安	甲斐市
51	301	芦原遺跡	古跡	上野原字山中八	縄文・平安	甲斐市
52	149	ツバキ遺跡	古跡	北野原字木田	縄文	甲斐市
53	127	五条城	城跡	北野原字木田	中世	甲斐市
54	2	櫻井	古跡	北野原字木田	縄文	甲斐市
55	115	中条山遺跡	古跡	中条字	縄文・平安	高岡町
56	133	中条里井中条	古跡	中条字里井	古墳・平安	高岡町
57	117	中条里井中条	古跡	中条字里井	古墳	高岡町
58	137	中条里井北吉瀬遺跡	古跡	中条字里井北吉瀬	古墳	高岡町
59	3	中条里井	古跡	中条字里井	縄文・平安	高岡町
60	1	大石遺跡	古跡	中条字大石	縄文	高岡町
61	126	我氏城跡	城跡	南野原字我氏田	中世	高岡町
62	51	我氏城跡	古跡	南野原字我氏田	平安・中世	高岡町
63	61	我氏城跡	古跡	南野原字我氏田	縄文・古墳・平安・中世	高岡町
64	83	木瀬遺跡	古跡	綾井字木瀬	縄文	勝沼
65	75	木瀬遺跡	古跡	綾井字木瀬	縄文	勝沼
66	67	口日山古墳	古跡	中野字口日山	古墳	高岡町
67	76	地蔵塚	古跡	千代字地蔵塚	古墳	高岡町
68	69	木本遺跡	古跡	千代字木本	縄文・平安	高岡町
70	75	木本遺跡	古跡	千代字木本	古墳	高岡町
71	71	白山	古跡	千代字白山	古墳	高岡町
72	72	白山	古跡	千代字白山	古墳	高岡町
73	73	白山	古跡	千代字白山	古墳	高岡町
74	71	白山	古跡	千代字白山	古墳	高岡町
75	67	白山	古跡	千代字白山	古墳	高岡町
76	70	白山	古跡	千代字白山	古墳	高岡町
77	71	白山	古跡	千代字白山	古墳	高岡町
78	75	白山	古跡	千代字白山	古墳	高岡町
79	79	白山	古跡	千代字白山	古墳	高岡町
80	80	古奈斯	古跡	石子原	縄文・古墳・創古	高岡町
81	66	新村	城跡	十字原	平安・中世	高岡町
82	128	新村	城跡	十字原	平安	高岡町
83	67	上二ノ口神	古跡	十字原	古墳	高岡町
84	68	上二ノ口神	古跡	十字原	古墳	高岡町
85	90	上二ノ口神	古跡	十字原	古墳	高岡町
86	89	夏目寺跡	古跡	白子原	古墳	高岡町
87	82	白子原	古跡	白子原	古墳	高岡町
88	81	白子原A	古跡	白子原	古墳・創古	高岡町
89	83	白子原	古跡	白子原	古墳・創古	高岡町
90	3040001	羽根野遺跡複合遺跡	集落跡	十文字丁工崎	羽根野遺跡の場所	
91	81	LII神社	施設	南野原字下原	縄文・平安	高岡町
92	85	朱雀城	古跡	中野原字赤坂	縄文・平安	高岡町
93	86	朱雀城	古跡	中野原字物見坂	縄文・平安	高岡町
94	87	朱雀城	古跡	中野原字山見坂	縄文	高岡町
95	88	朱雀城	古跡	中野原字山見坂	縄文	高岡町
96	88	朱雀城	古跡	中野原字山見坂	縄文	高岡町

に見学会案内を山梨日日新聞で報道し、10月8日㈯に見学会を実施したところ60名ほどの参加者がいた。当日は、プレハブ内を仮の展示室にして復元された蛇体突起の土器などを展示した。

調査は10月12日にはば完掘、清掃のち空洞のためラジヘリによる空中写真を撮影し、その後補足調査を行って終了した。以下に調査抄録を載せる。

#### [調査抄録]

2006年8月7日㈪ 現地にて調査範囲・期間など協議、確認。

8月8日㈫ 重機により表土剥ぎ開始。石祠の地点実測・写真撮影。

8月9日㈬ 表土剥ぎ。石垣除去。

8月10日㈭ 表土剥ぎ。

8月11日㈮ 作業員による調査区壁面精査・遺構確認開始。

8月12日㈯ 基準点杭打設。重機稼働。

8月16日㈬ 重機稼働。

8月17日㈭ 重機稼働。杭打設。

8月18日㈮ 重機稼働。上層の遺物取り上げ。学芸員実習生による体験発掘実施。

8月23日㈬ 遺構確認。土坑確認後、半截。1号竪穴確認。

8月24日㈭ 土坑半截・完掘。県・市農務視察。

8月25日㈮ 1号竪穴調査開始。

8月26日㈯ 1号竪穴で鉄鎌車出土。土坑・ピットなど調査。

8月28日㈪ 1号竪穴に隣接する2号竪穴確認。

9月2日㈯ 4号竪穴掘り下げ。

9月4日㈪ 3・5・6号竪穴を掘り下げるが後に竪穴ではないと判断する。井戸尻式期の完形品出土。4号竪穴蝶実測、除去。大形砥石出土。

9月5日㈫ 遺構確認など。

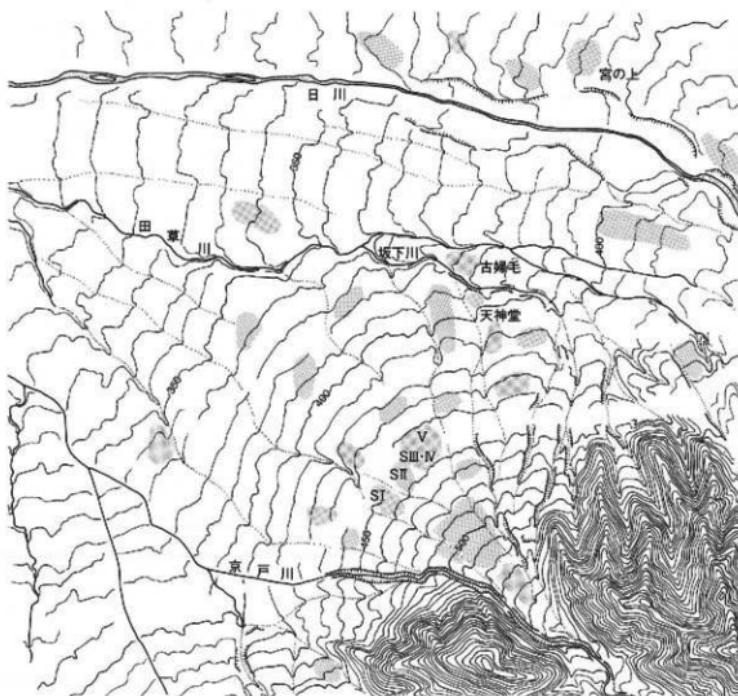


図3 京戸川扇状地を中心とした縄文遺跡の分布 (1/25,000)

9月6日(水) 土坑遺物取り上げ。7号竪穴掘り下げ。  
土坑・ピットなど調査。

9月8日(金) 北側遺構確認。遺物取り上げ。1号竪  
穴窓・2号竪穴炉調査。学芸員実習生体験発掘実  
施。

9月9日(土) ピット群調査。

9月11日(月) 8号竪穴掘り下げ。土坑完掘など。

9月13日(水) 8号竪穴遺物取り上げ。多数の繩文土  
器出土。

9月15日(金) 土坑・8～10号竪穴調査。10号竪穴  
が調査区外へのびることがわかり、人力で調査区  
の拡張を行う。

9月18日(月) 10号竪穴調査。住居完掘。遺物取り上  
げなど。

9月19日(火) 8～10号竪穴の調査。30号土坑周辺  
調査。9号竪穴竈脇より完全な小形甕出土。

9月20日(水) 9号竪穴調査。土坑・ピット掘り下げ。  
9月21日(木) 学芸員実習生体験発掘。9・10号竪穴

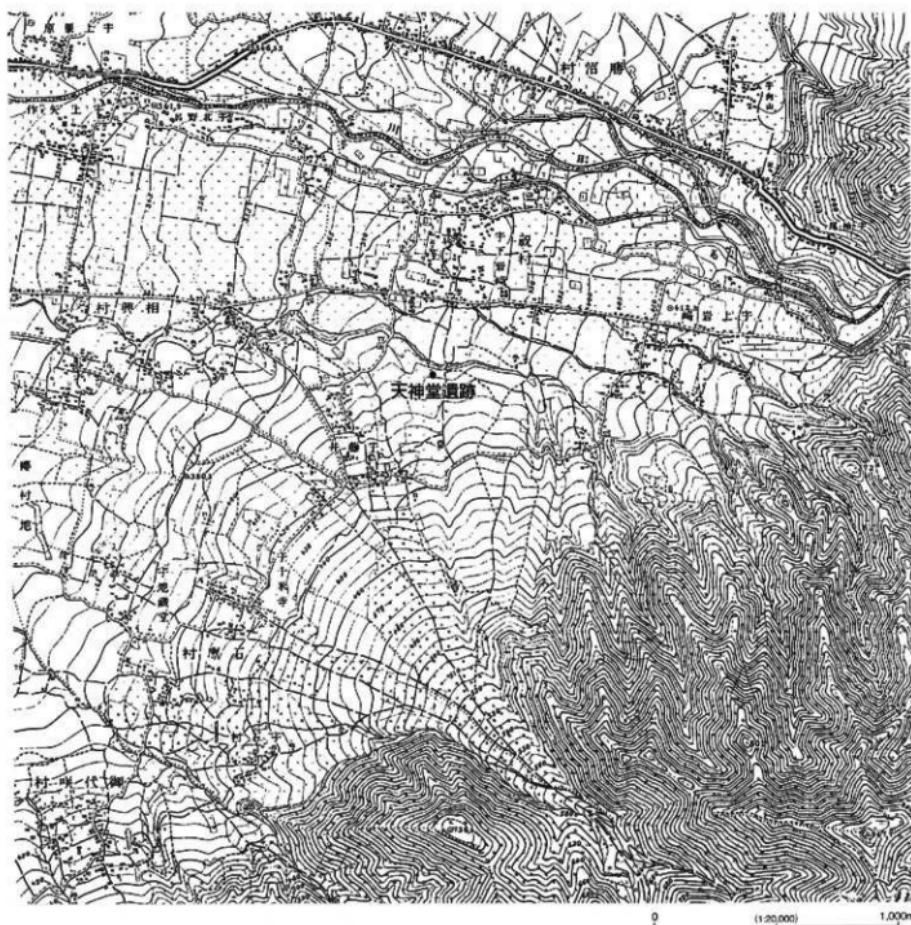


図4 京戸川層状地と遺跡

- 調査。
- 9月22日(金) 9・10号竪穴竈調査。11・12号竪穴調査(12号竪穴としたものは埋壺炉類似の土器埋設遺構で、竪穴にはならず)。
- 9月23日(土) 9～11号竪穴竈調査。土坑・ピット半裁、完掘。
- 9月25日(月) 1号竪穴南側を拡張し、竪穴の完掘を行う。凹み石利用の砥石など出土。10号竪穴竈調査。北側東の遺構確認。
- 9月26日(火) 北側遺構確認。ピット半裁など。
- 9月27日(水) 1・2号竪穴調査。
- 9月28日(木) 1・2号竪穴実測。完掘写真撮影。
- 9月29日(金) 北側東の歛状遺構調査。
- 10月2日(月) 見学会のための準備。土壠・シートの片づけ。
- 10月3日(火) 歛状遺構掘り下げ。
- 10月4日(水) 遺構確認。8号竪穴柱穴内より土偶出土。
- 10月5日(木) 見学会の準備。
- 10月7日(土) 見学会コース設定。山梨日日新聞に蛇体突起の土器についての記事および見学会の案内が掲載される。
- 10月8日(日) 午前中(10時～11時30分) 見学会。その後、1号配石周辺拡張、2号配石検出。東南隅の土師器集中区を拡張したところ、竈と思われる焼土遺構を確認した。
- 10月9日(月) 1・2号配石・土坑調査。
- 10月10日(火) 5号竪穴周辺掘り下げ。1・2号埋甕完掘。1号墓周辺掘り下げ。墓石を移動し、下層を精査。
- 10月12日(木) 調査区全体をラジヘリにより空中写真撮影。
- 10月14日(土) 本日にて調査終了。機材撤収。補足写真撮影など。

### 第3節 整理等作業の経過

整理作業は平成18年10月より平成20年3月まで、笛吹市石和町の山梨文化財研究所整理室において、水洗・注記・接合・復元・実測・トレース・版組・報告書執筆という一連の作業を実施した。また遺構図については、空測写真から図化したデータと遺物の出土地点のデータを合成し作成した。

整理参加者は以下のとおりである。

#### [整理参加者]

岩崎満佐子・梶原薫・佐野靖子・竜沢みち子・矢房静江・手塚由美・田中真紀美・斎藤ひろみ・須田泰美・手塚理恵・望月秀和・小沢恵津子・角屋さえ子・小林典子・小林祐子

なお、27号土坑出土の蛇体突起付深鉢については、同じ土坑から出土した別の完形深鉢とともに平成19年3月5日～4月13日まで「山梨の遺跡展2007」に、また平成20年10月1日～11月24日の平成20年度山梨県立考古博物館第26回特別展「埋められた財宝」に展示し、注目を集めた。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

天神堂遺跡は甲府盆地東南縁にあり、御坂山系から北西へ流下する京戸川が形成した京戸川扇状地（藤井扇状地）の扇端部、甲州市勝沼町下岩崎に位置する。標高392～395mで、北方向に向かって傾斜した地形となり、遺跡付近は台地縁辺に相当し、すぐ北側は崖状地形の下が盆地低位面となってい。遺跡は東西に通する甲府勝沼バイパスに面し、東方に中央道勝沼インターがあることから、今日では周辺は甲府盆地の東の玄関口である。

遺跡が立地する扇状地末端の北側では、日川とその支流の田草川により側縁浸食を受け比高差10m以上の崖線が発達、段丘状の段差を形成し、崖線下では旧氾濫原としての平坦な段丘面となる。遺跡付近の扇状地端部では京戸川の川流路や支流の小河川が形成した網目状の小台地が多数みられ、遺跡西側には田草川の支流の小河川が北流、東側も谷丘地形となることから、遺跡周辺は東西130m、南北80mあまりの小台地面となる。その面に段切りによる平坦面が造成され、北側平坦面は近世以降屋敷地であったと伝えられるが、現状ではブドウ園および畠地であり、崖線の斜面は竹籠となる。

### 第2節 歴史的環境

遺跡が立地する京戸川扇状地扇央部に、中央自動車道建設で調査され、1000個以上の十個の出土で話題となった駿遊堂遺跡群がある。駿遊堂遺跡群では黒曜石製ナイフ形石器を主とする後期旧石器時代の遺物分布を最古とし、縄文時代では縄文早期末～前期初頭、前期後半、中期初頭～後期前半の長期にわたり大規模な集落形成が見られる。中でも中期はほぼ全時期を通して連続的に集落が営まれ、とりわけ中期後半・曾利式期には環状集落が複合した拠点的な集落となる。その後、大塚古墳（現存）を核とする円墳からなる後期古墳群が扇央から扇頂にかけて展開し、奈良・平安時代には堅穴が散在的に分布する。8世紀前半には鉄製人形を埋納した特殊土坑が存在し、堅穴から皇朝十二銭のひとつ「陰平永寶」が出土するなど、一般集落にはない特殊構造・遺物の発見が注目されている。この駿遊堂遺跡群周辺では、1983年の詳細分布調査で京戸川扇状地…帶の遺跡分布状況が把握され、縄文中期を中心とした濃密な遺跡分布が明らかとなっている（駿遊堂遺跡

1983）。

そのほか縄文時代の遺跡としては、天神堂遺跡の北側、崖線を下った段丘面（旧氾濫面）で県営勝沼下岩崎団地建設に伴い古縄毛遺跡の調査が行われ（山梨県 1997）、縄文時代中期後半（曾利Ⅱ式期）1軒、古墳時代中期初頭1軒、奈良時代（8世紀前半）2軒、平安時代（11世紀後半～12世紀前半）1軒のほか、近世初頭の水田面14枚が検出されている。遺物としては諸磁a・b式、五領ヶ台式、晚期～弥生前期（浮游文土器、凸帯文土器）、中世陶器（16世紀後半）などがある。また本遺跡西側、バイパス建設に際して調査が行われた寺平遺跡では、縄文時代中期初頭、五領ヶ台式期を主体とする集落の一部が見つかっている（山梨県 1977）。こうした京戸川扇状地周辺の縄文時代の遺跡分布を整理したのが図3で、遺跡分布の傾向として扇頂部から扇尖部にかけて濃密に分布し、扇端部では大神堂遺跡を含む東側斜面にやや多く、西側の京戸川流域ではやや少ない。また日川左岸の低位段丘面には少なく、右岸には多い傾向が認められる。

中世では天神堂遺跡東200mに、扇端部の浸食崖を利用して構築された（伝）岩崎氏館跡がある（山梨県 1977）。昭和50年のバイパス建設時に南側の堀の一部が調査されたほか、中央を通る町道建設によって調査が実施されている。岩崎氏館跡は立広弊ともいい、武田信光の子信隆より六代を数える岩崎氏の居館と伝えられ、館東北に位置する氷川明神は岩崎氏の氏神とされる。武田氏にならぶ有力勢力であったが、長禄元年（1457）から翌年の守護武田信昌・跡部景家の抗争で岩崎氏一門は滅亡したとされ、「一蓮寺過去帳」に岩崎小次郎・同源次郎の名を見ることがある。発掘調査では15世紀初頭の古瀬戸が出土し、館の年代と一致するという。館の形態は東西120m、南北100mほどの長方形で、南・東・西の三方に幅8～15mの堀を巡らせている。南西隅には一辺20m程度の方形高台部があり、「太鼓楼」と呼称されているといわれ（山梨県 1986）、現在でもバイパス側道脇にわずかな高まりが残る。

天神堂遺跡内には、調査区中央に東西に設けられた石垣があり、南側を削土して北側に盛り土することによって2面の大きな平坦地としている。江戸時代には屋敷地があったとされ、石垣は切込接による精巧なものである。石垣をはさんで北側を下段、南

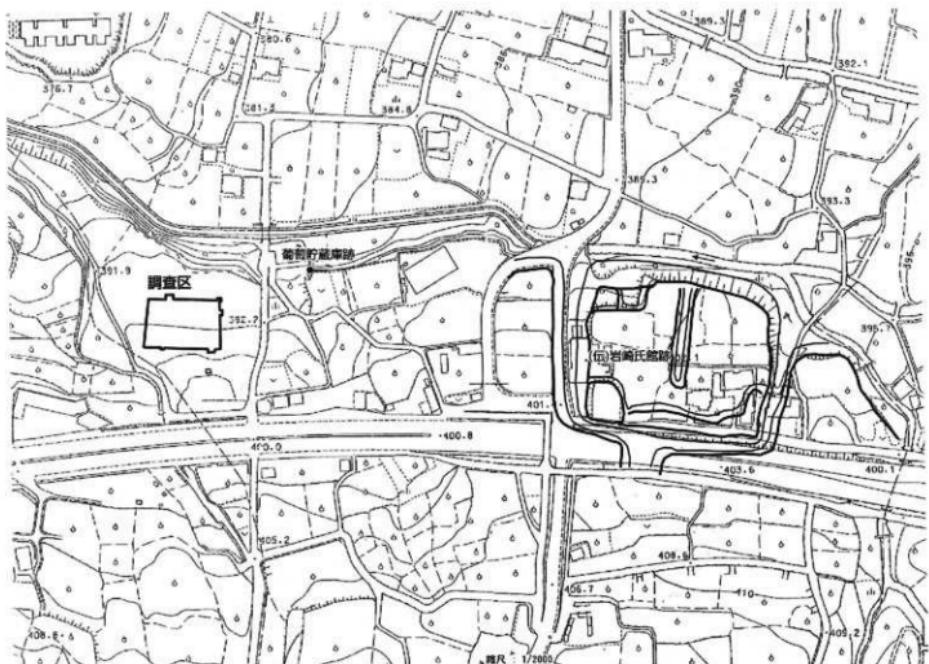


図5 (伝) 岩崎氏館跡と調査区 (1/3,000)

## 岩

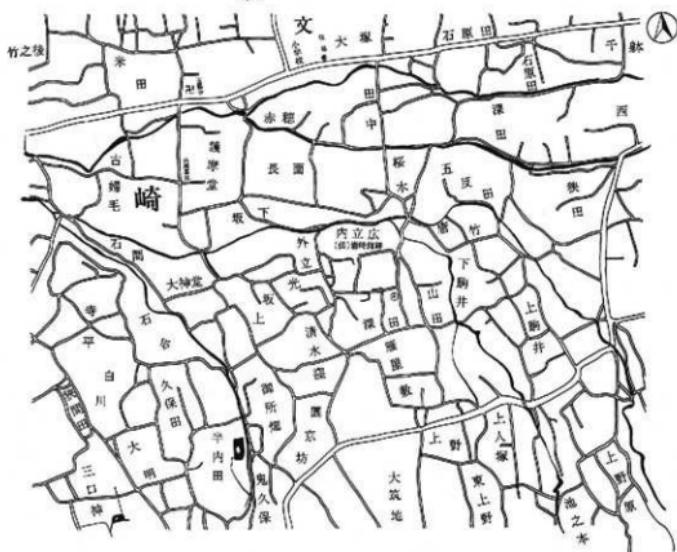


図6 (伝) 岩崎館跡周辺小字名図 (山梨県 1977) [この図では「大神堂」とあるが、「天神堂」の誤りであろう。]



図7 遺跡と周辺 (1/5,000)

個を上段と仮称すると、上段中央には石祠があり、南端には石列間に墓石が立つ。また下段北端の竹簾中にも石造物が存在する。それらは屋敷に関連した屋敷神、屋敷墓と考えられる。また調査の結果、下段東側で屋敷に伴う配石を検出したほか、下段を中心便所遺構と考えられる底面に円形の圧痕をもつ埋め桶遺構を複数基検出し、また畠の畝と考えられる東西方向の畝状遺構のひろがりが見つかり、屋敷周辺の畠と推測できる。

近代の遺構としては、調査区北東に崖の段差に横穴を穿ち、内部を横穴式石室のようにした葡萄貯蔵庫跡がある。大正10年以前に遡り戦前までは使用されたという地下室で、ブドウの出荷調整には重要な施設であった。

#### [参考文献]

- 山梨県教育委員会 1977 「昭和50年度 勝沼バイパス発掘調査に伴う(伝)岩崎氏館跡発掘調査報告書」  
山梨県教育委員会 1977 「昭和50年度 勝沼バイパス道路建設に伴う大切遺跡発掘調査報告書」  
山梨県教育委員会 1977 「昭和50年度 勝沼バイパス道路建設に伴う寺平遺跡発掘調査報告書」  
駿河堂遺跡博物館建設促進期成同盟会 1983 「駿河堂遺跡周辺分布調査報告書」  
山梨県教育委員会 1986 「山梨県の中世城館跡—分布調査報告書」  
山梨県教育委員会ほか 1997 「古姫毛遺跡 県営勝沼团地建設に伴う発掘調査報告書」 山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第142集

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

甲州市教育委員会では、開発予定地内に東西10本のトレーナーを筋状に入れて試掘し、遺物の出方を見ながら遺跡の範囲を確認し、建築設計書に基づいて遺構面を切る部分を中心に本調査の範囲を設定した。

調査地点は休耕地となっていたため、地表にはカヤなどが繁茂していた。それらを重機で片付けたのち、試掘時のトレーナーの状況を参考に重機により表土剥ぎを行った。調査区内の石祠については、位置のみ記録して取り上げた。

表土剥ぎののち、基準点を調査区脇に3本打設し、国家座標に基づいて5mメッシュのグリッドを設定し、杭を打設した。

調査区壁面の精査および土層観察、じょれんによる遺構確認のち、遺構調査を行った。堅穴は十字に十層観察ベルトを残して掘り下げ、1面のみセクション図を作成した。遺物は光波測量機とノートパソコンをつないだ実測システム「遺構くん」(トータルステーション)で3次元データを記録しながら、通し番号・出土遺構名・層位・地点などを付けて取り上げた。堅穴は完掘後、エレベーション図を作成し、貼り床下の掘り方面がある場合は、貼り床を剥いで下層を調査した。堅穴の竈、炉については十字ベルトを残して掘り下げ、セクション図作成後、完掘した。土坑・ピットは南北分を半裁し、セクション図を作成し、完掘した。遺構外遺物についても通し番号とし、光波で取り上げた。

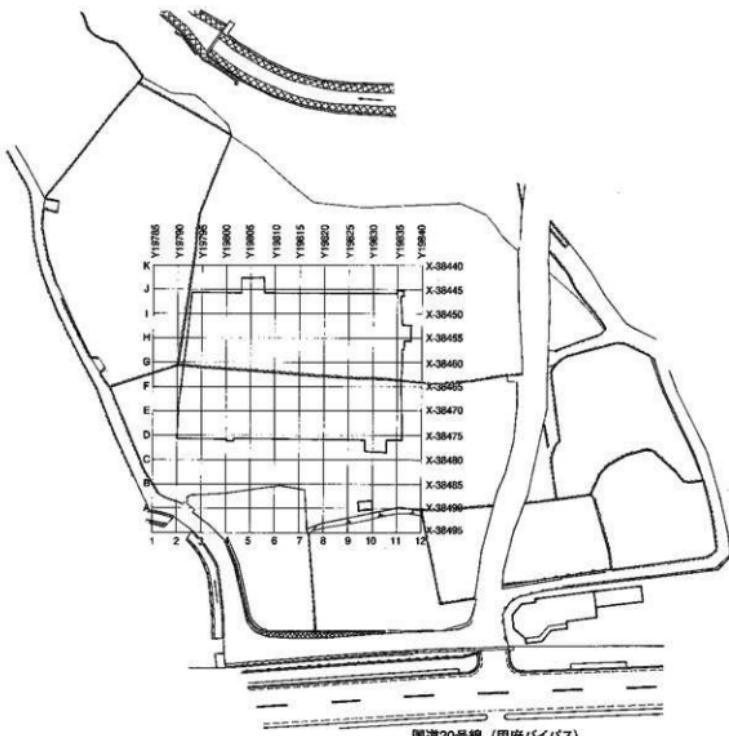


図8 調査区とグリッド配置図 (1/10,000)

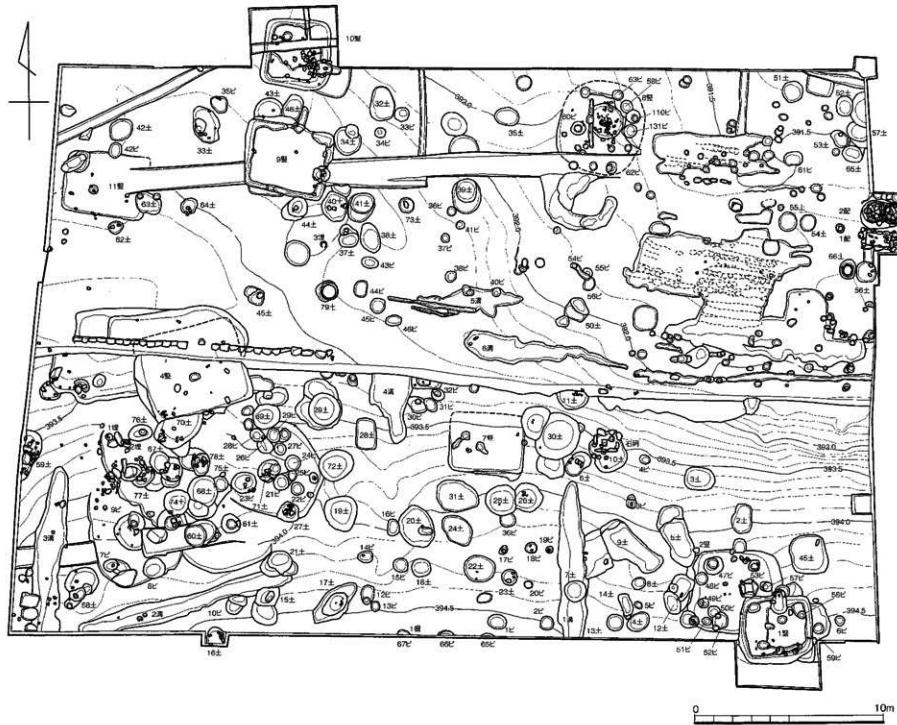


図9 天神堂遺跡全体図 (1/100)

全体の造構調査が終了した時点でカメラを搭載したラジコンヘリで空撮（写真測量）を行い、造構平面図の図化を行った。

## 第2節 層序

調査区東壁中央部に1m四方の試掘坑を設定し、現地表面より深さ1.8m、確認面より1.2m掘り下げた（図10）。土層説明は以下の通りである。

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 表土。盛り土。しまり弱。粘性有。
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 盛り土造成以前の旧表土。しまり・粘性有。焼上粒少。
- 3 褐色土 (10YR4/4) 焼上粒含。堅いブロック状ローム土多。しまり強。粘性有。密。
- 4 褐色土 (10YR4/4) ロームブロックやや少。焼上粒少。しまり強。粘性有。
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) 3層から4層への漸移層。赤色粒少。密。
- 6 喀褐色土 (10YR3/3) 白・赤・黄褐色粒多。しまり・粘性有。
- 7 暗褐色土 (10YR3/4) 径1~2mmの白色粒多。やや粗。しまり・粘性有。

試掘坑地点は、堆積土が非常に厚く、また土壤は粘性が高い。造構確認面とした褐色土は2次堆積的なロームのため、造構確認が難しいところがあった。白地西側では表土は薄く、大形花崗岩風化礫が多数露出し、造構の残りは悪い。とくに尾根筋の高い部分では表土が非常に薄い傾向にあり、扇尖部にあたる积遊堂跡群でもそうした状況が見られた。

## 第3節 造構

調査区は東西45m、南北30mの長方形で、中央に東西の石垣があり、段切りのために北側半分が平坦に削土されていることから、中央付近は造構の残りが悪く、造構数も少ない。下段面（北側）東側では近世の屋敷地に伴う配石・埋め桶造構、畝状造構が分布する。下段面西側には古墳時代から平安時代の堅穴がある。上段面（南側）では全体的に縄文

期を主とする土坑が中央から西側に多い。上段面西側は当初堅穴が複数重複すると考えて仮の堅穴番号（3・5・6号堅穴）を付けて調査を進めたが、確実な炉ではなく、土坑・ピット群として捉えることとした。上段面中央、調査区境には、完掘できなかつたが2間の柱間をもつ掘立柱建物跡があり、堅穴・掘立の組み合わせで構成された奈良・平安時代の集落が台地面に展開することが明らかになった。縄文時代の集落は中期前半の新道式期の堅穴が下段面に1軒、中期後半・普利式期の堅穴が上段面に1軒と、断続的・散在的な方示す。

本稿で扱う造構の種別としては、堅穴住居（堅穴または堅と略）、掘立柱建物（掘立または掘と略）、土坑（埋め桶造構を含む）、ピット、配石、溝、畝状造構（畝）とし、ほぼその順で報告する。土坑とピットの区別としては、直径50cm未溝の柱穴状のものをピット、それ以上のものを土坑とし、土坑は基本的に現場で断面図を作成したが、断面図をとらなかった大型の穴類についてピットとして番号を付けた例がある。そのほか、8号堅穴南側にU字形の掘り方をもつ、いわゆる風倒木痕がある。なおここで造構の位置を説明する際、中央東西の石垣を境に南側を上段、北側を下段と表記する。

### 1号堅穴（第1図、図版2）

（位置）上段、南東隅にあり、北側の2号堅穴（縄文中期）を切る。

（検出状況）調査区内で堅穴の大半が確認されたため、調査区境をセクション面として調査区内の範囲で床面まで掘り、その後拡張を行ない、残りの部分を完掘した。

（主軸）N4°-W。

（形態）東西3.9m、南北3.6mの北窓をもつ隅丸方形プランの堅穴。

（覆土）床面まで地表下95cm、確認面以下35cmで、表土以下の覆土は2層からなる。表土（1層）と2層目の境には鋳化した鉄分の面的な広がりが認められたが、堅穴との関連は不明。

（床）東側の床面が硬く、貼り床面となる。西側は床面が明確ではなく、全体に浅く一段下がる。柱穴的なピットが東壁寄りの2か所に見られるが、西側床面にはなく、柱穴ではない。

（竈）北壁中央付近に竈をもつ。北壁煙道の端部、煙道立ち上がり部分にコ状に組んだ竈石と考えられる石組がある。石組部分は北壁、周溝より屋外側に40cm程度突き出していて、向かって左側の袖石は

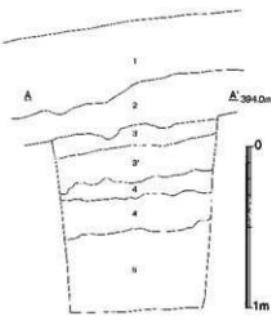


図10 試掘坑 (1:20)

2枚の平石を重ねている。両袖石の中間、壁面ライン上にあたる位置に高さ38cmの支脚石が直立する。支脚石は壁より内側、焚口中央にあるのが通例で本例は変則的である。竈本体を屋外に配置し、竈焚口を北壁に面して構築するタイプの竈と考えられ、壁に竈分の範囲をえぐり、袖石を掘り方壁に固定させるようにコ状の配石を組んでいる。焚口付近には2個体分(6・7)の土師器壺片が焼土層上層に集中し、本竈に設置・使用された豪が遺存した可能性が考えられる。竈焚口付近に広がる焼土層は配石から焚口までを全体的に覆い、支脚石も半ばまで焼土で埋没していた。焼土層が焚口底面とも考えられたが、焼土層の下層に焚口部の掘り方が確認された。

(周溝) 幅約30cmの幅広でやや浅い周溝が全周する。南壁・西壁部分では緩やかに湾曲する。

(出土状況) 竈焚口付近に2個体分の壺片が割れた状態で集中的に出土した。壺の破片と同レベルで竈焼土の直上から土製紡錘車が1点出土している(8)。また調査区拡張後、南壁寄りから小形壺、砥石に転用した凹み石(10)などが出土した。それらの多くは南壁側から竈穴が埋まりかけた状態の凹みへ廻棄したような出方を示し、床面からは30cm程度浮上している。時期は奈良時代前期(8世紀前半)。

#### 2号竪穴(第2図、図版3)

(位置) 上段、東南隅にあり、1号竪穴に東南隅を切られる。

(検出状況) 南北ベルトを残して覆土を掘り下げたところ、東寄りに風化花崗岩4枚からなる石巡炉が見つかり、縄文中期の竪穴と判明した。壁が全面的に不明瞭で、とくに炉裏の東壁立ち上がりと西壁は何度か精査して柱穴との関係で決めた。

(主軸) E5°-Nで東西方向に主軸線をもつ。

(形態) 壁が不明瞭なためプランが明確ではないが、主軸長(東西)48m、交軸長(南北)4.4mの隅丸方形プランで、柱穴は3本から5本と考えられるが、竪穴規模から3本であろう。中央東寄りに方形石圓炉がある。

(覆土) 確認面からの深さは25cmほどで、全体に浅い。

(床) 柱穴を含め、土坑状のピットが複数存在する。それらのうち炉裏の57号ピット、西壁寄りの47・51あるいは52号ピットあたりが柱穴になるかと思われる。53号ピット上面には床面からわずかに浮いて風化花崗岩の平石があり、石の脇に磨製石斧と磨り石が存在した。また石の下に53号ピットが確認され、本竪穴の柱穴の可能性があるが、炉をはさ

んだ南側には53号ピットに対応する柱穴はない。炉裏の57号ピットは深さ約60cmで柱穴にふさわしい。

(炉) 4枚の花崗岩礫を方形に組み合わせた、一辺80cm、深さ32cmの切り炬錐状の炉。南東を除く3つの角に隅石として礫を立てて添えているが、北西角(主軸方向から炉に向かって左前)には右棒端部片を用いる。炉石の隅、または正面中央、奥壁側の炉石裏中央に右棒を立てた事例は各地で散見されるもので、室内空間利用において男性表徵にかかる表示とみられる。奥壁側のが石は正面からみると山形を呈す礫を直立ぎみに立てており、他の3辺よりはひとまわり大きい。ほかの3辺は斜位に立てている。奥壁側の炉石に山形の礫を用いる事例は积迦堂遺跡群に見られる。炉内には南東側にわずかに薄く焼土層が堆積する。

(周溝) 確認できなかった。

(出土状況) 非常に少なく、ほとんどの遺物は床面からわずかに浮上する。53号ピット周辺と西壁寄りで同一個体の深鉢片が出土し、接合関係を示している。

#### 4号竪穴(第3図、図版4)

(位置) 調査区西側中央、上段と下段の境にあり、段切りによって竪穴中央を斜めに切られていて、北側(下段)では床面が消滅している。南側(上段)は良好に遺存する。いくつかの土坑との重複がみられ、縄文中期の土坑・ピットを切る形で竪穴が存在する。

(検出状況) 東西にベルトを設定し、北側から断面を観察した。床面には炭化物が広い範囲で薄く分布し、焼土の散布もみられる。

(主軸) 全体像が不明ではあるが、東西を主軸線とするE15°-N。

(形態) 東西5.9m、南北は推定4.5m以上。

(覆土) 確認面から深さ60~70cmと深い。覆土は2層からなり、炭化物、焼土は床面直上から5cm程度浮上したあたりに分布する。

(床) 全体的に硬化する。古墳前期の竪穴で竈はなく、炉らしい場所も確認できなかった。

(周溝) なし。

(出土状況) 南壁西寄り、中央付近に土師器類が分布する。多くは床面から浮上し、壁に近いほど高い位置から出土する傾向がある。南壁東側寄りからはほぼ床面直上で置き砾と考えられる大型砾石が出土した。そのほか、南東隅では長さ10数cmの大きさ

の似通った縁が6・7点出土している。風化花崗岩が多く、石器として取り上げてはいないが、錐石であった可能性がある。

7号竪穴（第4図、図版4）

（位置）上段は中央に位置する。

（検出状況）東西方向にベルトを残し、掘り下げたところ、北壁は傾斜のため欠失していた。

（主軸）N $5^{\circ}$ ・E。

（形態）東西3.9m、南北3m以上の長方形、あるいは方形の竪穴状遺構。南壁は中段をもち、2重になっている。

（覆土）覆土は確認面から約20cmと浅い。

（床）平坦ではあるが全体に軟質で、硬化面ではなく、凹凸がみられる。

（周溝）なし。

（出土状況）出土遺物は皆無に近い。

8号竪穴（第5・6図、図版5・6）

（位置）下段、北東側にあり、市教委が入れた東西試掘坑に南壁付近を切られる。中央付近では灌水パイプの溝が横切る。

（検出状況）上器が集中して出土したため、竪穴を想定して遺物の取り上げを進めた。試掘坑の東西断面を観察したところ、ごく浅いところに床面があることがわかった。また遺物の下面で石團炉が検出された。壁は西壁の一部がかろうじて見出されたがほかの部分ではなく、柱穴の分布の状況からおおよその竪穴範囲を推定した。

（主軸）柱穴・炉の向きから推測するとN $13^{\circ}$ ・E。

（形態）壁が全体に不明なので、規模はわからないが、南北4.8m、東西4.4m程度か。

（覆土）粘性の高い暗褐色土面に構築され、覆土は約10cmと薄い黒色土。風化縁とともに土器類が堆積し、多くの土器は周辺の粘質土によって器表面がとくに陥くなっていた。

（床）全体に粘質土のため、明確な硬化面は不明。炉周辺は円形に浅く窪む。柱穴・ピットは8本以上あり、直径50cm程度、深さ85cm程度の6本が柱穴となる。

（炉）北側の炉石を欠くコ状の石組で、炉の北側にかけてやや広く厚い焼上が堆積する。炉石は東西40cm、南北30cmと小形で、20~30cm程度の縁を立てて配置する。炉周辺にも焼土・炭化物が散在し、炉を中心約1.8mの範囲が皿状に浅く窪む。とくに炉の周りは土手状に焼土が盛り上がっていた。炉石は東側を除く2方が風化花崗岩で、強く赤変してい

る。

（周溝）ない。

（出土状況）中央付近で床面直上からやや浮上して土器が集中的に出土している。また炉をはさんで東西に位置する60号ピット底面近くから出土した土偶腕と、110号ピット上層から出土した土偶下半身が接合し、1体分のやや大形の土偶となった。同一個体の土偶を故意に割って別々の柱穴に埋めたことが推測される。土偶片が柱穴から出土することは時々あるが、竪穴建設時の儀礼的な意味合いで柱穴に埋納したのではないかろうか。なお60号ピットではピット内から別の土偶片1点が出土し、またピット上面からも別個体1点が出土している。

9号竪穴（第7・8図、図版6・7）

（位置）下段、北西にあり、市教委の試掘坑が東西に切る。またいくつかの土坑と重複する。

（検出状況）試掘時に竪穴および竈が確認され、平安時代の竪穴の存在がわかつていたため、試掘溝北壁をセクション面として掘り下げた。

（主軸）東側にある竈をもとにするとE $14^{\circ}$ ・S。

（形態）東西4.7m、南北3.6mの隅丸長方形で、竈を北・東の2か所にもつ。

（覆土）確認面から深さ45cmで、2層の黒褐色土が堆積する。

（床）全体にやや硬い。

（竈）2つあるうち竈の構築材の残り具合から判断すると東竈が新しく、北竈が古い。東竈は東壁中央わずかに南寄りにあり、袖石と支脚石が残る。竈中央を試掘坑が通るため、煙道の状況は不明である。袖石は南北に1個ずつあり、高さ30cm程度のやや低い石を用いている。支脚石は高さ22cmで、竈中央ではなく、わずかに南寄りの位置に直立する。焼上層は袖石・支脚石の下面に広がる。北竈は北壁中央に位置し、約1mの長い煙道をもつ。焚口掘り方は不明瞭であるが、わずかに薄く焼土層が残る。また向かって左側に袖石の一部と考えられる縁が2個存在する。また竈右側には粘土状の土壤が壁際に細長く存在し、竈構築材の粘土の可能性もある。

（周溝）北・東の竈付近を除き、幅25~40cm程度の周溝が全周する。なかでも南壁中央やや西寄りの部分で周溝内に不連続な部分があり、出入り口に関わる可能性がある。

（出土状況）東側を主に遺物が分布する。多くはやや浮上するが、南東隅で伏せた状態で出土した土師器小形甕（6）など、床直遺物が存在する。また西

壁と東壁側の周溝中から出土した2点のミニチュア土器(13・14)は、平安時代の土製模造品として注目される。

#### 10号竪穴(第9図、図版7)

(位置) 下段、北西側、9号竪穴の北隣りに位置する。灌水用パイプがT字状に入り、床面に切り込んでいる。

(検出状況) 調査区内で南壁付近を確認し、大きく北側に出ていることが分かったため、調査区を拡張し、全体像を把握した。

(主軸) 東竪を基準としてE-6°-S。

(形態) 東西3.5m、南北3.7mの隅丸方形で、東壁南寄りに石組竈をもつ。

(覆土) 地表から確認面まで約35cm、確認面から床面まで約35cm。

(床) 竈中央付近に硬化面が遺存し、南側は床面が不明瞭である。また北東隅にも床面がない部分があつて掘り方状の浅い落ち込みを呈している。また北西隅には深いピットがあるが、柱穴ではない。

(竈) 東壁南寄りに存在し、幅広の周溝内に竈を設置したようあり方である。竈は南側・北側に3個ずつの礫を立て並べた袖石を配し、中央には長さ25cmの支脚石が立つ。竈前面には多数の礫が集石状となって堆積する。竈の前には天井石らしい細長い礫が3本程度、袖石の高さからそれより低い位置に存在し、竈から平行移動して崩れたような残り具合である。ほかに礫があるが、竈の礫にしてはやや多い感じを受ける。袖石は高さ30~35cm。煙道は約40cm東へのびるように存在する。

(周溝) 西・北壁では幅30cm程度、東・南側ではやや広く40~80cmで、南側の周溝は竪穴中ほどへ向かって浅い落ち込みが続いている。

(出土状況) 全体に散在的に覆土中を中心に出している。南壁寄りに2本の棒状礫があり、ほかにも数本竪穴内に分散する。遺物として取り上げていなければ、錘石であった可能性がある。

#### 11号竪穴(第10図、図版7)

(位置) 下段北西隅にあり、63号土坑、43号ピットと重複する。

(検出状況) 竪穴中央に市教委の試掘坑が通るため、東壁を失っている。また北・西壁も竪穴の深さが浅いため、明確ではない。

(主軸) 南壁に基づくとN-10°-E。

(形態) 東西4.3m、南北3.3mの隅丸長方形。

(覆土) 深いところで10cm程度と非常に浅い。

(床) 中央南側に硬化面が残り、貼り床面となつておらず、一部の硬化面に被熱・赤変した部分がみられた。調査時点では炉という認識がなかったが、地床炉であった可能性がある。

(竈) なし。

(周溝) なし。

(出土状況) 覆土中に数片の土師器が存在した。

#### 石祠(第10図、図版8)

(位置) 上段中央、10号土坑の上層にあり、畑中に祀られていた。

(形態) 東西2m、南北1mの長方形に石で区画し、その内部、やや内寄りに平石を置き、石祠を南向きに祀る。石祠は原根部と身部に分かれ、その他の石は未加工の自然石である。

(検出状況) 表土剥ぎの段階で移動する必要が生じたため、平面図作図、写真撮影を行い、石を持ち上げて直下の状況を観察したが、とくに石祠に伴う遺構・遺物はなく、当初からこの場所に設置されたものではないと考えられる。

#### 1号掘立(第27図、図版11)

(位置) 上段、中央南壁ぎわにあり、調査区壁面に柱穴断面が3本並ぶ。

(検出状況) 調査の最終段階で改めて壁面周辺を精査したところ、東西方向の柱穴列を確認した。調査対象地区外へ大きく伸びていることが推測されたため、調査区の状況のみの図化に留めた。

(主軸) 東西列の1列のみのため、東西方向を基準にするとE-3°-S。

(形態) 3本の柱は完掘できなかつたが、直徑70~90cm、確認面からの深さは30~40cm、表土直下からの深さは40~90cmで、平面形は円形。柱穴断面は図の土説に示したとおりで、66号ピットには直徑30cmほどで直立する柱痕が残り、65・67号ピットにも同様の堆積状況が認められた。柱穴間は心内で2.2m。調査区境から南側の構造は不明といわざるを得ないが、掘立柱建物では2間×3間が多いので、一般的な傾向からすれば南北方向に4本(3間)分が並ぶ長方形建物と考えられる。なお柱穴中には遺物がなく、時期は不明であるが、同じ等高線上にあって位置的にも割りと近く、主軸方向も類似する1号竪穴と同時期ではないかと推測でき、8世紀前半の所産と考えておきたい。

#### 1号墓(第10図、図版8)

(位置) 調査区からはずれた南側に位置する。上段の南側を区切る旧石垣の並びにある。調査前は籠に

隠れて先だけが見える状態で直立していた。

(検出状況) 4.3 × 3 m の長方形の調査区を追加設定し、墓石にかかるように南北にベルトを残して全体を掘り下げ、墓石直下の断面観察を行った。

(形態) 墓石は屋根部・墓標部・基部からなる。全体では高さ約0.9mで、北面向く。下層には土坑など関連する遺構はない。屋根部裏面には墓標部を受けるように凹みがあり、下面にはほどがある。基部にはやはり四角い受けがあり、ほど穴をもつ。基部は花崗岩を用い、風化が顕著である。墓標部の文字は判読が難しいが、梵字下に戒名(信上・信女・信士)、下に三位とあることから、3名の先祖供養塔であろう。

#### 1号配石(第11図、図版9)

(位置) 下段、東端にあり、2号配石と平行して南北2列に並ぶ。

(検出状況) 調査区境で水溜状石組が見つかったため、一部拡張して全体像を調査した。

(主軸) 東西軸に基づくと E $5^{\circ}$ -S。

(形態) 東西1.3m、南北0.7mの水溜め状の長方形配石で、石積の石は1段を基本とし、一部2段積み上げ、高いところで高さ40cmを測る。

(覆土) 表土下にはローム土が盛り上がるよう堆積し、黒褐色土をはさんで石組内の覆土となる。とくに滲水によるサビは認められない。内部には礫が数個落ち込んでいる程度で、遺物を伴わない。

#### 2号配石(第11図、図版9)

(位置) 下段、東端にあり、1号配石の北側に並行に位置する。東西に2つ並んだ円形土坑(埋め桶遺構)で、図では東側が西側に切られているように見えるが、写真から判断すると同時存在が十分考えられる状況で接している。

(検出状況) 1号配石を調査中に、北側にも別の配石があることがわかり、拡張を行ったところ、礫多数が雜然と堆積した捨円形の土坑を検出した。その後礫を岡化してはいたところ、東西に接して並ぶ2つの円形土坑が検出され、とくに外周部が円形の溝状になって窪んでいることから、埋め桶遺構と判断した。本来2つの土坑として別々の番号を付けるべきではあったが、配石として報告する。

(主軸) 2つの土坑はE $5^{\circ}$ -Sを向いて並ぶ。30cm程度南側に1号配石がほぼ同じ主軸方向で存在することから、1・2号配石は機能的に近い施設と思われる。江戸の町屋遺構で一般的にいわれるよう、便所の可能性が高い。

(形態) 東側(2号配石A)は直径90~95cm、西側(2号配石B)も90cmではほぼ同形である。

(覆土) 2つの土坑とも同じように内面に礫を詰め込んだ状態であるが、Aの方がやや多く礫が入っている。礫の入り方が同程度なので、同時期に礫を投入したと考えられ、埋め桶廃棄後に何らかの理由で礫を入れたのだろう。

#### 1号埋甕(第11図、図版9)

(位置) 上段西南側、2号埋甕と近い位置に存在する。

(検出状況) 初期、2号埋甕とともに竪穴に伴う埋甕と推定したが、調査終盤で竪穴ではないという判断に至り単独埋甕とした。埋甕を取り上げたところ、2号埋甕とは時期も全く違うものであることから、両者の関連性はないと考えられる。

(形態) 埋設ピットの大きさは直径40cm、深さ30cm。

(覆土) 土器を埋設するピットがやや深く図示されているが、掘り過ぎているらしい。

(出土状況) 新道式期の土器胴部片を埋めているが、土器は全周せず、斜めであり、埋甕ではないかもしれない。

#### 2号埋甕(第11図、図版9)

(位置) 上段南西側、1号埋甕の東、50cmのところにある。

(検出状況) 1号埋甕と同時に確認された。1号埋甕とともに初期、竪穴に伴う屋内埋甕かと考えたが、周辺の遺構のあり方から屋外埋甕とした。

(形態) 埋甕ピットの大きさは直径50cm、深さ25cmで、曾利Ⅳ式期の埋甕がやや斜位に正位埋設されている。

(覆土) 土器内上部には土器の直径と同じくらいの梢円形礫が入り込んでいる。

(出土状況) 土器は口縁から底部まである。

#### 3号埋甕(第11図、図版9)

(位置) 下段、9号竪穴南側に位置する。

(検出状況) 確認面精査中に検出し、当初は炉体土器ではないかと考え、12号竪穴炉と名付け作業を進めた。しかし土器内に焼土粒はごく微量で被熱面ではなく、炭化粒は皆無であり、周囲にも竪穴としての壁・柱穴などの遺構が伴っていないことから、単独埋甕とした。

(形態) 埋甕ピットは直径40cm、深さ15cm程度。長胴甕タイプの深鉢胴部を正位埋設する。

(覆土) 土器内外とともに焼成を受けた被熱面はない。

(出土状況) 土器は口縁部、胴部下半を欠く円筒形で、高さ20cm程度。

### 1号土坑（第12図、図版9）

（位置）上段南東隅、1号竪穴のすぐ北側にある。

（形態）東西1.9m、南北2.1mの隅丸方形の小竪穴状遺構で、主軸方向はN8°W。深さ20cm。底面は全体に著しく被熱する。ただし炭化材ではなく、内部で當時焼成が行われたような状況ではなく、どのような性格の遺構か不明。北東隅、底面に棒状の自然疊がある（1）。遺物は少なく、底面に密着するようにならう。少量の土器片（9世紀後半）が数片ある。ほかに新道式土器片がわずかにあるが、本土坑は9世紀後半とみてよいだろう。

### 2号土坑（第12図）

（位置）上段東側、2号竪穴北側。

（形態）南北1.5m、東西1.1mの不整楕円形で、覆土はしまりがやや弱く、搅乱状。土器片が少量出土している。

### 3号土坑（第12図）

（位置）上段東側、2号竪穴北側に位置する。

（形態）東西1.6m、南北1.2mの楕円形。深さ55cm、断面鍋底状でやや深い。遺物は土器片が少量ある。

### 4号土坑（第12図、図版9）

（位置）上段東側、2号竪穴の西側にあり、8・13号土坑に近い。

（形態）1.25×0.9mの楕円形。深さは60cm、断面鍋底状で深い。前期初頭と思われる織維土器が少量出土している。

### 5号土坑（第12図）

（位置）上段東側で2号竪穴北西隅に接する。

（形態）南北3.4m、東西1.5mの不整形土坑で、2つの土坑が南北に連続したような形態で、断面をみると北側の落ち込みが南側を切るような土層が観察される。繩文土器片がわずかに出土地してある。

### 6号土坑（第12図）

（位置）上段東側、1号溝北端に位置し、10・30号土坑に近い。

（形態）西側が深い楕円形で、1.4×1m。中央に疊が3個ほど並ぶ。疊を境に西側が深さ50cmと一段低くなる。曾利式土器？数片が出土している。

### 7号土坑（第13図）

（位置）上段東側、1号溝中にある。

（形態）1号溝を掘り下げたところ確認されたもので、直径1.1mの円形土坑。深さは溝確認面からだと50cmで、断面はボール状。

### 8号土坑（第12図）

（位置）上段東側、2号竪穴西。

（形態）60×70cmのほぼ円形の土坑で、深さ44cm、断面鍋底状。

### 9号土坑（第13図）

（位置）上段東側、2号竪穴・5号土坑西に位置する。

（形態）南北3.6m、東西1.7mの溝状の不整形土坑で、深さは約50cm。縄文前期初頭かと思われる土器片が出土している。

### 10号土坑（第12図）

（位置）上段東側、1号溝北端で、6・30号土坑に近い。

（形態）東西1.7m、南北2.1mの不整形。深さ20cmで、断面皿状。底面には凹凸がある。縄文？土器片が少量出土。

### 11号土坑（第13図）

（位置）下段に近い上段、1号溝北側にあり、下段造成によって土坑の北半分を消失する。

（形態）東西1.7m、南北は現状で1mほど残り、円形土坑と思われる。深さ40cmで、断面鍋底状。土器片は中央付近に散在し、小疊も数個見られる。遺物は覆土中に縄文土器、焙烙片があり、近世の土坑と思われる。

### 12号土坑（第13図）

（位置）上段東側、2号竪穴西側に接する。

（形態）いくつかの土坑が重複したような不整形で、南北2.2m、東西1.3m、深さ約30cm。中央から北側に縄文前期初頭の織維土器片がやや多く出土した。

### 13号土坑（第12図）

（位置）上段東側、2号竪穴西側で、4・8号土坑に近い。

（形態）直径80cmの円形で、深さ20cmと浅く、断面皿状。

### 14号土坑（第12図）

（位置）上段、東寄り、2号竪穴西。

（形態）1.2×0.6mの楕円形土坑で、深さ約20cm。

### 15号土坑（第13図）

（位置）上段西側、2号溝に切られるように存在する。

### 16号土坑（北側）

（形態）2つの土坑が重複した形態で、両者合わせて東西1.3m、南北2mの不整形。深さは15cmと浅く、断面は皿状を呈す。時期不明の土器片出土。

### 16号土坑（第13図、図版9）

（位置）上段西側、調査区に位置する。調査区南壁面で北側から断面観察し、窓状であったため南側へ80cmほど拡張したが、全体像は把握できなかった。

（形態）直径80cm以上の円形土坑、あるいは竪穴北窓かと思われる。深さは10cm程度と浅く、底面は被熱して焼土ブロック化する。風化疊が東側に並ぶ

ようにして存在し、一部は高さ20cmと袖石にしてはやや低いものの、袖石的に配置されている。土師器甕片が焼土層上面から複数個体出土し、遺物の出方も竪である。

#### 17号土坑（第13図）

（位置）上段西側、2号溝の東。

（形態） $3 \times 1.4$ mの細長い楕円形で、中央に $1.5 \times 0.9$ mの楕円形土坑を入れ子にする。最も深いところで32cmで、断面は皿状。中央土坑内、底からやや浮いて縄文中期土器片がまとまって出土している。

#### 18号土坑（第14図）

（位置）上段中央、1号掘立北側に位置する。

（形態）直径1mの円形土坑。深さ26cm、断面形は鍋底状。

#### 19号土坑（第14図）

（位置）上段、中央やや西寄り。

（形態） $1.9 \times 1.7$ m、深さ約20cmの不整円形で、五領ヶ台式土器片が少量出土。

#### 20号土坑（第14図）

（位置）上段、ほぼ中央。

（形態） $2.1 \times 1.8$ m、深さ40cmの不整円形で、縄文？片が出土。

#### 21号土坑（第14図）

（位置）上段西側、2号溝東端に位置する。

（形態）東西2m、南北1.35mの不整形で、深さ45cm。断面形はポール状。新道式土器片が覆土上層からやや多く出土している。

#### 22号土坑（第14図）

（位置）上段中央、やや南寄りにある。

（形態） $1.75 \times 1.4$ mの楕円形。深さ10cm、断面皿状。覆土はやや粗い。

#### 23号土坑（第14図、図版10）

（位置）上段中央、22号土坑の東隣。

（形態）直径85cmの円形で、深さ32cm、断面は鍋底状。内部に礫が3個入る。縄文中期土器片が少量出土。

#### 24号土坑（第14図）

（位置）上段、ほぼ中央。20号土坑の東側。

（形態） $1.9 \times 1.4$ mの不整楕円形で、深さ18cm。縄文前期初頭？の無文織維土器片が出土。

#### 25・26号土坑（第15図）

（位置）上段、7号竪穴南側に位置する。

（形態）西側に25号土坑、東側に26号土坑があり、両者が接している。25号土坑は直径1.6m、26号土坑は直径1.5mとほぼ同じ大きさであるが、25号土坑は断面鍋状で深さ70cmと深く、26号土坑は断

面ポール状で深さ50cmとやや浅い。断面観察では切り合ひ関係が明瞭ではなかったが、26号土坑が25号土坑を切るようである。25号土坑では早期末条纹土器かと思われる土器片が出土した。また26号土坑中央、上層では縄文中期、曾利II式期の深鉢口縁部が出土している。

#### 27号土坑（第15図、図版11）

（位置）上段南西、19号土坑西側に位置する。造構確認の段階で、周辺を当初堅穴と判断し、ピットなどを掘り下げていたところ見つかったもので、堅穴に伴う土坑かと考えたが、最終段階で確実に堅穴とする根拠がないことから、土坑群と判断した。

（形態）直径1.1m程度の円形土坑で、内部に2個体の深鉢（1・2）が南側に倒れかかるように出土した。土器は西側に完形、無傷の横文をもつ土器（2）があり、その東側に蛇体突起をもつ深鉢が胴上半と下半で折れるようにして出土し（1）、上半は下向きで、横文の上器を復すように出土している。蛇体突起の深鉢は一部破片が不足するものの、かなり揃っていて、本来は完形品として置かれたものと思われる。土器蓋には風化花崗岩の礫があり、また土坑底面からは打製石斧1点などが出士している。

#### 28号土坑（第15図）

（位置）上段中央西寄り、4号溝西側にある。

（形態）南北1.65m、東西1.05mの隅丸長方形で、深さは10cmと浅い。北側への傾斜面に沿って底面は傾斜する。近世以降の搅乱状の土坑。

#### 29号土坑（第15図、図版9）

（位置）上段北寄り、4号堅穴と4号溝の中間に位置する。

（形態）直径1.65mの大型円形土坑で、深さは85cmと深い。断面鍋底状。周辺に浅い掘り方が図示されているが、土坑本体は中央の円形土坑である。前期初頭かと思われる土器片出土。

#### 30号土坑（第15図、図版10）

（位置）上段、1号溝北側、7号堅穴東に位置し、36号土坑と重複する。

（形態）2つの断面ポール状の人形土坑が東西に連結した状態で、30号土坑は南北2.5m、東西2.2m、36号土坑は南北1.8m、東西1.2mである。出土遺物は少ないが、上層を中心に井戸尻式期の深鉢把手部が散在し、同一個体として接合した。U縁部以下の破片はほとんどなく、把手部だけが土坑内に入れられたような特異な出土状況である。

#### 31号土坑（第14図）

(位置) 上段、ほぼ中央。

(形態)  $2.3 \times 1.7$  m の不整円形で、深さ 15cm。曾利Ⅱ式の土器片が出土。

### 32号土坑（第15図）

(位置) 下段、10号竪穴東側にある。33・34号ビットが近くに存在する。

(形態) 南北 1.8 m、東西 1.3 m の楕円形で、底面には凹凸がある。覆土上層、確認面のレベルで条痕をもつ深鉢形の織維土器が出上した(1)。時期は前期初頭か。

### 33号土坑（第16図）

(位置) 下段、北西隅寄りで9号竪穴西側に位置する。

(形態) 南北 2 m、東西 1.4 m の不整形で、西側がビット状にくぼみ、深さ 30cm を測る。時期不明の土器片が出土している。

### 34号土坑

(位置) 下段、9号竪穴北東隅に接する搅乱坑。

(形態)  $1.6 \times 1.4$  m の円形土坑で、断面皿状。北側にビット状の落ち込みが重なる。井戸尻式土器片出土。

### 35号土坑（第16図）

(位置) 下段、中央北寄りで、8号竪穴西側に位置する。

(形態) 東西 1.3 m、南北 1 m の楕円形で、深さ 40cm、断面鍋底を呈す。しまりがやや弱いことから新しい時期の可能性があるが、前期初頭と思われる無文の織維土器片がまとまって出土し、その時期とも考えられる。

### 36号土坑（第15図）

(位置) 上段、7号竪穴北東隅、30号土坑西側に隣接する。

(形態) 曾利 I → II 式土器片出土。

### 37号土坑（第16図、図版）

(位置) 下段、9号竪穴南東、40・41号土坑の南側、38号土坑の西側に位置する。

(形態)  $1.2 \times 1.1$  m の不整形で、深さ 20cm と浅く、断面皿状。時期不明の土器片出土。

### 38号土坑（第16図）

(位置) 下段西側、9号竪穴南東。37号土坑の東側。

(形態)  $1.6 \times 1.1$  m の楕円形で、深さ 35cm。断面鍋底状。新道式土器片が出土。

### 39号土坑（第16図、図版10）

(位置) 下段中央、8号竪穴と9号竪穴の中間付近に位置する。周辺には36・41号ビットなどがある。

(形態) 南北 1.8 m、東西 1.5 m の楕円形で、北側に入れ子状に直径 1.2 m の一段深い円形土坑状の掘り

方をもつ。2つの土坑の重複とすべきではあるが、同一土坑として調査した。北側の深い土坑は深さ約 50cm で、中央下層を中心に縄文土器片がまとまって出土している。織維土器の口縁部の大型破片を主とする。

### 40号土坑（第16図、図版10）

(位置) 下段、9号竪穴南東隅、41号土坑の西隣。

(形態) 南北 1.5 m、東西 1.4 m の不整形を呈した土坑で、内面は凹凸がある。北側に別のビットがあり、重複するが、ここでは 40 号土坑の一部としておく。上層に疊 3 ~ 4 個がある。猪沢式～新道式期の土器片、土偶片が出土。

### 41号土坑（第16図、図版10）

(位置) 下段、9号竪穴南東寄りにあり、周囲には 37・38・40 号土坑などが集中する。

(形態) 南北 1.6 m、東西 1.3 m の楕円形であるが、北寄りに直径 1.1 m の円形土坑があり、一段深くなっている。断面を作図した位置では浅い土坑となっているが、実際は深さ約 50cm と深く、断面は桶状である。古墳時代後期～奈良時代前期の坏片、井戸尻式土器片が上層を中心で出土した。

### 42号土坑（第16図）

(位置) 下段、北西隅の 11 号竪穴北壁に近い位置にある。

(形態) 東西 1.35 m、南北 1.1 m の楕円形で、深さ 20cm、断面鍋底を呈す。前期初頭かと思われる織維土器片が出土。

### 43号土坑（第8図）

(位置) 下段、9号竪穴北壁、煙道の西側にあり、竪穴に切られている。

(形態) 東西 1.5 m の円形で、深さ 15cm 程度の断面皿状の土坑。東側にも別の土坑が重なる。前期初頭かと思われる土器片が出土している。

### 44号土坑（第9図、図版10）

(位置) 下段、9号竪穴南壁に接して存在する。

(形態) 南北 1.5m、東西 1m の不整形であるが、上坑本体は直径 1.1m の円形である。縄文？土器片が少量出土したほか、覆土上層に疊 2 個が出土している。

### 45号土坑（第17図、図版10）

(位置) 下段、西寄り、4号竪穴北東側にある。

(形態)  $1 \times 0.9$  m の不整形で、2つのビットが重複したような形態である。底面から近世のかわらけなどが出土した。土坑は下段造成後の構築と考えられ、近世の培塿片、かわらけ小皿片が出土し、近世以降の土坑といえる。

#### 46号土坑（第8図）

（位置）下段、9号竪穴北塗の煙道西側に位置する。  
（形態） $1.2 \times 1\text{ m}$ の楕円形土坑で、縄文？土器片が出土。

#### 50号土坑（第17図）

（位置）下段、中央やや東寄りに位置する。  
（形態） $1.3 \times 1.2\text{ m}$ の不整形で、底面に露出した風化花崗岩を削り込んだ搅乱状の土坑。遺物はとくにない。

#### 51号土坑（第17図）

（位置）下段、北東隅に位置する。  
（形態）直径 $1.1\text{ m}$ の円形土坑。深さは $15\text{ cm}$ で、断面は皿状。

#### 52号土坑（第17図）

（位置）下段、北東隅にあり、壁にかかる大形の落込みと重複する。  
（形態） $1.05 \times 0.85\text{ m}$ のほぼ円形で、深さ $24\text{ cm}$ 、断面は鍋底状。

#### 53号土坑（第17図）

（位置）下段、北東隅にあり、57・65号土坑にほぼ接する。  
（形態） $1.1 \times 0.7\text{ m}$ の楕円形。深さ $22\text{ cm}$ 、断面鍋底状。

#### 54号土坑（第17図）

（位置）下段、東側、2号配石西にあり、55号土坑と並ぶ。  
（形態）直径 $80 \times 90\text{ cm}$ の円形土坑で、深さは $10\text{ cm}$ と浅い。底面は平らで、断面は鍋底状。埋め桶遺構の一種か。

#### 55号土坑（第17図）

（位置）下段、東側、2号配石の西。  
（形態） $0.9 \times 1\text{ m}$ の円形土坑で、深さは $15\text{ cm}$ と浅い。  
断面は鍋底状。遺物はとくになし。断面では底面外周が浅く窪むようにもみえることから、埋め桶遺構であった可能性がある。

#### 56号土坑（第17図）

（位置）下段、調査区東端にあり、66号土坑と隣接する。  
（形態）直径 $1.1\text{ m}$ 程度の円形土坑で、深さ $28\text{ cm}$ 。  
断面は桶状である。内部には縄が3個入っている。

底は平坦で、溝はないが、桶の底面压痕をもつ隣の66号土坑同様に本来埋め桶遺構であったと思われる。近世の陶器片出土。

#### 57号土坑（第17図）

（位置）下段、北東隅、52・53・65号土坑に近い。  
（形態）調査区外にかかり、また北側に大きな落ち

込みと重複するが、 $1.2 \times 0.9\text{ m}$ 、深さ $40\text{ cm}$ で、断面はボール状。遺物はとくにない。

#### 58号土坑（第17図）

（位置）上段、南西隅、3号溝東側にある。  
（形態） $1.8 \times 1.4\text{ m}$ の楕円形土坑にいくつかのピットが重複したもので、深さは $15\text{ cm}$ 程度で、断面皿状。確認面から磨製石斧（1）が出土したほか、新道式土器片等が上層面を中心に散在する。

#### 59号土坑（第17図）

（位置）上段、調査区西壁にかかるようにして検出されたやや大型の落ち込み。

（形態）東西 $2.6\text{ m}$ 、南北は壁にもぐっているが現状では $1.1\text{ m}$ 。全体では土坑ではなく竪穴状の遺構になる可能性もあるが、中央の大きな疊が露出したところを境にした2つの土坑の連続とも考えられる。深さ $20\text{ cm}$ と浅く、断面は皿状である。土坑北側、壁に沿るようにして石皿（1）が出土した。中期？土器片が出土。

#### 60号土坑（第18図）

（位置）上段、西側、4号竪穴南側にある。  
（形態）西側に $1.2 \times 1.1\text{ m}$ 、深さ約 $60\text{ cm}$ 、断面鍋底状の円形土坑があり、それと重複するように東側に深さ $20\text{ cm}$ の浅い土坑があり、全体では $1.7 \times 1.3\text{ m}$ の楕円形を呈す。覆土中位から曾利I式期長胴壺の無文口縁部片が出土したほか、井戸尻式土器片も出土。

#### 61号土坑（第18図）

（位置）上段、西側、4号竪穴南。60・68号土坑に近い。  
（形態）直径 $1\text{ m}$ の円形土坑中に直径 $50\text{ cm}$ 、深さ $90\text{ cm}$ の円形、断面円筒形土坑がある。柱穴と思われ、75号土坑との関連が伺える。

#### 62号土坑（第10図）

（位置）下段、北西隅、11号竪穴南壁近くにある。  
（形態） $70 \times 80\text{ cm}$ の楕円形で、深さは $12\text{ cm}$ と浅い。  
断面は皿状。土坑内、底面直上に東向きに横位で無文深鉢が出土している。土器の確認面側は欠失するが、本來は完存したのであろう。

#### 63号土坑（第10図）

（位置）下段西側、11号竪穴東壁と重複する。  
（形態） $1.4 \times 1.1\text{ m}$ 、深さ $20\text{ cm}$ 程度の不整形を呈した浅い皿状土坑で、底面には凹凸がある。遺物はとくにない。

#### 64号土坑（第19図）

（位置）下段、北西隅、11号竪穴東側に位置する。  
（形態） $80 \times 90\text{ cm}$ の略円形土坑で、深さ $8\text{ cm}$ 、断面

皿状。南側に蝶が集まり、土師器羽豪片などがわずかに散在する。

#### 65号土坑（第17図）

（位置）下段、北東隅にあり、53・57号土坑に近い。

（形態） $1.1 \times 0.85$ mの楕円形で、断面皿状。

#### 66号土坑（第17図）

（位置）下段、東端の調査区境に近い位置にあり、56号土坑が東側に隣接する。北側には1・2号配石がある。

（形態）直径 $1 \times 0.8$ m、深さ28cmの円形土坑で、底面にひとまわり小さい直径60cmの円形の溝が巡る。いわゆる埋め桶遺構で、桶底の圧痕が残ったものである。トイレと考えられ、2号配石内の2つの埋め桶遺構とも関連するものであろう。近世の陶磁器片出土。

#### 67号土坑（第20図）

（位置）上段、西側、4号竪穴南にあり、77・78号土坑と接する。

（形態）2つの円形土坑が重複したような形態で、 $1.8 \times 1.3$ mのダルマ形。中央に蝶が並ぶ。猪沢式～新道式土器片のほか曾利II式土器片が多く出土した。

#### 68号土坑（第18図）

（位置）上段、西側、4号竪穴南。74・75号土坑と接する。

（形態）直径1.55mの円形土坑で、深さ85cm。断面は鍋底状。上層から確認面上包含層に新道式土器片がやや多く出土した。

#### 69号土坑（第18図、図版10）

（位置）上段西側、4号竪穴南東隅に位置する。

（形態） $1.4 \times 1.3$ mの略円形土坑で、深さ75cm、断面ボール状。新道式土器片が出土。

#### 70号土坑（第20図）

（位置）上段、西側にあり、4号竪穴に切られる。

（形態）北側が欠如するため、全体像は不明であるが、2.7m以上×1.9m、深さ92cmと深く、断面鍋底状である。覆土上層から南向きに倒れるように、横位で縄文中期の深鉢が出土した。またそのほか主に上層から曾利II式土器片等が出土している。

#### 71号土坑（第20図）

（位置）上段、西側、27号土坑北に位置する。

（形態） $1.2 \times 1$ mの楕円形土坑で、深さ約20cm。角柱状の大型蝶の周囲に小蝶数個が集まる。井戸尻式土器片が出土。

#### 72号土坑（第19図）

（位置）上段、西寄り。4号竪穴東測。

（形態） $1.8 \times 1.6$ m、深さ28cmの楕円形で、断面皿状。猪沢式新段階の土器片が出土。

#### 73号土坑（第19図）

（位置）下段、西寄り。9号竪穴東測。41号土坑と39号土坑の間。

（形態）直径約80cmの小形円形土坑で、深さ約30cmの鍋底状。

#### 74号土坑（第18図）

（位置）上段、西側。68号土坑西隣。

（形態）直径1.4mのほぼ円形で、深さ約80cm。新道式土器片、曾利II式土器片が出土。

#### 75号土坑（第18図、図版）

（位置）上段、西側、4号竪穴南側。68号土坑の東側に接する。68号土坑調査中に検出された。

（形態）直径84cm、深さ85cmの円筒形で、柱穴状。上層に竪穴があったとすれば柱穴候補となる。覆土の3層は焼土粒をやや多く含んでいて、柱痕状に入り込み、注意される。曾利II式土器片が出土。

#### 76号土坑（第20図）

（位置）上段、西側、4号竪穴南西隅付近に位置する。

（形態） $1.25 \times 0.85$ mの楕円形で、深さ53cm。断面鍋底状。曾利II式土器片のほか新道式土器片がやや多く出土。

#### 77号土坑（第20図）

（位置）上段、東側、4号竪穴南。67号土坑などいくつかの土坑・ピットの集合体となっている。

（形態） $1.7 \times 1$ mの2つの土坑の重複。深さ40cmで断面はボール状。確認面より上層を中心に新道式土器がやや多く出土している。土坑に作うものは少なく、包含層の遺物が多い。

#### 78号土坑（第20図）

（位置）上段、西側、4号竪穴南隣に位置する。

（形態） $1.6 \times 1.1$ mの不整形土坑で、2つの土坑が重複した形態である。東側では円形土坑上層、確認面に蝶が集まる。時期不明の無文土器片が出土。

#### 79号土坑（第19図）

（位置）下段、9号竪穴南側。

（形態）直径90cmの埋め桶遺構に浅い土坑が付く。深さは40cmで断面は桶状。段切り面に構築していることから近世、屋敷地に作う便所遺構か。

#### 1号溝（第21図）

（位置）上段、やや東寄り。2号竪穴西側。

（形態）長さ8.2×幅1~1.4m、深さ52cmの南北に直進する溝で、南側は調査区外へのびる。主軸方向はN3°-W。

## 2号溝（第21図）

（位置）上段西端にあり、3号溝と近接する。

（形態）長さ11.5×幅0.7～1.2m、深さ22cmの東西方向に直進する溝で、西側は調査区外へのびる。主軸方向はE-18°-N。

## 3号溝（第21図）

（位置）上段西端にあり、2号溝と近接する。

（形態）長さ8.8×幅0.9～1.6m、深さ28cm。南北に直進し、南側は調査区外へのびる。主軸方向はN-8°-E。

## 4号溝（第21図）

（位置）上段、ほぼ中央、下段との境に位置する。

（形態）長さ3.7×幅0.8～2.1m、深さ17cmで、溝というよりは浅い落ち込み状を呈する。南北にのび、北側は下段の段切りにより消失する。主軸方向はN-5°-W。

## 5号溝（第21図）

（位置）下段、中央やや南寄り。6号溝の北側に並行する。

（形態）長さ5.5×幅1.4m、深さ18cmの東西方向の溝状であるが、一部畠状遺構が重複し、畠状遺構の一部であった可能性もある。主軸方向はE-0°-S。

## 6号溝（第21図）

（位置）下段中央、南寄り。5号溝南側。

（形態）図示したのは長さ8.8×幅0.4～1.4m、深さ14cmの東西方向の溝状であるが、全体図（図9）でみるとおり、さらに東側へのび、東端は調査区外へ続いている。主軸方向はE-7°-S。段切りに沿って平行に伸びる溝で、下段平坦面の屋敷地に伴う排水溝の一環であろう。

## 畠（第9図）

（位置）下段、東側を中心に検出されている。

（形態）畠は55号土坑付近を境に大きく南北2か所に存在し、北側に2～3条、南側に10条程度、東西方向に平行して、長さは7～8mを測る。向きはE-10°-Sで、1・2号配石の方向と共に、屋敷地の向きに合わせて畠が東西方向に耕作されていたことがわかる。覆土中からは近世、熔片を主にやや多くの土器片が出土した。南側と北側の空白地は道であろうか。その東端に1・2号配石が位置している。その他、5号溝にも重複するように畠状遺構がある。本来は下段平坦面、西側全体が屋敷地と思われ、畠状遺構が広く展開していたことが推測できる。

## 第4節 遺物

### 1号竪穴 遺物（第22・23図、図版13）

1～3は盤状坏の系譜を引く土器器坏で、1・3は東壁寄り、2は西壁寄りから出土し、3の底部外面には焼成後織刻で「キ」と記されている。5は南壁寄り出土の土器器小形窓。6・7は竪焚口内を中心にして出土した土器器窓で、6は脇部縦ナデ、脇下部横ナデで、脇上部に縦ハケを加える。8は直径4.7cm、厚さ1.7cm、重さ43.7gの土製錘車で、竪焚口付近より出土。完品である。9は砥石。非常に脆い。10は凹石（突き臼）が半分に破損した削れ口断面を磨り面として砥石に再利用したもので、石材は軟質である。凹部径は9.5cm、深さ8cmで、凹部内壁にはノミ状の工具で削った際の工具痕が認められる。何を加工したのか不明であるが、食材、穀類の可能性を考えられる。

### 2号竪穴 遺物（第23図、図版14）

1は曾利IVa式期の深鉢。低隆帯によるコ状区画内に櫛目条線を縦位施したのち縦位の蛇行沈線文を垂下する。2は石棒端部片で、直径10.5cm、長さ19cm。方形石壙炉の西北隅に直立して検出したもの。無頭石棒か。3は磨り石で床面北東側に遺存した盤石状の人形標を数個の縫合で組んでいたうちのひとつ。4は磨製石斧で、刃部側が斜めに破損したものを再利用したものか。

### 4号竪穴 遺物（第24図、図版14）

1は高坏の坏部。内面に放射状のミガキをもつ。2～4は坏。2は坏で、底は丸い。3は口縁部内面に斜格子のミガキを密に施した坏である。5は壺で肩部に粘土円板を貼付し装飾する。内面は横ハケ、外面は縦位ナデである。6・7は台付壺の台部。8は鉄滓。9は磨製石斧刃部片。10は磨り石。11は床面東側に遺存した大型砥石で、置き砥石である。

### 7号竪穴 遺物（第24図）

遺物は非常に少ない。1は漆付着布かと思われるものであるが、よくわからない。後世の混入かもしれない。

### 8号竪穴 遺物（第25～29図、図版14～17）

縄文中期前半、新道式期の遺物を主とする。1～4は口縁部に重三角文をもち、頸部以下を数段の横位の文様帶で区画したキャリバ一形深鉢。1・2はやや小形、3・4はやや大形である。施文具は角押文、三角押文を用い、口縁部の区画内には玉抱き三叉文などを陰刻する。3は重三角文内に縦位の三角押文で埋めるもので、貉沢式期の影響を残す。また

4の重三角区画間の捺り文はドーナツ状の粘土紐を貼付したもので、8にも同様な手法が認められ、新道式期でも古相といえる。6は胴部を無文とする小形キャリバー深鉢。区画文内の刺突文は8と同じ施文技法である。7は3つの括れをもつ4段構成の深鉢で、横位文様帶内は最下段を除き、竹管文と連続爪形文による重三角文風の文様を施文する。14も類似した器形である。8は口縁部に重三角文をもつ抽象文土器で、抽象文が重三角文の文様構成の中に取り込まれている。10・11も重三角文を多段化した文様を基本とする深鉢で、11は頸部無文帯を縦文地文としている。10には捺り文がなく、また区画内も三角押引文による斜行文とするなど、古手である。16は横位文様帶の区画内を長方形の連続バネル文とした文様で、刺突文が特徴的である。12は胴部を抽象文?とする重三角文の平縁深鉢。17も多段化した横位区画文で、重三角文、梢円文などを交互に構成している。19~21は無文深鉢。22~26は浅鉢で、口縁部に押圧粘土紐を貼付するタイプ(22)、口縁部外面を有段とするもの(24・26)、と内湾する無口縁とするもの(23・25)がある。大きさとしては大(26)、中(24・25)、小(22・23)の3種がある。27は何らかの突起(把手)の一部で、顔面把手に類似した構造といえる。28・29は台形土器で、ともに円台状の脚が付くタイプであろう。30はピット内どうしで接合した土偶。首から臀部の大形象で、両腕を水平に広げ、乳房を有し、細長く隆起した腹部には正中線と臍の表現があり、その両側には特徴的な三角陰刻文をもつ。側面には大柄の玉抱き三叉文を細い三角押引文で描出する。胸部が60号ピット、腹~臀部が110号ピット上層より出土したものである。31も土偶で、部位はやや不明ながら腹部かと思われるものの、胸部の可能性(図は逆か)がある。32も土偶で、無脚タイプであろう。33・34はわずかな凹みをもつ磨り石。35~41は打製石斧。42は磨製石斧で両端を欠く。43は石鏃、44は搔器?、45は石錐。

#### 9号竪穴 遺物 (第30図、図版17・18)

1~3は甲斐型土師器皿で、1・3は胴下半を手持ちヘラ削りし、2は回転ヘラ削りとする。4は内黒の甲斐型壺で、人形品である。5は土師器小形壺で甲斐型壺と異なる。6は甲斐型小形壺で竈南に逆位で出土した完形品。7は甲斐型壺羽釜。8は甲斐型壺。

9は甲斐型壺底部。10は須恵器壺胴部。11・12

は在地性の強い土師器壺で、器壁は全体に厚く、とくに緩やかに湾曲しながら外反するような口縁部形態は特徴的である。整形技法は甲斐型壺同様、外面を斜位の弱いハケメ、内面を横位のハケメ・ナデとする。

11の胴下半は調査区下段、北西隅の拡張部出上で、一応同一個体と判断したが、接合資料ではないので、同一かどうか改めて見直す必要がある。15は球胴壺で、胴部は丸く張り、外面には斜位のナデ(一部弱いハケメ)で調整する。内面は横位のナデ・ハケメ。16は小形壺でナデによって調整される。17~22は混入遺物。

#### 10号竪穴 遺物 (第32図、図版19)

1~3は甲斐型土師器壺で、口縁部は正縁、胴部下半は手持ちヘラ削りで、3は内面黒色(内黒)。4は鉢タイプの甲斐型壺。5は甲斐型壺底部。6は甲斐型小形壺で、ハケメは弱い。7は水晶の小さな結晶体がびっしりとついた石英片で、外周は梢円形に整形されているようだ。水晶の結晶が平安時代の堅穴から出土することは県内ではときどきみられ、产地に近い遺跡のあり方として特徴的ではあるが、当時どのような目的のために採集、利用されたのかは定かではない。本例などは純粹にめずらしい貴石として持ち込まれたように思われる。

#### 土坑・埋葬ほか 遺物

##### 1号土坑 (第32図、図版19)

1は棒状自然縄。人為的な手は加えていないようである。

##### 11号土坑 (第32図、図版19)

1は連続三角押引き文を2条口縁部に巡らせた浅鉢。2は内耳土器の系譜を引くと思われる土鍋(培焼)で、器高は8cmと低い。

##### 12号土坑 (第33図、図版19)

1~5は胎土に纖維を混入したいわゆる纖維土器。口縁部と胴部には屈曲部があり、口縁部は平縁で、縦文地文の上に斜行文などの沈線文が描かれている。前期初頭、長野県方面で塚田式とよばれる土器の類例であろう。

##### 16号土坑 (第33図、図版19)

1は甲斐型壺。2・3は在地的な壺で、9号竪穴例に類似する器壁の薄い粗雑な印象の土器である。ハケメはナデに近く、やや粗い。

##### 17号土坑 (第33図、図版19)

1は猪俣2式の深鉢片で、口縁部の梢円区画文内は縦位の平行した角押引き文とする。

19号土坑（第33図、図版19）

1は曾利V式の深鉢胴部片。

21号土坑（第33図、図版20）

1は新道1式期の深鉢片。波頂部直下の文様とみられ、○内にXの隆線文をもつ。

26号土坑（第33図、図版20）

1は曾利II式期の深鉢で、頸部には蛇形隆線文があることから、曾利式長胸壺形の無文口縁部に隆線文によるつなぎ文を貼付し、半円形の区画内に刺突文で埋めている。口縁部には円文を連続貼付するのが特徴的で、曾利II式期以降一般化するつなぎ文の出現段階の様相として理解できる。

27号土坑（第34・35図、図版20・21）

1は蛇体突起付深鉢。鶏冠把手という名称もあるが、火炎土器のそれをイメージするため、蛇体突起付土器とする。胸部は強く括れ、底部はソロバン玉状に強く屈曲し、また口縁部は強く屈曲内湾する。口縁部には相対して大小2個の造形がある。大きい方は高さ16.5cmの蛇体突起で、右向きの獣、あるいは郷土玩具の三春駒にも似た姿で、大きなみみずく把手をベースにして複雑な造形物が直立する。正面・内面には蛇体文、S字文、渦巻文、みみずく把手、環などが複雑に合成し、内面は空洞になっているが、把手部だけでも相当の重量で、歪みなく土器を仕上げた土器製作者の力量の高さに感心する。文様の凸部は平滑に磨きが加えられ、また沈線、凹線部は丁寧な磨きが加えられ、見事な質感を表出している。小突起は頭部を内側に、臀部を外側に貼付した動物あるいは人物的な造形で、箱状のベースの上にカエルのような爬虫類的な頭部が載り、両足をM字に広げて無文口縁部の屈曲部に張り付いている。尻から「し」状に長い懸垂文が胸部屈曲部まで下がり、

まるで尾長猿の尻尾のようである。この懸垂文は大突起からも下がっている。手の表現は右手がすぐ脇に、左手は所在不明である。足先は丸く渦巻状となる。そのほか、口縁部には大突起、小突起の間に半球状の貼付文が2つあり、その両脇に腕・手の表現がある。半球状貼付文は人体表現のひとつで頭を表すとされる。手はU字状となる。以上のように口縁部には大小突起と2つの人体文の計4単位の文様で構成されている。また大突起・小突起間の屈曲部には上から見て半分の間に連続押圧文（鎖状隆帯）が巡る。大小の突起の対立・押圧連續文の有無など非対称的なありかたは縄文土器にときどき見られるもので、土器文様を上から見た文様構成は円環に対して2分割、4分割された空間区分・世界観を表したものと考えると面白いだろう。胸部は燃りの詰まった縱維縄文とする。内面には煮沸による使用痕はなく、外面にも被熱による赤変はないらしい。なお底部は無文である。

2は伴出資料で、ほとんど損傷なく横位で出土した土器。器形は1に類似するが、ただ胴下半の形態がそろばん玉ではなく、球状で、口縁部の内湾度も緩い。口縁には山形突起4つがおり、山形突起の根元にはそれぞれ渦巻文が付き、器面がコ状に4分割される。口縁部の湾曲部には、1と同様に突起間を上から見て半周分だけつなぐように押圧連續文（鎖状隆帯）が巡る。コ状区画にはキャタピラ文の脇に連続三角押引き文が沿う。胸部のコ状区画の中心には記号文がそれぞれ1つずつ付く。ただ1区画のみ記号文を施文しないので、計3個の文様が存在している。記号文は三角押引き文によるフォーク状の文様で、全く同一ではなく、微妙に異なっている。胸部下半は撫歎文が4つ連結した文様帶となる。3も



写真1 27号土坑2展開写真（作成：杉本悠樹）（記号文については73頁参照）

同時期の土器片で口縁部に近い破片であろう。

#### 30号土坑（第35図、図版22）

1は27号土坑1と同様な器形で、口縁部にみみずく状突起を4個のせる深鉢。突起間に27号土坑例同様、無文の半球体のまわりにU字状に隆線が巡る人体文の抽象化された文様がある。2は横刃形石器。

#### 32号土坑（第35図、図版22）

1は胎土中に纖維を含む条痕文土器底部で、底部は平底となる。縄文早期後半か。

#### 38号土坑（第35図、図版22）

1は打斧。

#### 39号土坑（第36図、図版22）

1は織維土器で、推定4単位の大波状口縁をもち、口縁部文様帯と胴部文様帯の間にはわずかな段差がある。胴部は半截竹管文による斜格子文、口唇部にも斜めのキザミがある。有尾式並行の縄文時代前期前半の所産か。

#### 40号土坑（第36図）

1は溶岩。

#### 41号土坑（第36図、図版22）

1は井戸尻式期の土器片。2は藤内～井戸尻式期で縦区画のパネル文系土器。

#### 44号土坑（第36図、図版22）

1は土偶と思われる土製品で、脚はなく、腹部と思われる面に縦の隆線があり、正中線を示す。その他は無文のままとする。

#### 45号土坑（第36図、図版22）

1はかわらけの小皿で、体部は短く、底部が大きい。

#### 58号土坑（第36図、図版22）

1は磨製石斧で斜めに欠損する。

#### 59号土坑（第36図、図版22）

1は石皿。裏面は平たく、蜂の巣石となっている。

#### 60号土坑（第37図、図版22）

1は曾利I式期と思われる無文平縁の口縁部片で、丸く内湾する。

#### 61号土坑（第37図）

1は井戸尻式期の深鉢片。

#### 62号土坑（第37図、図版22）

1は横位で出土した小型深鉢で、無文のままのいわゆる粗製土器。

#### 64号土坑（第37図）

1は土師器羽釜。

#### 67号土坑（第37図、図版22）

1は曾利II式期の長胴壺形深鉢。竹管隆線、櫛歯条線地文となる。2・3は溶岩で、富士山の溶岩の搬入礁と思われる。何のために運ばれてきたのか不明であるが、御迦堂遺跡などでも溶岩片が出土し、石皿に利用された例もある。

#### 70号土坑（第38図、図版23）

1は縄文地文上に口縁部から2本の粘土紐をらせん状に巡らせた変わった文様構成の深鉢形土器。粘土紐上には刺突・刻みを加え、先端は頭部状に作り、全体に蛇が十器にからみついたような印象を与える。2は新道式期の深鉢片。3は無文胴部深鉢片で中期前半か。4は無文の鉢。5は台石、6は石皿片で、裏面が59号土坑例同様に蜂の巣になっている。

#### 74号土坑（第38図、図版23）

1は打製石斧。

#### 9号ビット（第38図、図版23）

1は縦位条線地文の深鉢片で、曾利I～II式期。歯 遺物（第38図）

1は内耳土器、あるいは培培片。2は染付碗。3は附器施。4は内耳あるいは培培底部。

#### 1号埋甕（第39図、図版23）

1は新道式古段階と思われる深鉢胴部で、横帯文の梢円区画文が数段重なる。

#### 2号埋甕（第39図、図版23）

1は口径26cm、高さ29cmの深鉢で、口縁部には渦巻文をもつ突起が1つある。本来は4単位であるが、他の3つは欠損する。胴部は突起を起点とするコ状区画文があり、縄文を地文とし、蛇行懸垂文を垂下する。曾利IVb式と思われる。

#### 3号埋甕（第39図、図版23）

1は長胴壺部で、横位の竹管沈線文を数条施したのち、押圧文をもつ粘土紐を貼付、縦位の竹管沈線文で埋める。一部渦巻する粘土紐に沿って竹管文も湾曲する点が変化を生んでいる。

#### 3号配石（第39図）

1は打製石斧、2は横刃形石器で、混入品。

#### 4号溝（第39図）

1は打製石斧で、先端が長軸方向に摩耗する。

#### 遺構外遺物（第40～44図、図版23～25）

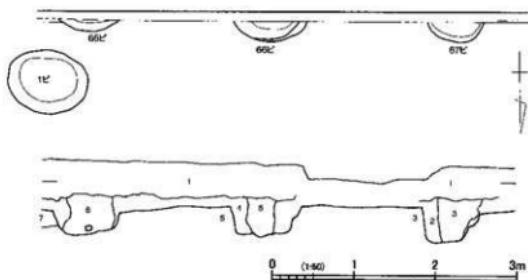
1は曾利II式期の長胴壺形土器で、懸垂文などの主要モチーフを4本単位の平行隆線で描き、蛇行粘土紐を脇に貼付する。地文は櫛歯条線文。底部の網代痕がこの時期としては珍しい。3は地文が純文化した曾利II式土器片。4はX把手深鉢の胴部片で、

押引き文を入れて変化をつけている。7は曾利II式前後にともなう深鉢で、地文を縦位条線文のままとした粗製的な土器。8は弥生中期の壺か。9は曾利II式期の重弧文をもつ長胴壺形深鉢。14は台形土器。26・27はミニチュア土器で、26は縦位沈線を描いただけの円筒形の上器。27は摘み状の突起をもつカップ形の土器で、外面には拓本でも示したように2つの渦巻文を描いている。29は土偶で、頭部は中空の球形を呈し、最も特徴的なのは目である。左目はとび出し、黒目の部分の表現もみられる変わったものである。右目は埴輪の顔のように細長くくりぬかれていて、中空土偶の場合に通常みられるような構造となっている。また鼻が猪の鼻のように表現されていて人間離れしている点もおもしろい。さらに口も均整のある楕円形ではなく、左側が小さく開けられ、明らかな歪みを表現している。各地でときどきみられる片目の人偶、あるいは片目に傷をもつ土偶に共通した左右非対称を意図した土偶（小林2008）といえ、土偶の意味、役割を考えるうえで示唆に富む資料である。30は胸部を省略した円筒形の胸部をもつ土偶で、胸から臀部にかけての破片である。裏面にはくぼみがあり、立ちやすい

ようにならっている。正面には正中線を示す隆線と脇の刺突があり、左右脇腹には土偶に一般的な渦巻き文などを沈線で描く。31は土偶の脇部片で、中心には縦に棒状痕があり、側面には押引き沈線文の渦巻文を描く。32は土偶脚で、横にはくるぶし表現らしい張り出しがある。33は上錘状上製品で、楕円球状であるが断面三角形を意識したようになっていて、一面は座りがいいように意識的に平面的に仕上げている。長軸方向に孔が貫通する。三角墻形上製品に類似している。34～50は打製石斧。51・52は凹石。54～56は黒曜石製石礫。57は穀白の回転臼下臼。58は石棒片。59は蜂の巣石。第45図1・2は上段にあった石祠で1は身部、2は屋根部で片流れ1間、裏面に2本の柱受けのほぞ穴がある。第45・46図の3～5は1号墓の墓石で、3は基部、4は笠部、5は身部、5には脇状のほぞがあり、3には受けとしてのほぞ穴をもつ。

#### 【参考文献】

小林達雄 2008 「縄文人の右目と左目」『縄文の思考』ちくま書房



## 第4章 総括

### 第1節 時期別遺構と成果・課題

天神堂遺跡で検出された遺構・遺物を時代別に整理すると次のようになる。

縄文早・前期 土坑3 (12・32・39号土坑)

縄文中期前～中葉 壁穴1 (8号壁穴)、土坑2 (27・30号土坑)、屋外埋壺1 (1号埋壺)

縄文中期後葉 壁穴1 (2号壁穴)、土坑5以上 (26・60・62・67・70号土坑)、屋外埋壺2 (2・3号埋壺)

弥生中期 遺構外遺物

古墳時代 壁穴1 (4号壁穴)

奈良時代 壁穴 (1号壁穴)

平安時代 壁穴2 (9-10号壁穴)、土坑1 (16号土坑)

近世以降 配石1 (1号配石)、埋め桶遺構1 (66-79号土坑および2号配石内2)、畝状遺構、石垣、石祠1、墓石1、溝3 (1～3号溝)など

特殊遺物としては次のようなものがある。

紡錘車1 (1号壁穴)

線刻土器1 (1号壁穴1)

土偶8 (8号壁穴3、40号土坑1、遺構外4)

土製品1 (遺構外1)

ミニチュア土器4 (9号壁穴2、遺構外2)

その他 水晶結晶体1 (10号壁穴)、溶岩2 (67号土坑2)

今回の調査で得られた成果、課題について時代別に整理しておきたい。

#### 縄文早・前期

本遺跡では最古の生活痕跡で、土坑3基のみではあるが、2基は近い位置関係にあり、土坑域の萌芽がうかがえる。南側にある祭祀遺跡群では旧石器ののち、縄文早期末 (神ノ木台式期)～前期初頭 (下吉井式期)、前期前半 (黒浜式～諸磯式期)と早期末以降、ほぼ連続的な居住痕跡が続く。そうした中、祭祀遺跡群の継続時期のうち、欠落する時期、あるいは活動痕跡が希薄な時期を補うように本遺跡土坑3基の時期が相当するように思われる。縄文時代には扇状地周辺をひとつの領域として、時期により人口数増減の変化、環境変化に対応するように居住場所を移動して拡散、集中を繰り返すという居住スタイルが推測されるが、祭祀遺跡群との関連を考えながら扇状地全体の中で遺構のあり方を検討すべきであろう。

#### 中期前葉～中葉

新道式期の8号壁穴は下段、井戸尻式期の土坑2

基は上段にあり、段切りで大きく削上された影響もあって集落としてどのような形態であったのかわからない。ただ壁穴と土坑には時間差があり、立地場所も異なることから、両者の関係は希薄に思える。この8号壁穴では土偶の出土状況が目を引いた。異なる柱穴から出土した土偶片が接合したもので、土偶の使い方を示唆する事象といえる。これまでにも土偶が柱穴、ピットから出土した事例は各地に存在する。民族事例を参照にするならば (ウォータソン 1997)、建築儀礼において家屋に生命を吹き込むために供養目的で食べものや道具類などを柱穴に埋納する、という祭祀行為がある。土偶を命あるものと見立てて、儀礼行為のなかで壊し (命を断ち)、埋納したのではないか。しばしば人体になぞらえられる家屋における柱穴は単に柱を埋けただけの穴ではなく、それ以上に意義づけされた重要な役割が付与されていたことは容易に推測できる。柱穴からの土偶の出土、接合状況から建築儀礼説を証明することは難しいものの、そうした視点にたって考えてみる必要はあるだろう。なお、30号土偶上半身が出土した60号ピットでは別個体の土偶片も出ており、柱穴からの出土事例としては特異性を感じる。土坑に目を転じると、人形土坑のありが注目される。上段中央付近に大形円形土坑がまとまり、そのうちのいくつかで中期中葉の土器を伴うことから、土器を伴わない土坑についても同時期と推測できる。これまで土坑規模・形態の時期別推移についての分析事例はほとんどないが、その用途・性格を含めて考える必要があろう。同様に完形土器2個体が出土した27号土坑についても出土状況の検討を要する。大きさがやや小形で深さが浅いことから墓坑ではないよう思えるが、土器のあり方は副葬品的である。蛇体突起付深鉢の出土状況については意図的に破損して胴部上半を逆に置いたようにみえるが、定かではない。

#### 中期後葉

ここでは西向きに主軸をもつ2号壁穴の方形石陣炉、北西隅に立つ石棒片に注目してみたい。石棒が炉のコーナー部に直立する事例はときどきあるが、それが屋内での男性の空間利用を象徴するものという推測は先学の指摘するところで、屋内の男女の間取りについては、水野正好・桐原健をはじめ、近年では浅川滋男・谷口康浩が考察するとおりである。

ただ時期の違いで間取りにも変化が見られる点をこれまでの研究では取り上げていないが、中期前半と後半では多少異なるようだ。中期後葉の特徴としては、竪穴の炉と推定出入り口を結ぶ主軸線をはさんで左右分割が顕著になることで、詳細は別稿に譲るとして、炉に向かって右側空間を男性空間、左側を女性空間とする地域、あるいは逆に左空間を男性空間、右側を女性空間とする地域があるらしい。その根拠として男性・女性に関わる遺物、遺構の分布の検討が行われていて、例えば石皿が床面に置き去りにされた状況があれば石皿の使用者 = 女性空間と考えるもので、2号住では石棒が立つ場所、向かって左側が男性空間の可能性があることを推測したい。奥壁側の炉石が山形の礫を用いている点については、炉にはより細かな地域性が現れるという特性があり、注目していきたい点である。

#### 古墳時代前期

今回の調査区では古墳前期の4号竪穴が1軒のみ見られたが、本遺跡の北側にあたる古婦毛遺跡では

古墳時代中期初頭の住居1軒があるなど、水田耕作に適した低位面周辺に居住域が分布したことを示すのである。なお4号竪穴からは置き砾とみられる大形砾石1点が出土したが、床面から出土したことから本竪穴に作成とみられる。出土地点で使用されたものかどうかは定かではなく、おそらく保管状況を示す出土状況と見るのが適当と思われるが、いずれにしてもあまり例をみない大きさである。鉄製品のための砾石とみなすのが普通で、鉄製品の古墳時代前期での普及を物語る資料といえるが、鉄以外の素材に用いた砾石の可能性も考えねばならない。

#### 奈良時代

1号竪穴では盤状坏3点のほか甕、長胴甕など良好な資料が出土し、甲府盆地東部での奈良時代前半の土器様相を示す資料となった。この中で10の凹み石（掻き臼・石鉢）を砾石に転用した石製品（図12-1）は注目すべき資料で、元々は穀類を脱穀あるいは粉粹するための掻き臼と思われる。形態的に類似した石器として中世には凹み石がある。凹み石といつても縄文の凹み石とは違い、本例同様に凹みが大きく深いもので、用途は特定されていないが、回転臼普及以前の臼の一種と考えられている。平安時代にも類例は少ないながら存在することから、本例は凹み石としては最も古い事例のひとつであり、中世の凹み石に系統的につながるものと位置づけておきたい。なお1号掘立柱建物は時期不明ながら位置的に1号竪穴に近いことから、奈良時代前半の可能性を考えておく。

#### 平安時代

竪穴2軒のうち9号竪穴が9世紀後半～10世紀

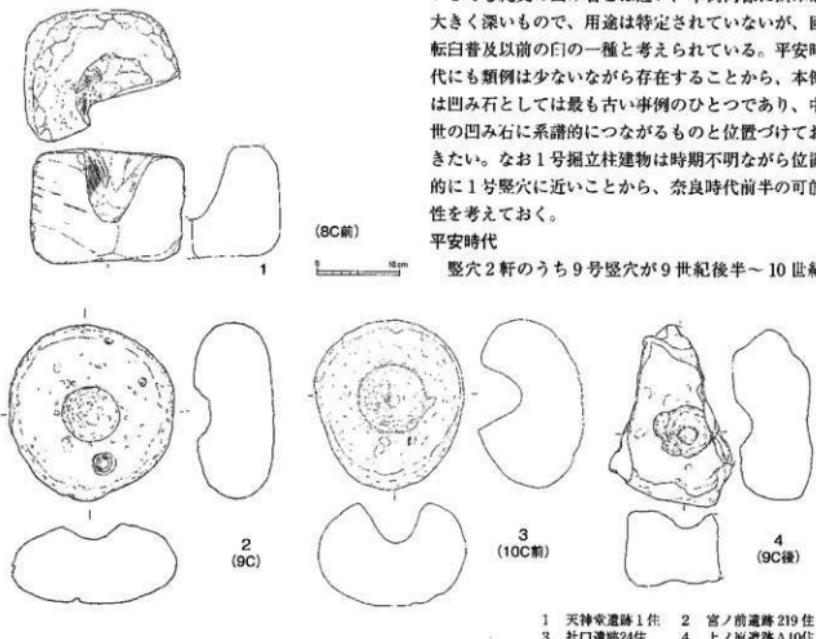


図12 奈良・平安時代の凹み石

前半、10号竪穴が10世紀前半とほぼ同時期ではあるが、同時存在かどうかは明確ではないものの、近くにあることから時間的・系譜的な関連性はあるとみてよい。土器器坏皿類は甲府盆地各地の出土品と差異が認められないが、9号竪穴のヘラナデ整形をもつ壺類（仮称ヘラナデ壺）に地域性が顕著に表れている。器種としては長胴壺（10・11）、球胴壺（15）、小形壺（16）があり、ほかに竪穴壺とみられる16号土坑内出土のヘラナデの長胴壺（2・3）も同時期、同類であろう。特徴としては器壁厚が0.8～1.2cmと厚く、口縁部形態は断面三角形を呈した特徴的なものとなっている（11・2・3）。ヘラナデは弱いハケメ状となる部分があり（12・2・3）、技法的には甲斐型のハケメと同じとみられる。胎土は長石・花崗岩片をやや多く含み、また雲母もみられ、京戸川層状地にあっては在地的といえる。甲斐型壺にもほぼ同様な混和材が含まれておらず、混和材のみでの両者の区別は難しいといえるが、ヘラナデ壺の方が長石・花崗岩片の粒径が大きいように思われる。9号竪穴でのヘラナデ壺の出土位置が北東側付近に集中することから、別時期の重複の可能性を疑う必要はあろうが、川土レベルなどを確認しても明らかな混入と判断できる材料ではなく、一応同時期の土器群とみなし、在地説を支持しておくこととし、類例増加をまって改めて判断したい。

#### 近世以降

下面には近世以降の屋敷地があり、水溜状の配石、便所や烟を伴うことがわかつたが、限られた調査範囲の中では屋敷地の全体像を明らかにすることはできず、建物本体は調査区東側の南北に通る道側にあったものと考えておく。上段の石祠・墓石と屋敷地との関連も定かではないが、近世初頭以降の天目茶碗ほかかわらけ、培培、陶磁器類、石臼片なども出土し、屋敷地関連の遺物はひとつおり無い、時期推定も可能である。

#### 【参考文献】

ロクサーナ・ウォータソン布野修司訳 1997『生きている  
住まい東南アジア建築人類学』学芸出版社

#### 第2節 蛇体突起付深鉢について

27号土坑の蛇体突起付深鉢は、出土ののち直ちに復元を行い遺跡見学会などで公開した。調査終了後、この手の把手をもつ土器について集成したいと思っていた矢先、長野県考古学会誌で藤森英二の論考を目にした。集成および考察が行われているので、

本稿ではその内容を紹介し、周辺諸例と本遺跡出土例との比較、位置付けを行い、特徴を明らかにしてみたい。

なお本報告では「蛇体突起付深鉢」と呼称してきたが、藤森論文では「蛇体把手付深鉢」としている。藤森の見解を要約すると次の通りである。

指標とされた条件としては、

①内届口縁、括れた胸部、そろばん玉の底部

②胸部の縄文

③中央に円窓をもつ把手

④突起上部の2つの三角突起

⑤把手部右側の突起

⑥把手中央から「し」字状にのびる懸垂文

の6点で、時期的な変遷・分布は次のように要約される。

#### 第1段階（藤内式期末～井戸尻式古）

底部のそろばん玉の張り出しが弱く、把手部は厚みをもたず平面的で、胴部は縄文地文、磨り消し区画文とする。尖石遺跡・曾利遺跡35号住を代表例とし、霧ヶ峰南麓から八ヶ岳西南麓に分布。

#### 第2段階（井戸尻式期古）

把手部は厚みをもち装飾性が増す。胴部括れと底部張り出しがより強まる。把手部左側に小リング。円窓間にマムシ文、渦巻文、三叉文。胴部上半に半円文。目切45号住・梨ノ木71号住（目切グループ）、原町農業高校前48号住・酒呑場C区181・182号土坑例を典型とし、八ヶ岳南麓から諏訪湖盆までにやや拡大する。

#### 第3段階（井戸尻式古～中）

把手部左側に2つの小リング、中央円窓上の2つの円文、三角突起間の小突起があり、把手部は表裏別々に形成され二重となり、最も装飾性に富んだ段階。口縁部屈曲部下に口縁部無文帯をもつ。郷上遺跡16号住を典型とし（郷上グループ）、穴場遺跡例・一の沢西遺跡65号土坑例などで、浅間山麓、松本平、甲府盆地まで一気に拡大する。

#### 第4段階（井戸尻式中～末）

文様の一部が簡略化される。中央円窓のマムシ文の退化、把手部厚みの減少など。分布域は2段階程度に縮小する。

藤森は文様の系譜を探るなかで把手部文様が「蛇」を強く意識したものと推測した。また広範囲で類似資料が分布する点については、同時多発的に各所で作られたとするには不自然で、霧ヶ峰南麓から八ヶ岳西南麓で作られ運ばれた上器の可能性が高いこと

を推測し、その手掛かりになりうるものとして、胎土中に白色粒子を多量に含むものが多いことをあげている。

さて犬神堂遺跡 27 号土坑例について、藤森の視点を参考にみていいく。指標の条件とした 6 点はすべて合っていて、①強い内屈、脇部の括れ、そろばん玉で、②口縁部無文帯、以下繩文施文とし、③把手部は中空で厚みがあり、装飾性に富み、④把手部上には 2 つの三角突起をもち、⑤把手部右側には胸のような右向き突起部をもち、⑥把手部左側から連続する「し」字文の懸垂文をもち、全体的には郷土グループと類似性が高く、第 3 段階に位置づけられる資料といえる。とくに⑤の突起が例外的な資料はあるにせよ、右向きが多い特徴があるという点、⑥懸垂文が「し」ではなく右巻きの「し」字文になるという点の指摘は卓見で、本例と合致するのも単なる偶然とは思われない。右・左に対する認識、意識があつたことをうかがわせるもので、把手部にのる蛇体が右を向くのはこのモチーフの特性としてある種の型となる方向を指し示すものであったと考えられる。また 3 段階の特徴としてあげられた把手部左側の 2 つの小リング、2 つの三角突起の 2 つの円文、円窓のマムシ文は本例にも存在し、第 3 段階では最も装飾性に富み、分布域が拡大するという指摘にかなつたものとなっている。

藤森はさほど重視していない、もしくは指摘していないが本例には特徴的と考えられる文様要素として、①口縁部無文帯の半周する鎖状隆帯、②把手部と対応する人体モチーフの小突手、③口縁部無文帯の把手間の人体文がある。

①は突起部右側から半周するもので、藤森の集成中では原町農業高校前遺跡 48 号住、一の沢西遺跡 65 号土坑、下原遺跡 1 号住例にみられ、全周しないで空白部をはさむ点に特徴がある。把手部との関連では原町農業高校前と一の沢例が把手部左側（蛇体の尻尾側）から半周し、下原例が把手部をはさんで左右に 4 分の 3 周する。把手部にのる蛇体との関連でいうと、左向きに巡るのであれば鎖状隆帯はまさに蛇体の胴から尻尾の表現ということになる。半周する鎖状隆帯は 27 号土坑 2 にも見られるほか、高畠遺跡（山梨市）11 号竪穴では、鎖状隆帯ではないが浅鉢口縁部に三角文と蛇形行線の半周構成（2 単位区画）の文様があり、土器文様における 2 単位構成は中期中葉にときどき見られるものとして注意したい。

②は蛇体把手の反対側に向き合うようにつく小把手で、本遺跡例ではまさに把手に向き合うように口縁部内側を向くカエル状の人体文である。口縁部に蛇とカエルが対峙して向き合い、蛇に睨まれたカエルがすくみあがっているような構図が大・小把手という形で表現されている点は興味深く、関連した文様に駒ヶ根市丸山南遺跡の有孔鰐付土器に蛇がカエルの足をくわえたモチーフがある。土器文様のモチーフとして食う・食われるというテーマを選択するのは食べ物の煮沸具としての上器文様にはふさわしいテーマといえ、何らかの説話的な物語性をもつモチーフと考えられる。そのような見方で類例をみると、原町農業高校前 48 号住例には把手に向き合うカエルのような小把手があり、一の沢西遺跡例にも何らかの抽象的な表現がある。ただ本遺跡例はドリアルに表現した文様ではなく、本資料の大きな個性となっている。

③に関しては、郷土 16 号住例口縁部に円文の両脇に両手を上げたような人形文が向き合って 2 つ存在し、本遺跡例と同じ文様構成である。また一の沢 65 号土坑例は突起間の片方にのみ人体文類似の文様がある。下原 1 号住例は小突起をあわせて 3 体の人体文となる例で、こうした例から蛇体文と人体文は文様構成上かなり密接な関連をもつテーマであることがわかる。なお、人体文については蛇体文をもつ類型のほかにも大把手をもつ多喜窓類型のようないし器にはしばしば施文されていて、頭部の表現は無文の円文で表現されることが多い。

土器の製作と移動に関する藤森の見解に対し、本遺跡例は賛同的な事例といえる。胎土中に白っぽい安山岩の一種、ディサイト粒をやや多く含むことから茅ヶ岳山麓の材料、もしくは製作の可能性を指摘できるもので、八ヶ岳西南麓に限定した氏の見通しとはわずかにずれているが、移動の結果甲府盆地東部へもたらされた土器の可能性がある。ただ実際持ち運びににくい、壊れやすい器形であって、重量も 7.2 kg（復元後）と相当なもので、数十 km 離れた距離を無事人の手のみで移動することは可能かどうか、大いに疑問がある。

なお藤森の集成以外に、蛇体突起付深鉢の類例として青梅市駒木野遺跡 26b 号住出土例がある。大小の把手のうち大把手のほうは蛇体突起が大きく変容したもので、右向きの突起や 2 つの三角突起はないが、左側の小リング、円窓は残る。向きあう小突起はイノシシ状で、半周する鎖状隆帯、口縁部無文帯、

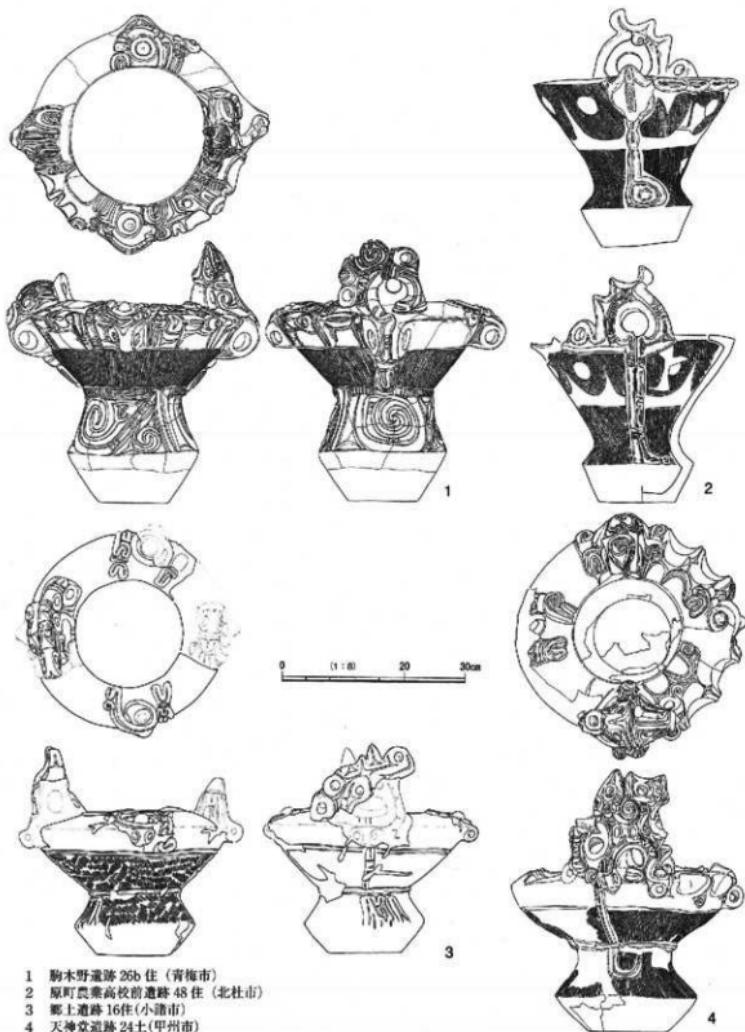


図13 蛇体突起付深鉢の類例

口縁部人体文は存在し、人体文をもつ郷土遺跡・下原遺跡・一の沢遺跡例との類似し、人体文の腕・手の表現などは本遺跡例との類似性が高い。そのほか蛇体突起の類例に坂井考古館(並崎市)に把手部が保管されていて、口縁部無文帶、左向きの突起で3つの三角突起をもつ第3段階の事例かと考えられる資

料があることを指摘しておきたい。また突飛な見方かもしれないが蛇体突起付深鉢と火炎土器の把手形態、鎖状隆帯などに類似点を見出すことができる。火炎土器が4つの把手を基本にするなど根本的な相違点はあるものの、本土器類型を介して中部地方との何らかの影響関係があった可能性も伺わせている。

## 【参考文献】

藤森英二 2006 「縄文時代中期中葉後半における、ある土器の系譜—尖石道跡蛇体把手土器の子孫造—」『長野県考古学会会報』118

### 第3節 27号土坑の記号文

天神堂遺跡 27号土坑出土例 2 は、蛇体突起付深鉢とともに、ほぼ無傷で発掘された縄文中期中葉の深鉢である。高さ 32cm、口径 17.5cm で、4 単位の波状口縁をもち、胴部上半の突起間に区画された 4 か所のコ状のスペースがあり、3 個所にはほぼ同じ文様（仮称「記号文」）を三角押引文によって記している。文様は縦 2 本にコ状文を組み合わせた「市」のような文様で、文様の施文順序から描き順がほぼ一致することがわかる。その順序とは

- ①継 2 本を上から下へ
- ②横棒を左から右へ
- ③左右の縱棒を上から下へ

とするもので、3 つ（A～C）のうち C が①の縱棒を 1 本にしている点が A・B と異なっているが、描き順、描く向きは一致する。現代の文字・漢字と同じように書き順という原則が順守されていて、單に同じような文様を模倣して描いたというより、施文自体が意味のある行為であったと考えられ、そこに描出された文様には聖性が込められていると考えられるだろう。

27号土坑 2 と類似した文様をもつ土器として、秩迦堂遺跡にいくつかの類例が存在する。2 は秩迦堂遺跡 S I 区 S B10 出土の深鉢で、口縁部は無文で平口縁、胴部には蛇体かと思われる「J」字の抽象文が 4 つ貼付される。そのモチーフ間に記号文があり、土器の欠損部が多いので本来は 4 か所に文様があつたと思われるが、2 個のみ残る。三角押引文によって横向きの「丁」と足のような文様が組合せた記号文で、両者はほぼ同じ文様であるが、足のような文様の一部に違いがある。時期は藤内 2 式。3 は秩迦堂遺跡 S III 区 S B46 出土、天神堂遺跡例と同じ 4 つの波状突起をもつ土器で、モチーフ間の 1 か所に沈線文で記された記号文がある。藤内 3～4 式か。4 は S III 区 グリッド出土のやはり同じ器形の土器で、突起間に文様をもつが、それぞれ異なる文様である。藤内 2 式。

数種の異なる文様が連なる事例としては、例えば原町農業高校前遺跡 48 号住例（5）がある。平口縁の円筒形深鉢で、4 段に帯状に区切られた文様帶の

うち、口縁部の最上段に二重円文を 6 個配し、その間の 5 か所に記号文が施文される。人体文に似た沈線文で、古代文字のように見える。藤内 3～4 式期。

1～5 の文様を記号文と認識するならば、次の石之坪遺跡東地区の事例も記号文といえる。6・7 は破片資料のため、個別的な記号文の事例であって全体的な配置は不明であるが、ともに主要モチーフの脇に付随するもので、キャタピラ文とも呼ばれる半裁竹管押引文に沿って施文された三角押引文の一部に記号文が挿入された形となる。時期は藤内 1～2 式期。8 は古林第 4 遺跡 60 号土坑出土の円筒形深鉢で、縦に垂下する隆線間に区画されたスペースに三角押引文で「J」字文が 2 つずつ施文されている。ほかに鈎物師屋遺跡 16 号土坑に類例があり、隆線に沿った三角押引文の一部に記号文の挿入が 1 か所認められる（新道 2 式期）。

類例が数少ない中で「記号文」を概念規定するすれば次のようになる。土器の文様中に比較的小さく複数描かれた記号あるいはサインのような文様で、文様としては完結的、独立的で土器全体の文様構成とは関連性がない。土器の口縁部あるいは上半に位置し、横方向に規則的に配列するもの、何らかのモチーフの一部に挿入されるものがある。前者ではほぼ同一の文様が規則的に配置されるタイプ、異種の文様が配置されるタイプがある。文様は沈線文で、三角押引文が多く、時期は新道～井戸尻式期に限られ（註）、分布は中部高地を中心とするらしい。

では、記号文にはどのような意味があるのだろうか。ここでは以下の可能性を上げておく。

- ①何らかの意味をもつ文字
- ②土器製作者を意味するサイン
- ③呪術性を帯びた文様

土器の口縁部、上半にあることから目に付きやすい位置を選んで記入されている。文様の大きさは控え目で、土器文様を邪魔するものではなく、また文様構成に影響を与えるものではない。通常の土器ではなく、またこの文様が記された土器が特別な土器とはいがたく、とくに優れた装飾的な土器であるとか、特別大形の土器といった特徴もないらしい。ただ秩迦堂遺跡の 2 例および天神堂遺跡例は 4 単位の波状突起をもつ腰が強く括れた深鉢形土器で、同一器形であり、記号文の施文位置が同じであることから、秩迦堂遺跡周辺の甲府盆地東部ではこの手の土器に記号文を記す例が指摘できる。文様は単独で存在し、異なる記号文が文字のように連続的に並ん

だ構成を呈することはない。またこれまでに知られている事例では別個体間で文様の類似性は認められていない。したがって上記の可能性のうち、いずれとも判断はしがたいが、全体的に③の可能性が高いが、事例1・2には②の可能性が考えられ、また数種の異なる記号文が配列する5には①も想定できる。

縄文土器がどのように製作・流通したのか依然として不明な中で、限定的な製作者、土器作りのムラが存在し、土器そのものが価値を帯びて交換財とされる状況を想定するならば、個人的なサインを作品に記した例がまれに存在することは考えられる。そ

うした観点から土器製作を再検討する意味でも、「記号文」の存在は注目される。

(本稿は柳原2008「縄文土器に見られる記号文」「山梨文化財研究所報」50に加筆再録したものである。)

#### 註

例えば曾利II式期の縄文土器群には、陸線による懸垂文の途中に粘土紐で記号的なモチーフを描く土器があり、それらも何らかの情報を内包した一種の記号文と理解できる。

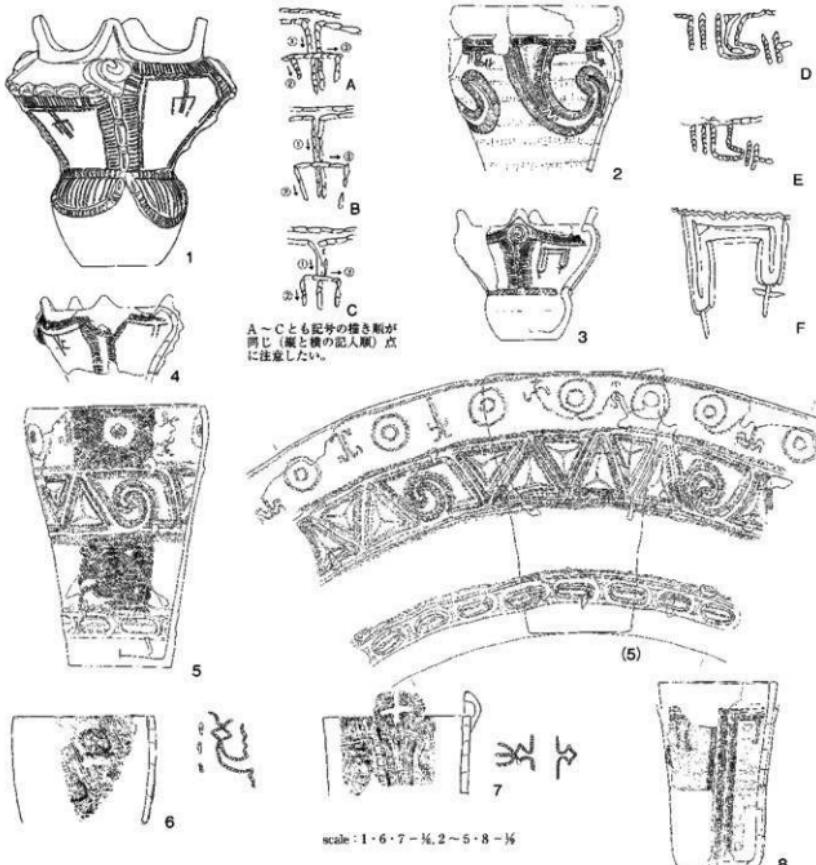


図14 記号文をもつ土器

参考文献

- 小林達雄 1988「縄文土器の文様」「縄文土器大観2 中期I」  
小学館  
山梨県教育委員会ほか 1986『駿道堂I』  
櫛形町教育委員会 1994『鎧物師屋遺跡』櫛形町文化財調査報告No.12

石之坪遺跡発掘調査会ほか 2000『石之坪遺跡(東地区)』  
山梨県教育委員会 2005『原町農業高校前遺跡(第2次)』  
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第221集

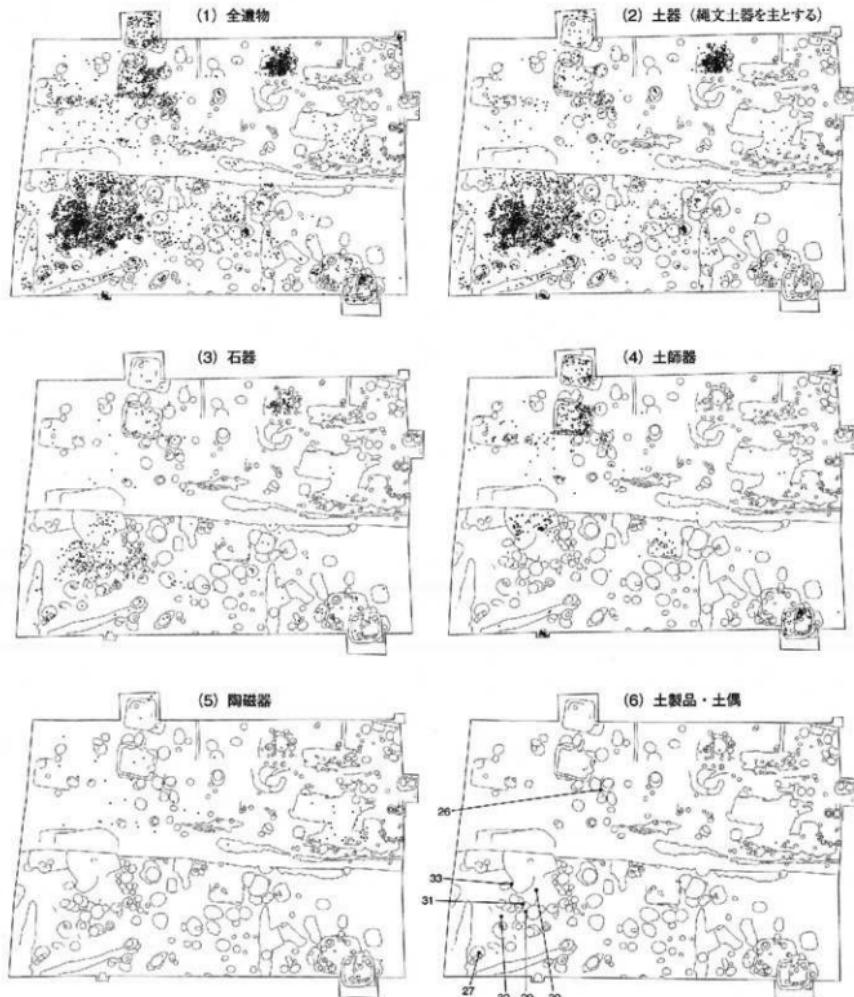


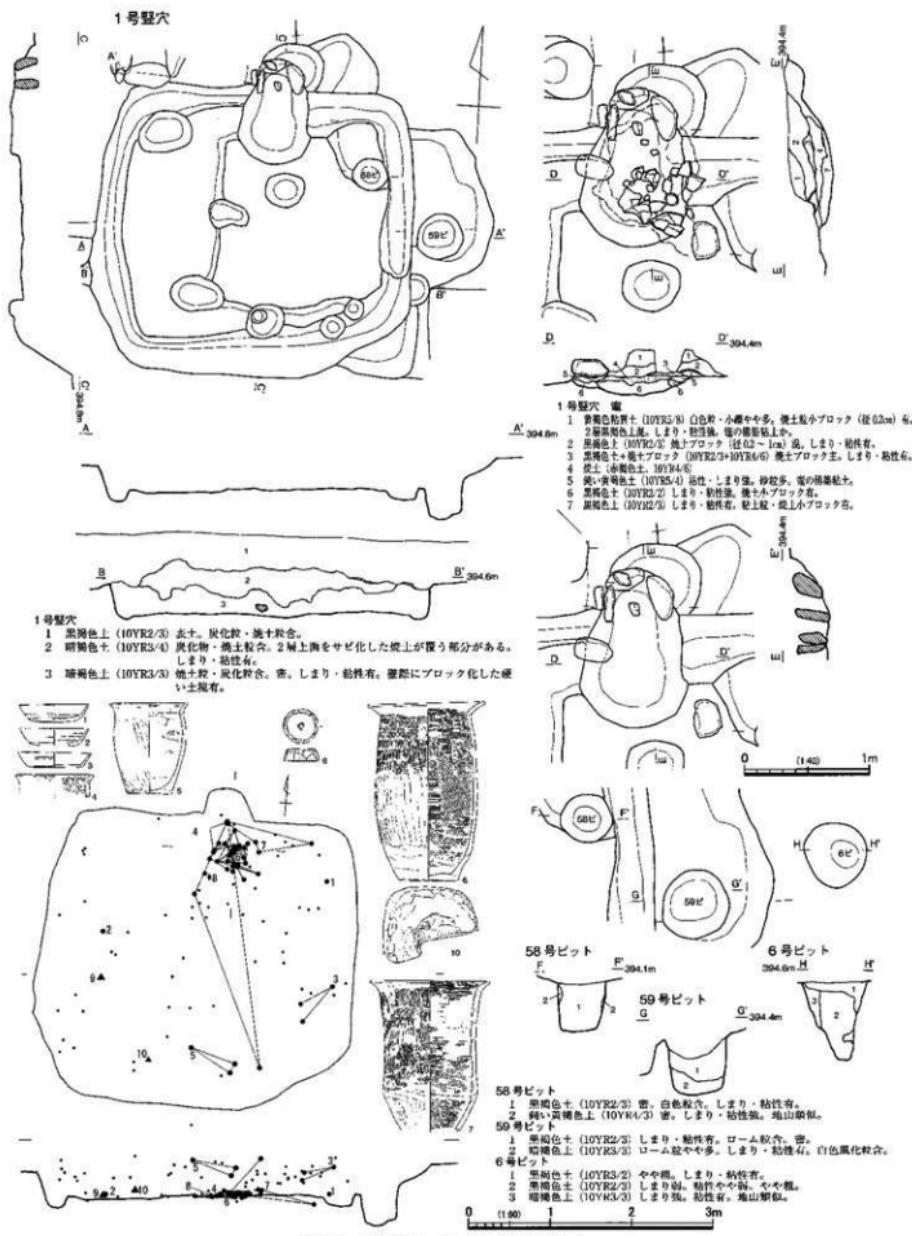
図15 遺物分布図

第2表 土器類觀察表

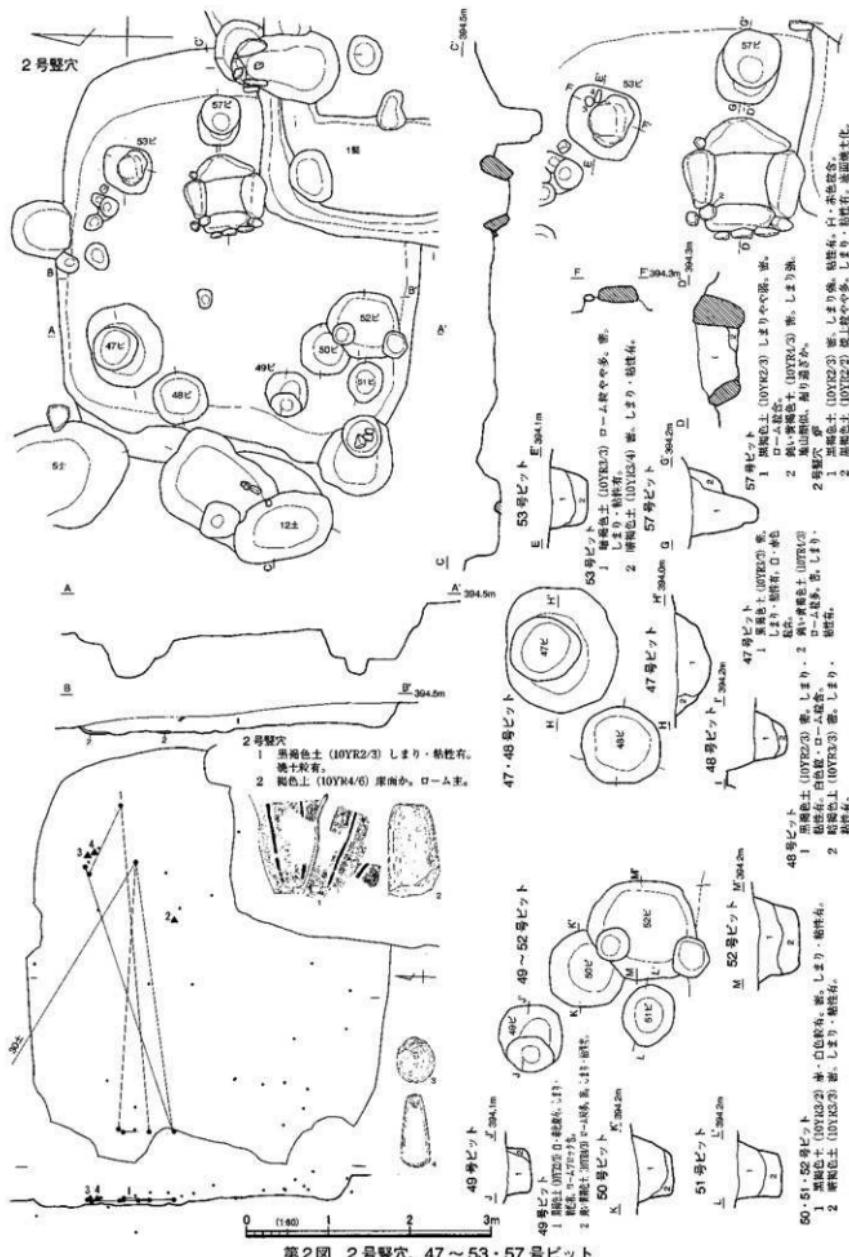


第3表 石器類觀察表

図	地點	No.	分類	長/幅/厚	E	石材	古國	古型	備考
23	東	9	氏石	6.3/7.5/4.1	72	褐色海砂岩	灰土一ノ耳	363	太極玉使用、歯面
23	東	10	里山	18.6/16.8/13.7	1210	ツブサイト質灰岩	白目	2766	向みみを施す板状
23	東	2	石斧	19.0/10.4/9.9	3300	緑色岩(緑色瓦)	赤土	-	柄端に刃、圓錐形
23	東	4	石刀	9.4/2.5/2.0	100	緑色岩	灰土	1679	刃部に斜面、刃面削形
23	東	5	石刀	10.0/1.9/1.7	100	緑色岩	灰土	11678	刃面欠く、刃面削形を再利用
23	東	9	石斧	7.5/5.1/2.9	142	褐色海砂岩	灰土	999	西周次元、刃面削形を再利用
23	東	10	石刀	11.5/7.6/3.9	555	褐色海砂岩	後オニニ	1353	肉垂使用、裏面素削面、腹直試み
23	東	11	石斧	13.2/3.9/7.0	10500	褐色海砂岩	灰土	1347	主に刃削用、裏面素削面、腹直試み
23	東	33	第1石	12.4/8.0/5.5	780	灰土(青緑色系灰岩)	灰土	217	くほく田字あり
23	東	34	第2石	12.6/5.5/3.7	550	緑色岩?	灰土	56	2893
23	東	35	第3石	9.7/5.1/3.0	50	緑色岩?	灰土	65	2898
23	東	36	第4石	9.8/5.1/3.0	50	ル・ク・フェンス	灰土	-	
23	東	37	第5石	7.7/3.0/1.0	25	ル・ク・フェンス	灰土	1834	
23	東	38	第6石	7.2/2.9/0.8	20	ル・ク・フェンス	灰土	1831	
23	東	39	第7石	9.2/4.1/3.3	160	ル・ク・フェンス	灰土	2062	
23	東	40	第8石	9.5/3.0/2.0	60	ル・ク・フェンス	灰土	2075	
23	東	41	第9石	10.0/5.0/3.0	120	ル・ク・フェンス	灰土	2085	片削葉形
23	東	42	第10石	9.3/3.5/1.0	490	ル・ク・フェンス	灰土	2091	刃端丸角
23	東	43	第11石	4.4/5.1/3.7	44	ル・ク・フェンス	灰土	-	一方の節太根
23	東	44	第12石	2.1/3.1/0.6	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	筋跡?
23	東	45	第13石	18.5/6.0/3.5	1250	安山岩	灰土	-	
23	東	46	第14石	2.1/0.9/0.5	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
23	東	47	第15石	2.1/0.9/0.5	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
23	東	48	第16石	2.7/2.1/0.6	55.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
23	東	49	第17石	11.6/9.5/2.3	230	ル・ク・フェンス	灰土	2476	
23	東	50	第18石	6.0/10.0/4	100	ル・ク・フェンス	灰土	2469	
32	北	71	石器類	3.4/5.0/1.5	30	ル・ク・フェンス	灰土	-	細かく水滴の集合体
32	北	72	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	73	石器類	9.8/3.5/1.5	490	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	74	石器類	4.4/5.1/3.7	44	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	75	石器類	2.1/3.1/0.6	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	76	石器類	2.7/0.5/1.0	6.0	ル・ク・フェンス	灰土	1817	
32	北	77	石器類	11.8/6.0/3.5	1250	安山岩	灰土	2667	
32	北	78	石器類	9.0/6.0/2.7	9.0	ル・ク・フェンス	灰土	2690	
32	北	79	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	2718	種化山脈系山毛櫟樹木下
32	北	80	石器類	2.1/0.9/0.5	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	泥炭帯川谷、時にスズ行方
32	北	81	石器類	11.6/9.5/2.3	230	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	82	石器類	6.0/10.0/4	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	83	石器類	3.4/5.0/1.5	30	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	84	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	85	石器類	9.8/3.5/1.5	490	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	86	石器類	4.4/5.1/3.7	44	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	87	石器類	2.1/3.1/0.6	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	88	石器類	2.7/0.5/1.0	6.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	89	石器類	11.8/6.0/3.5	1250	安山岩	灰土	-	
32	北	90	石器類	9.0/6.0/2.7	9.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	91	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	92	石器類	11.6/9.5/2.3	230	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	93	石器類	6.0/10.0/4	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	94	石器類	3.4/5.0/1.5	30	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	95	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	96	石器類	9.8/3.5/1.5	490	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	97	石器類	4.4/5.1/3.7	44	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	98	石器類	2.1/3.1/0.6	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	99	石器類	2.7/0.5/1.0	6.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	100	石器類	11.8/6.0/3.5	1250	安山岩	灰土	-	
32	北	101	石器類	9.0/6.0/2.7	9.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	102	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	103	石器類	11.6/9.5/2.3	230	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	104	石器類	6.0/10.0/4	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	105	石器類	3.4/5.0/1.5	30	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	106	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	107	石器類	9.8/3.5/1.5	490	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	108	石器類	4.4/5.1/3.7	44	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	109	石器類	2.1/3.1/0.6	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	110	石器類	2.7/0.5/1.0	6.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	111	石器類	11.8/6.0/3.5	1250	安山岩	灰土	-	
32	北	112	石器類	9.0/6.0/2.7	9.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	113	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	114	石器類	11.6/9.5/2.3	230	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	115	石器類	6.0/10.0/4	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	116	石器類	3.4/5.0/1.5	30	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	117	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	118	石器類	9.8/3.5/1.5	490	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	119	石器類	4.4/5.1/3.7	44	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	120	石器類	2.1/3.1/0.6	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	121	石器類	2.7/0.5/1.0	6.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	122	石器類	11.8/6.0/3.5	1250	安山岩	灰土	-	
32	北	123	石器類	9.0/6.0/2.7	9.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	124	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	125	石器類	11.6/9.5/2.3	230	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	126	石器類	6.0/10.0/4	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	127	石器類	3.4/5.0/1.5	30	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	128	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	129	石器類	9.8/3.5/1.5	490	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	130	石器類	4.4/5.1/3.7	44	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	131	石器類	2.1/3.1/0.6	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	132	石器類	2.7/0.5/1.0	6.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	133	石器類	11.8/6.0/3.5	1250	安山岩	灰土	-	
32	北	134	石器類	9.0/6.0/2.7	9.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	135	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	136	石器類	11.6/9.5/2.3	230	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	137	石器類	6.0/10.0/4	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	138	石器類	3.4/5.0/1.5	30	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	139	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	140	石器類	9.8/3.5/1.5	490	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	141	石器類	4.4/5.1/3.7	44	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	142	石器類	2.1/3.1/0.6	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	143	石器類	2.7/0.5/1.0	6.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	144	石器類	11.8/6.0/3.5	1250	安山岩	灰土	-	
32	北	145	石器類	9.0/6.0/2.7	9.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	146	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	147	石器類	11.6/9.5/2.3	230	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	148	石器類	6.0/10.0/4	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	149	石器類	3.4/5.0/1.5	30	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	150	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	151	石器類	9.8/3.5/1.5	490	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	152	石器類	4.4/5.1/3.7	44	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	153	石器類	2.1/3.1/0.6	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	154	石器類	2.7/0.5/1.0	6.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	155	石器類	11.8/6.0/3.5	1250	安山岩	灰土	-	
32	北	156	石器類	9.0/6.0/2.7	9.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	157	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	158	石器類	11.6/9.5/2.3	230	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	159	石器類	6.0/10.0/4	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	160	石器類	3.4/5.0/1.5	30	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	161	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	162	石器類	9.8/3.5/1.5	490	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	163	石器類	4.4/5.1/3.7	44	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	164	石器類	2.1/3.1/0.6	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	165	石器類	2.7/0.5/1.0	6.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	166	石器類	11.8/6.0/3.5	1250	安山岩	灰土	-	
32	北	167	石器類	9.0/6.0/2.7	9.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	168	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	169	石器類	11.6/9.5/2.3	230	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	170	石器類	6.0/10.0/4	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	171	石器類	3.4/5.0/1.5	30	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	172	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	173	石器類	9.8/3.5/1.5	490	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	174	石器類	4.4/5.1/3.7	44	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	175	石器類	2.1/3.1/0.6	2.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	176	石器類	2.7/0.5/1.0	6.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	177	石器類	11.8/6.0/3.5	1250	安山岩	灰土	-	
32	北	178	石器類	9.0/6.0/2.7	9.0	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	179	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	180	石器類	11.6/9.5/2.3	230	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	181	石器類	6.0/10.0/4	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	182	石器類	3.4/5.0/1.5	30	ル・ク・フェンス	灰土	-	
32	北	183	石器類	10.0/1.5/0.5	100	ル・ク・フェンス	灰土	-	</

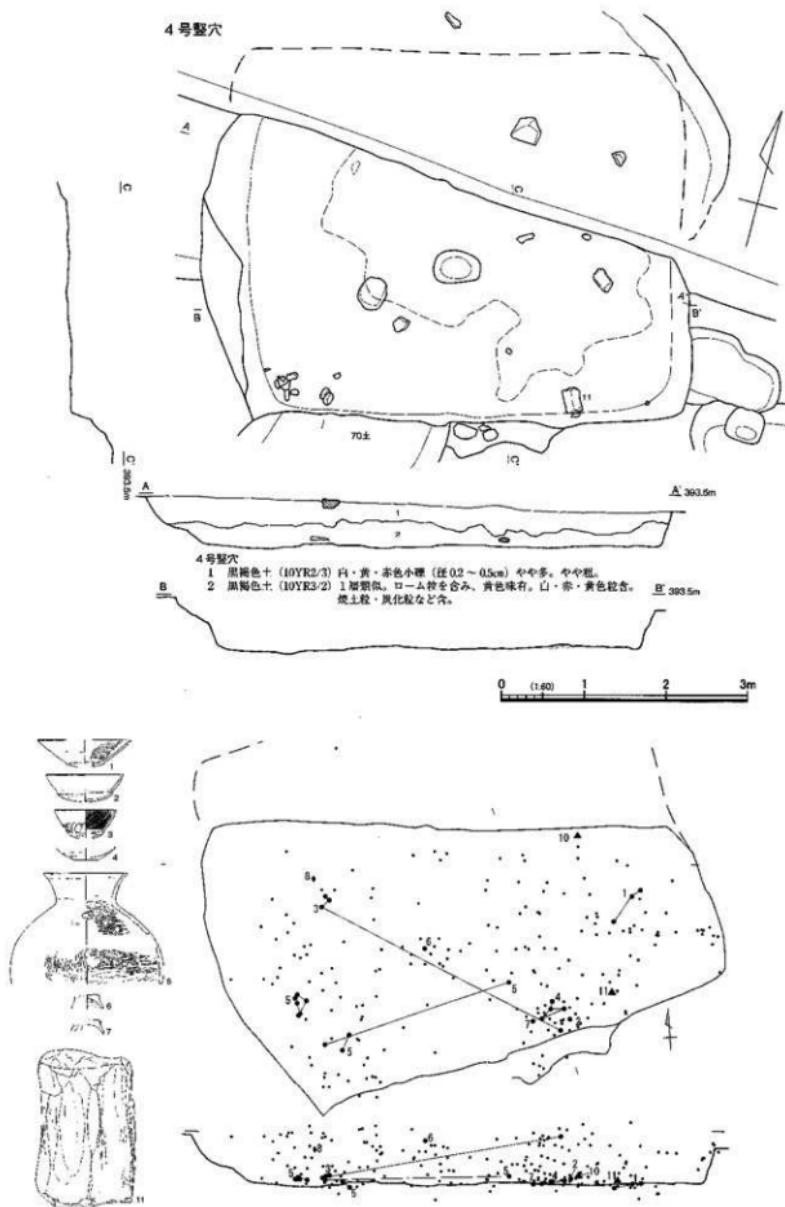


第1図 1号竪穴、6・58・59号ピット

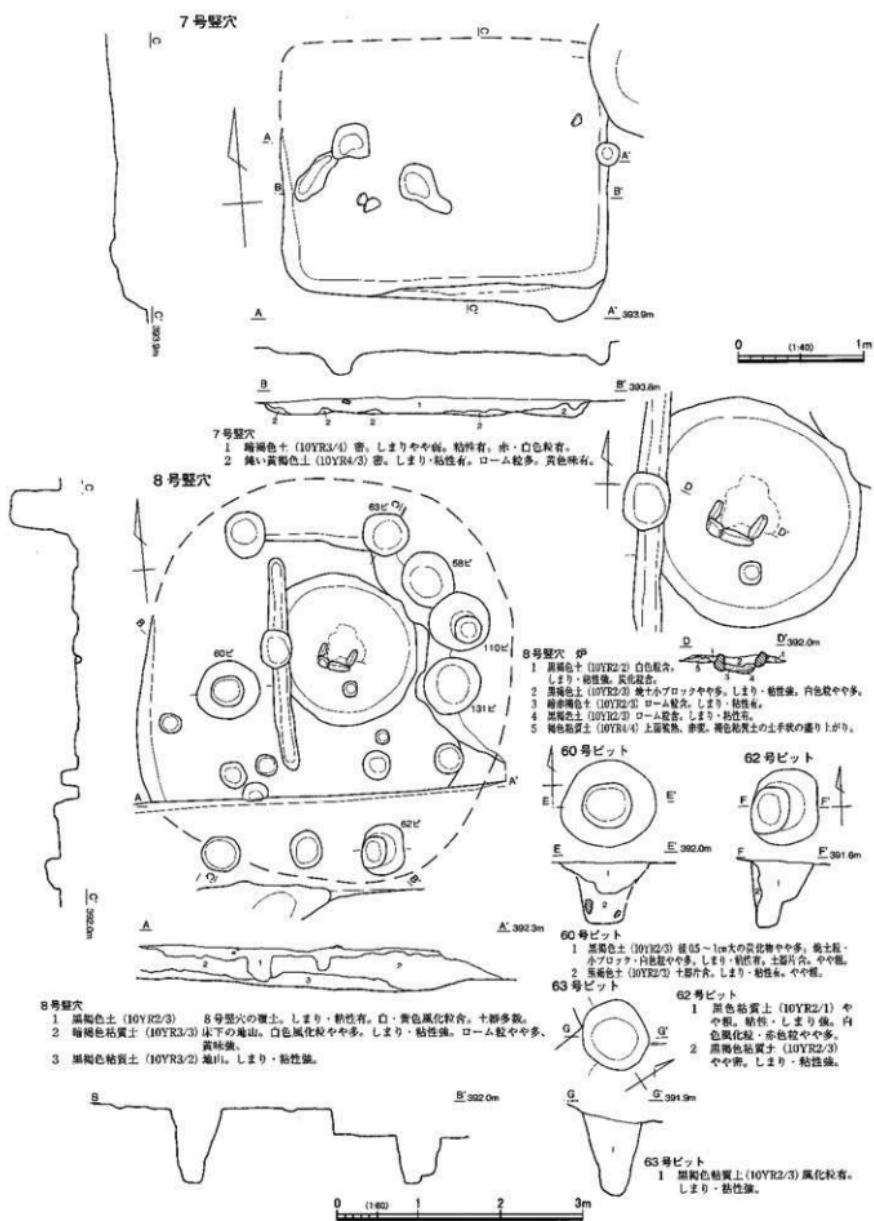


第2図 2号竪穴、47～53・57号ピット

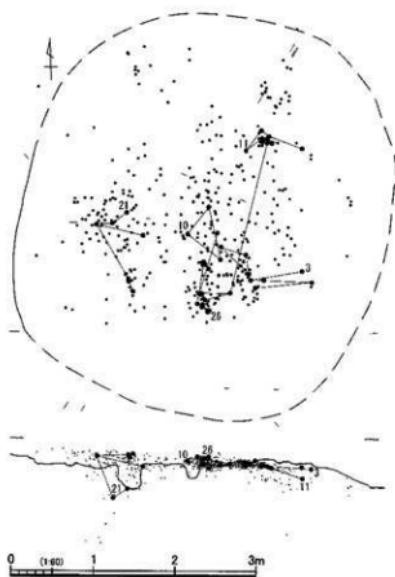
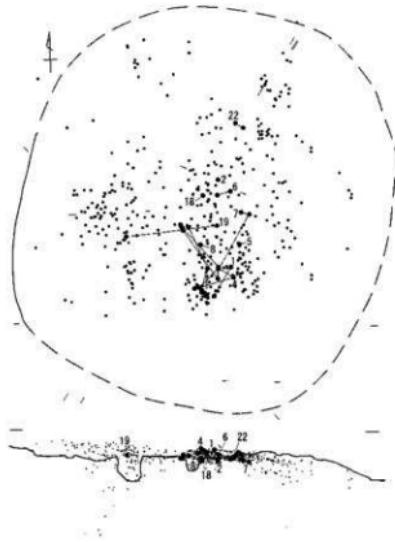
4号整穴



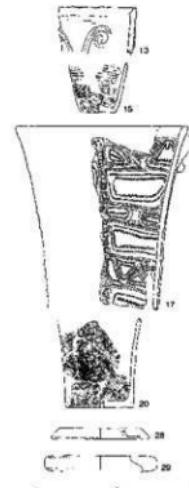
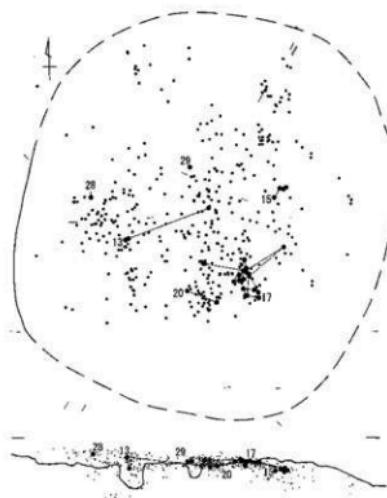
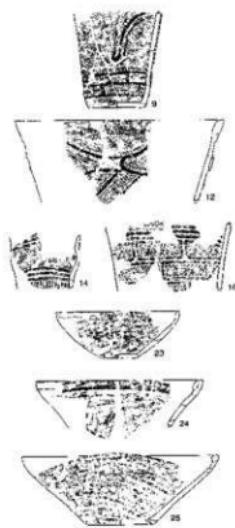
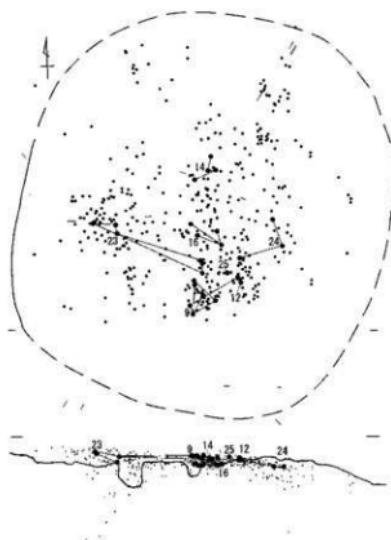
第3図 4号整穴



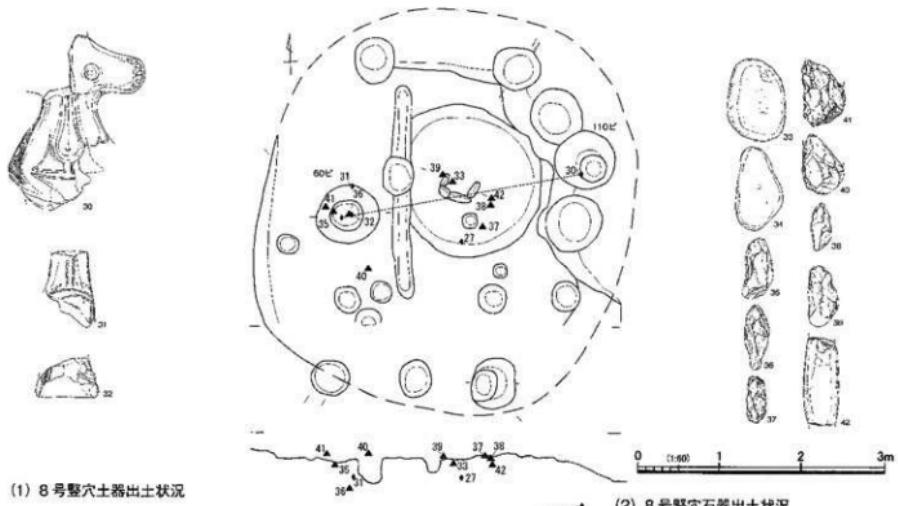
第4図 7・8号堅穴、60・62・63号ビット



第5図 8号竖穴

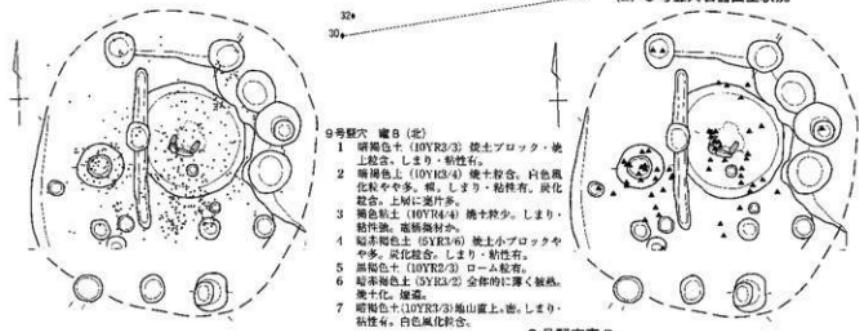


第6図 8号竖穴

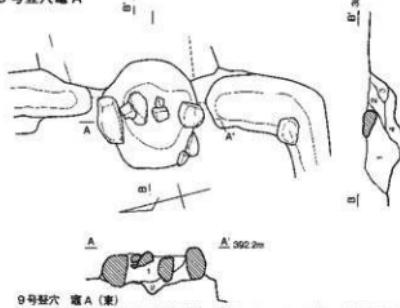


(1) 8号整穴土器出土状況

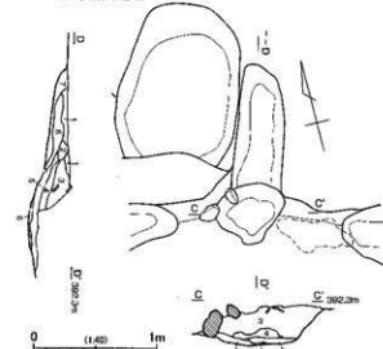
(2) 8号竪穴石器出土状況



9号竪穴 A

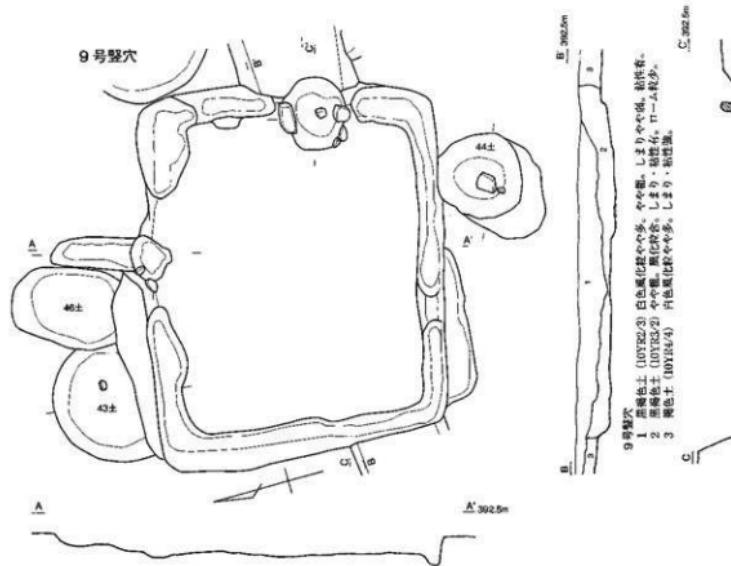


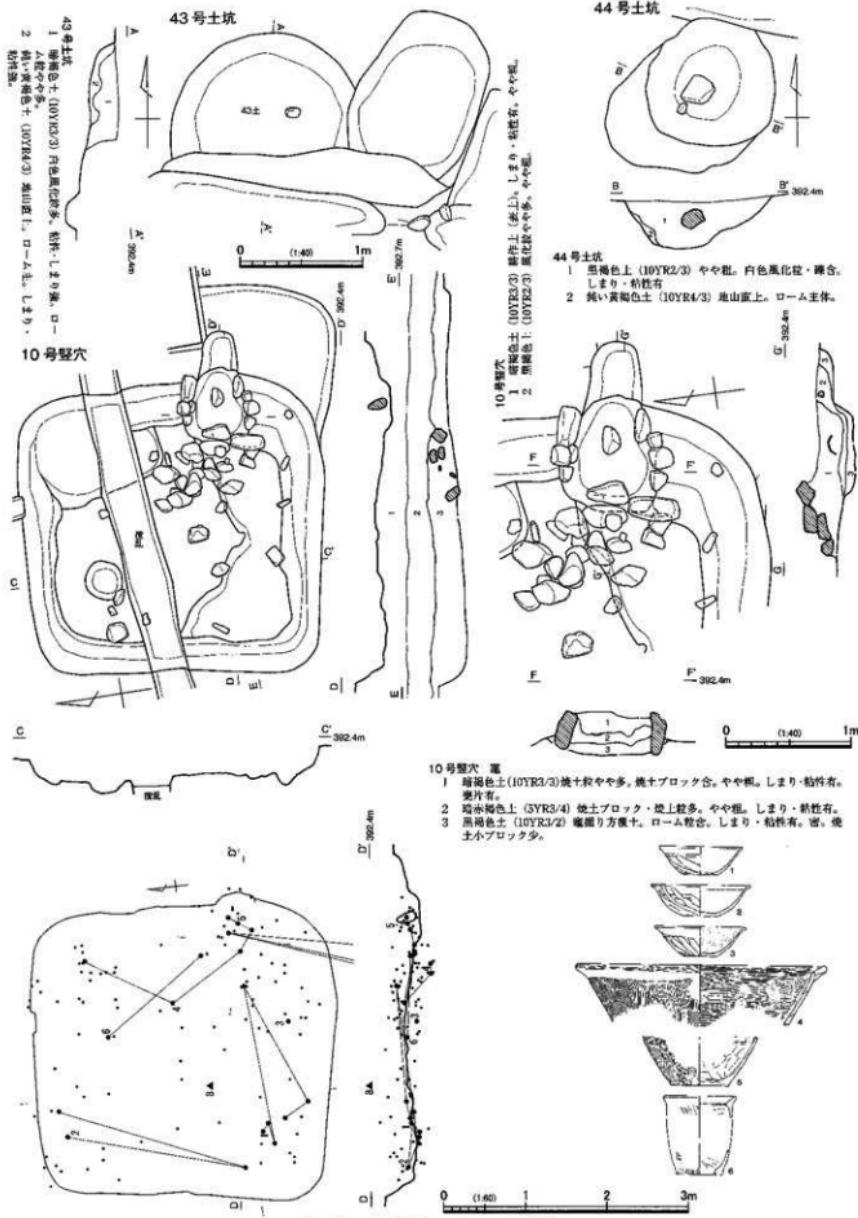
9号竪穴 B



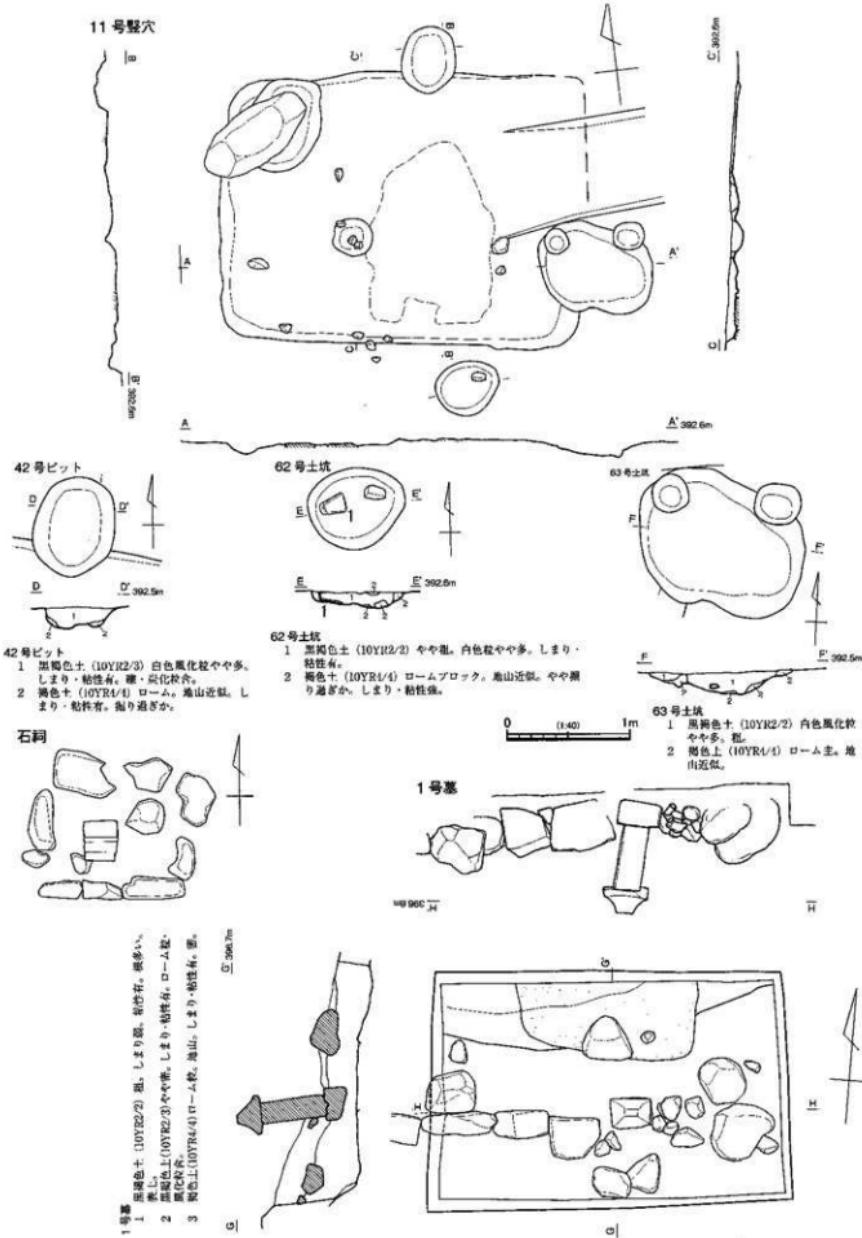
- 9号竪穴 審 A (左)
- 1 細赤褐色土 (5YR2/3) 砂土質・微小ブロックや多・白色風化鉱物有。
  - 2 黑褐色土 (10YR2/3) 1層被る・しまり・粘性有。
  - 3 塔場色土 (10YR2/4) ローム粘土や多・しまり・粘性有。
  - 4 黑褐色土 (10YR2/3) や少・しまり・粘性有。

第7図 8・9号竪穴



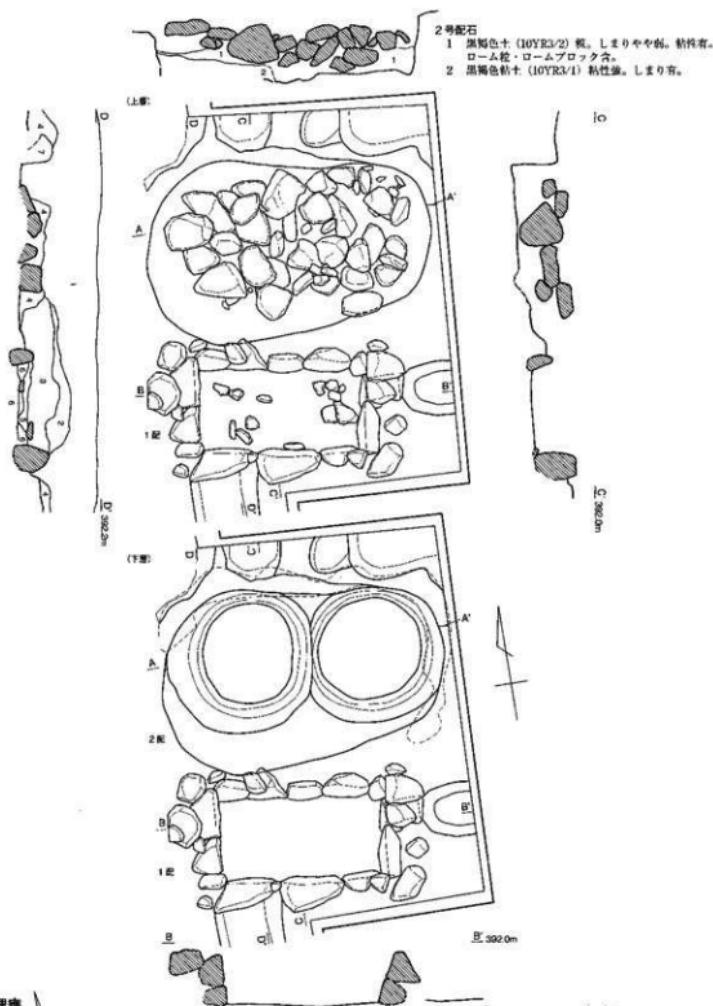


第9図 10号竪穴、43・44号土坑

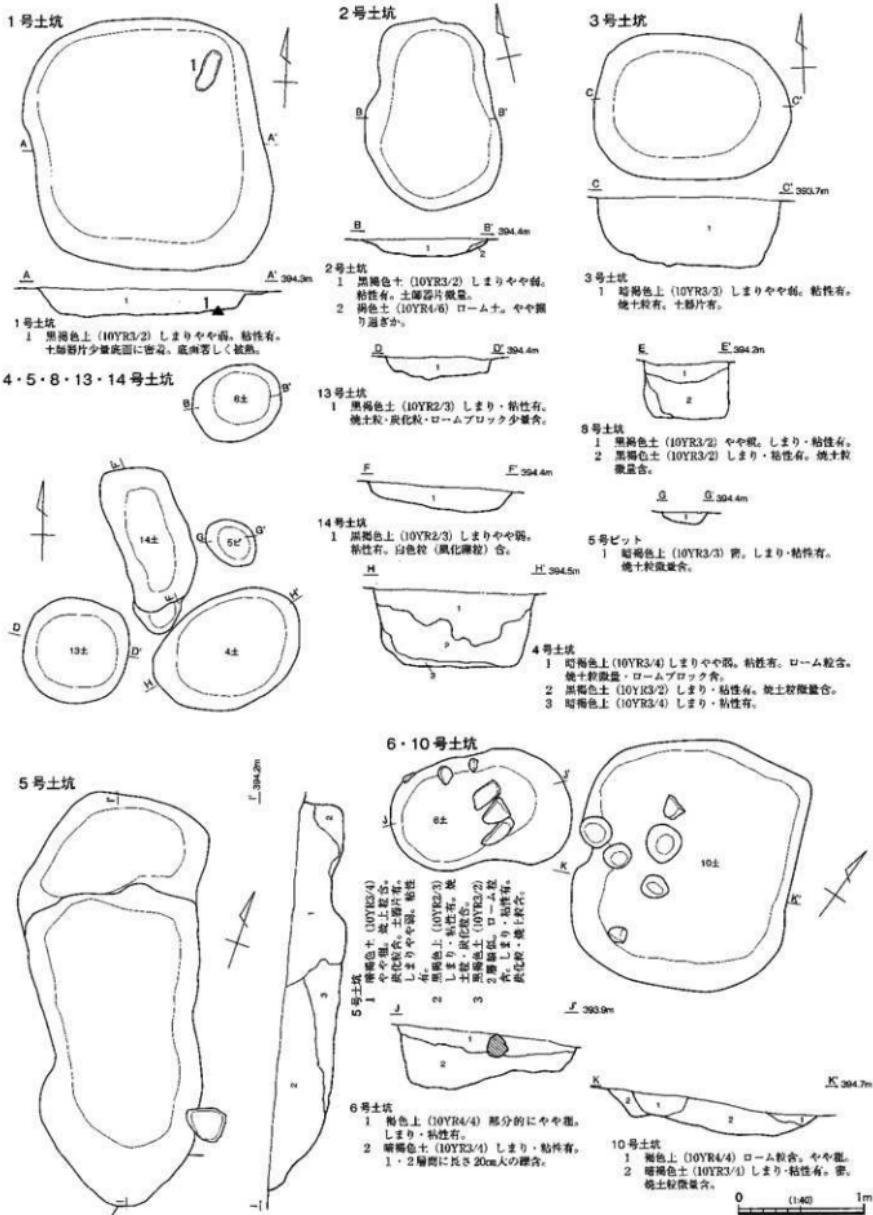


## 1・2号配石

A' 392.0m

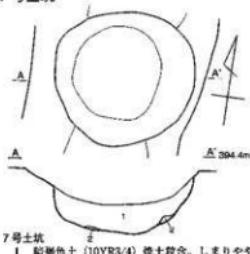


第11図 1・2号配石、1～3号埋甕



第12図 1～6・8・10・13・14号土坑、5号ピット

7号土坑



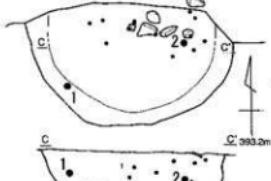
7号土坑  
1 暗褐色土(10YR3/4) 焙土粒含。しまりやや弱。粘性有。  
2 褐色土(10YR4/6) ローム土。

9号土坑



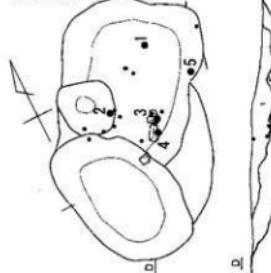
9号土坑  
1 黑褐色土 (10YR2/3) やや湿。土器小片含。礫 (延3~5cm) 含。上より、粘性有。  
2 黑褐色土 (10YR3/3) 口~1m 粘合。帶。下より、粘性有。

11号土坑



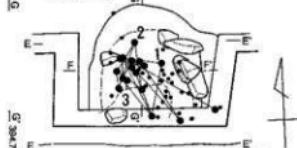
11 号土坑  
1 喙褐色土 (10YR3/4) しまり・  
性有。上器片含。炭化粒微量含。

12号土坑



12号土壤  
1. 鉛褐色土 (10YR3/3) 「間に」上品含。  
しまり強。粘性高。燒上坡。原化合。  
2. 鐵褐色土 (10YR2/3) しまり。粘性高。  
鐵土較少含。

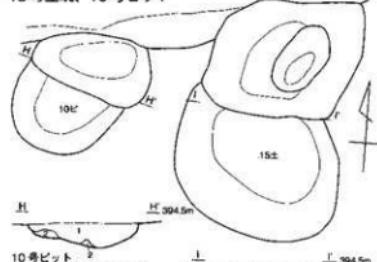
16号土壤



16号土坑

- 1 黒褐色上(10YR2/3)表土。しまり・粒状有性。風化繩粒子有。
- 2 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒含。風化粒子有。
- 3 喀斯特土(10YR3/4) ローム粒や砂多。礫上粒や砂多。炭化物含。
- 4 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒多。炭化物含。黒面焼土プロトクル化。

### 15号土坑、10号ピット



10 ボギット <sup>2</sup>	1 泥炭土 (HYVR3/4) 白色 風化粒・赤色粘土や多。ロー ム含鉄。しまり有。	1 394.5m
11 深紅色土 (HYR3/4)	2 風化粘土・赤色粘土や多。ロー ム含鉄。しまり有。	15 土壌地
2 紅色土 (10YR4/6)	3 ブロック・ローム主。地 上部。	1 褐色粘土 (10YR3/4) 白色風化粒や多。赤色粘 土。少し黒鐵錆。

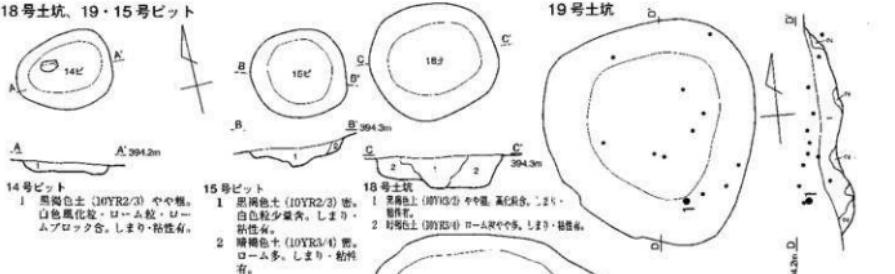
#### 17号土壠、12・13号ピット



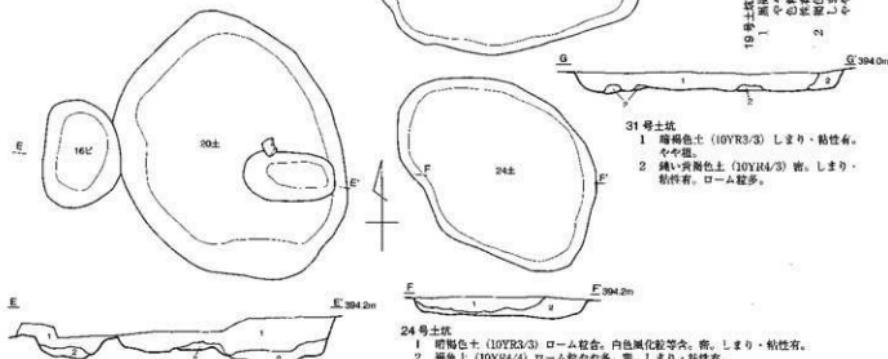
17号土壤  
 1 黒褐色土 (30YR2/3) 白色風化殻やや多。黃色粒、赤色粒等含。  
 2 緑褐色土 (10YR3/4) ロームブロックと1層の混含。しまり・粘性有。  
 3 雪色土 (10YR4/4) ローム上主鉢。地山に近い。

第13図 7・9・11・12・15～17号土坑、10・12・13号ピット

18号土坑、19・15号ピット



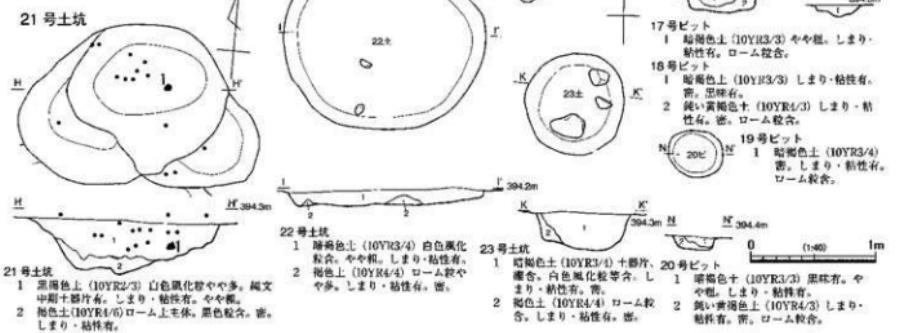
20・24・31号土坑、16号ピット



20号土坑、16号ピット

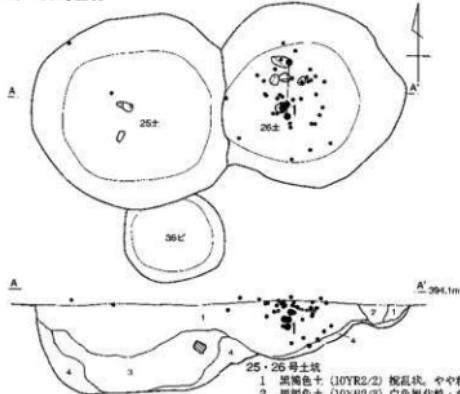
- 1 黒褐色土 (10YR2/3) やや粗。花崗岩碎・風化粒含。しまり・粘性有。  
2 銀い黄褐色土 (10YR4/3) 密。ローム粒や多。しまり・粘性有。

22・23号土坑、17～20号ピット

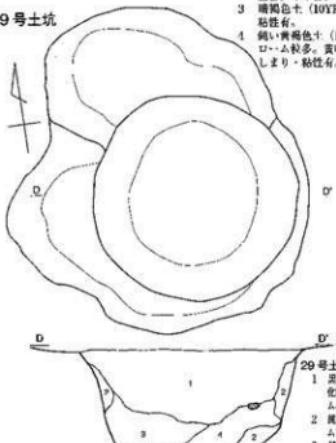


第14図 18～24・31号土坑、14・15・17～20号ピット

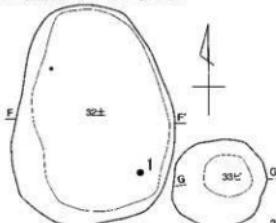
25・26号土坑



29号土坑



32号土坑、33・34号ビット



34号ビット

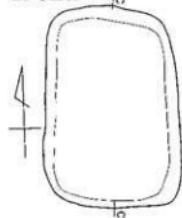
1. 深い黄褐色土 (10YR4/3) 売。しまり・粘性有。ローム粒や多。
2. 黄褐色土 (10YR4/3) 売。しまりやや強。粘性有。白色粒有。

第15図 25～30・32・36号土坑、33・34号ビット

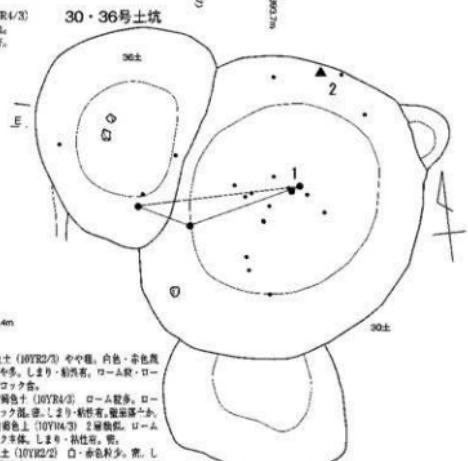
27号土坑



28号土坑



30・36号土坑



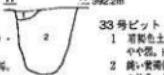
32号土坑



30・36号土坑

1. 黑褐色土 (10YR2/2) しまり・粘性有。黒色風化物・赤色粒有。
2. 黑褐色土 (10YR3/2) やや密。しまり・粘性有。黑色風化物少。
3. 深褐色土 (10YR3/3) ローム粒や多。黒・白色粒有。黒・白色風化物少。

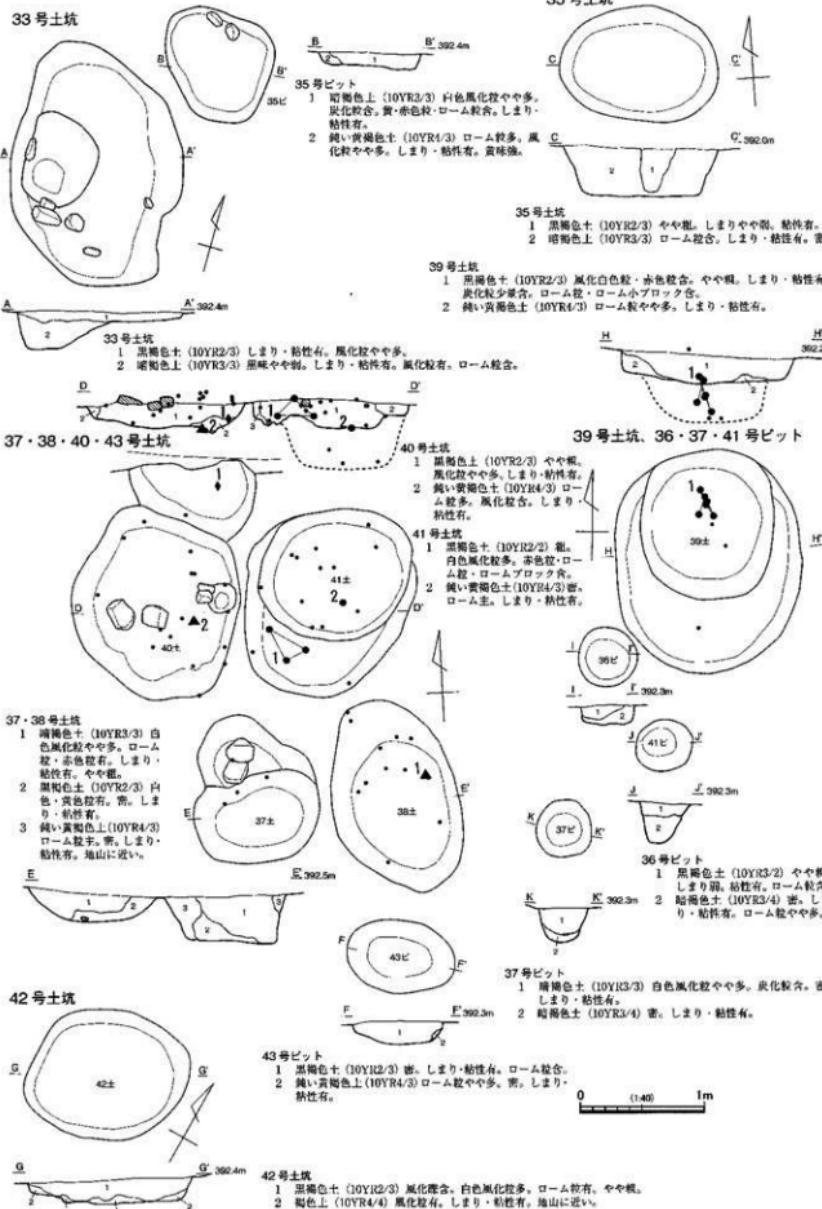
33号ビット



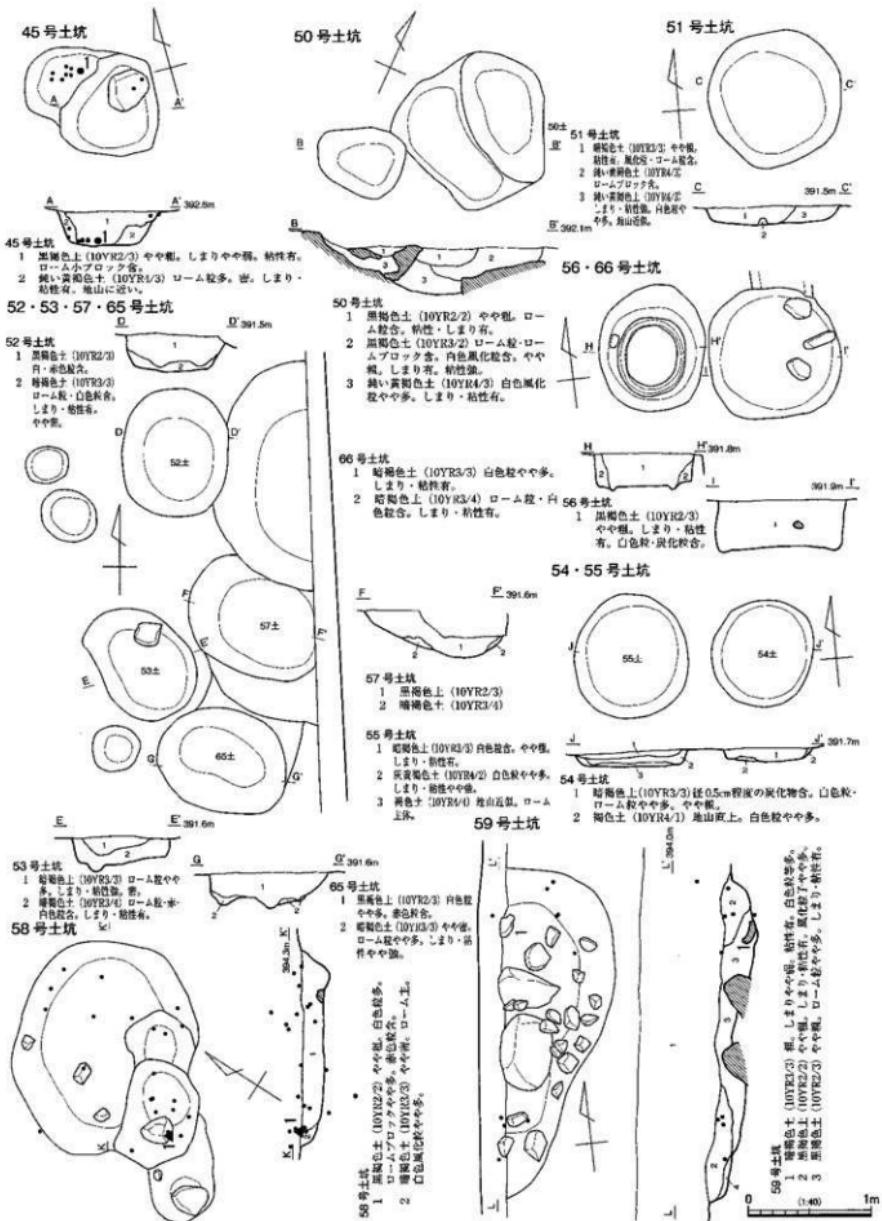
33号ビット

1. 深褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性有。白色粒有。
2. 深褐色土 (10YR4/3) しまりやや強。粘性有。ローム粒や多。

0 (1:40) 1m

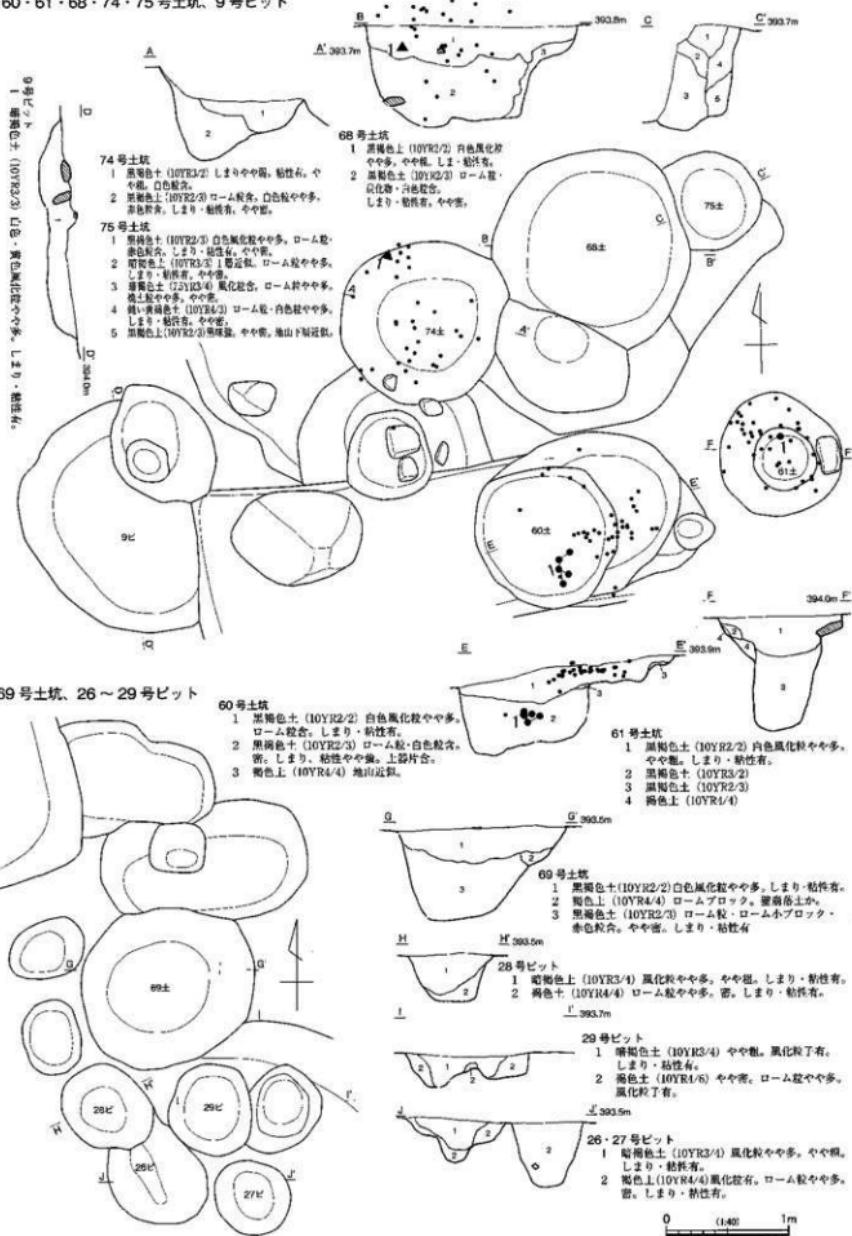


第16図 33・35・37～42号土坑、35～37・41・43号ビット

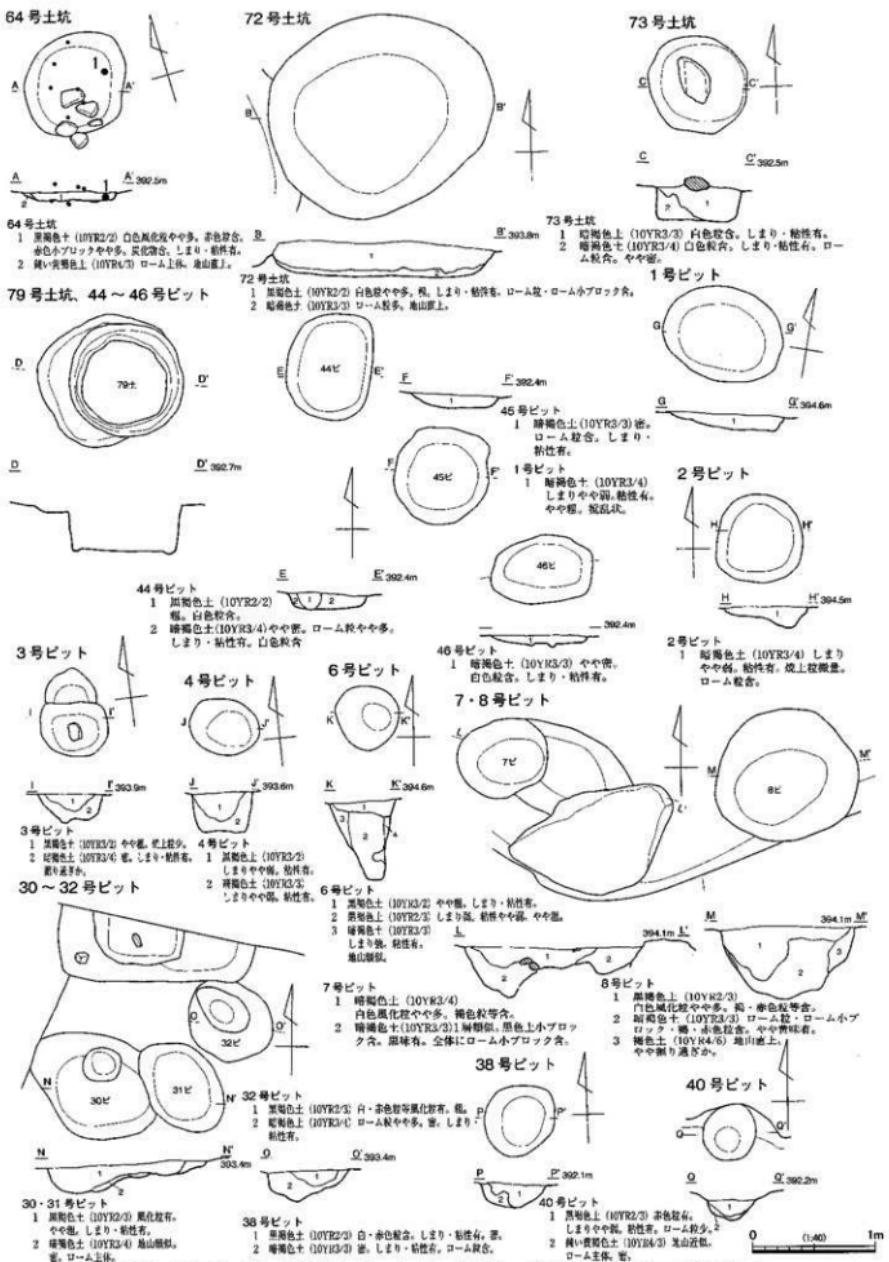


第17圖 45·50~59·65·66號土坑

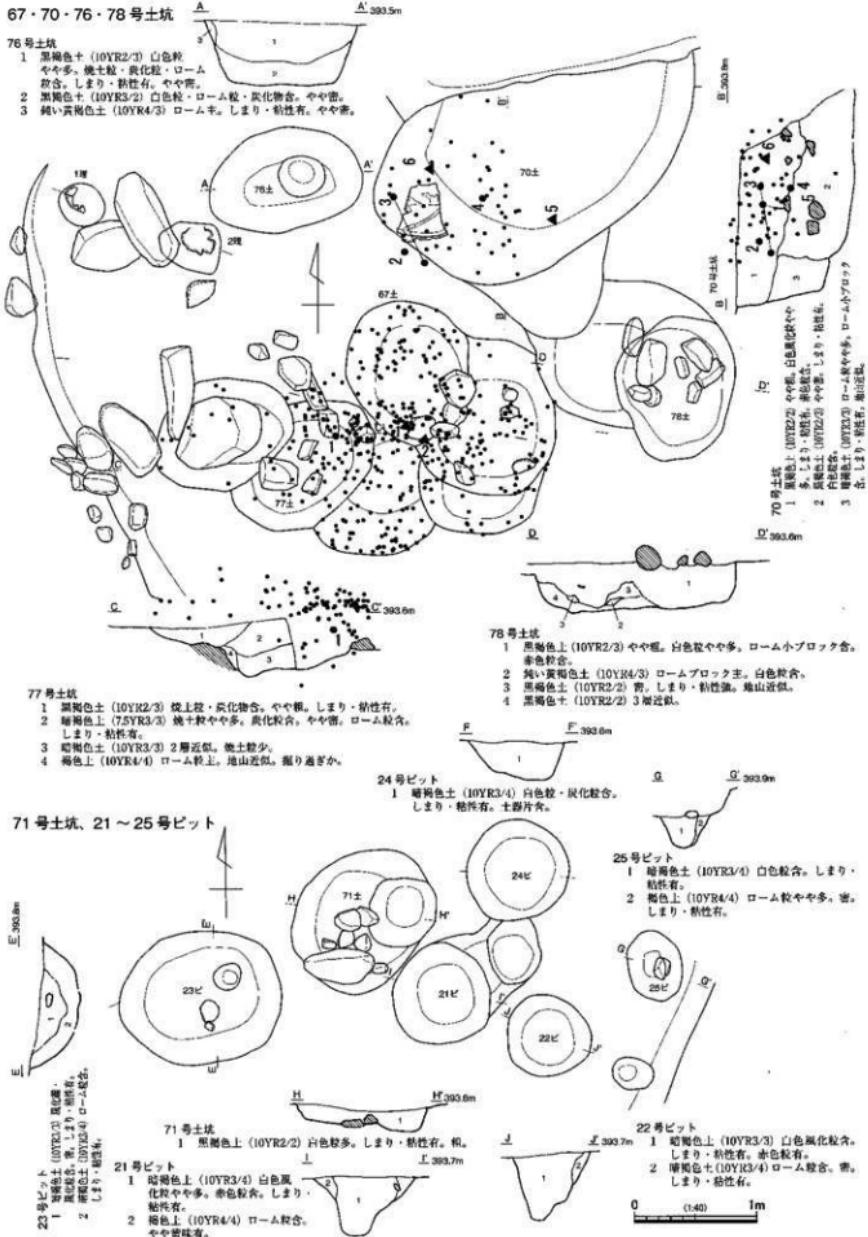
60・61・68・74・75号土坑、9号ピット



第18図 60・61・68・69・74・75号土坑、9・26～29号ピット

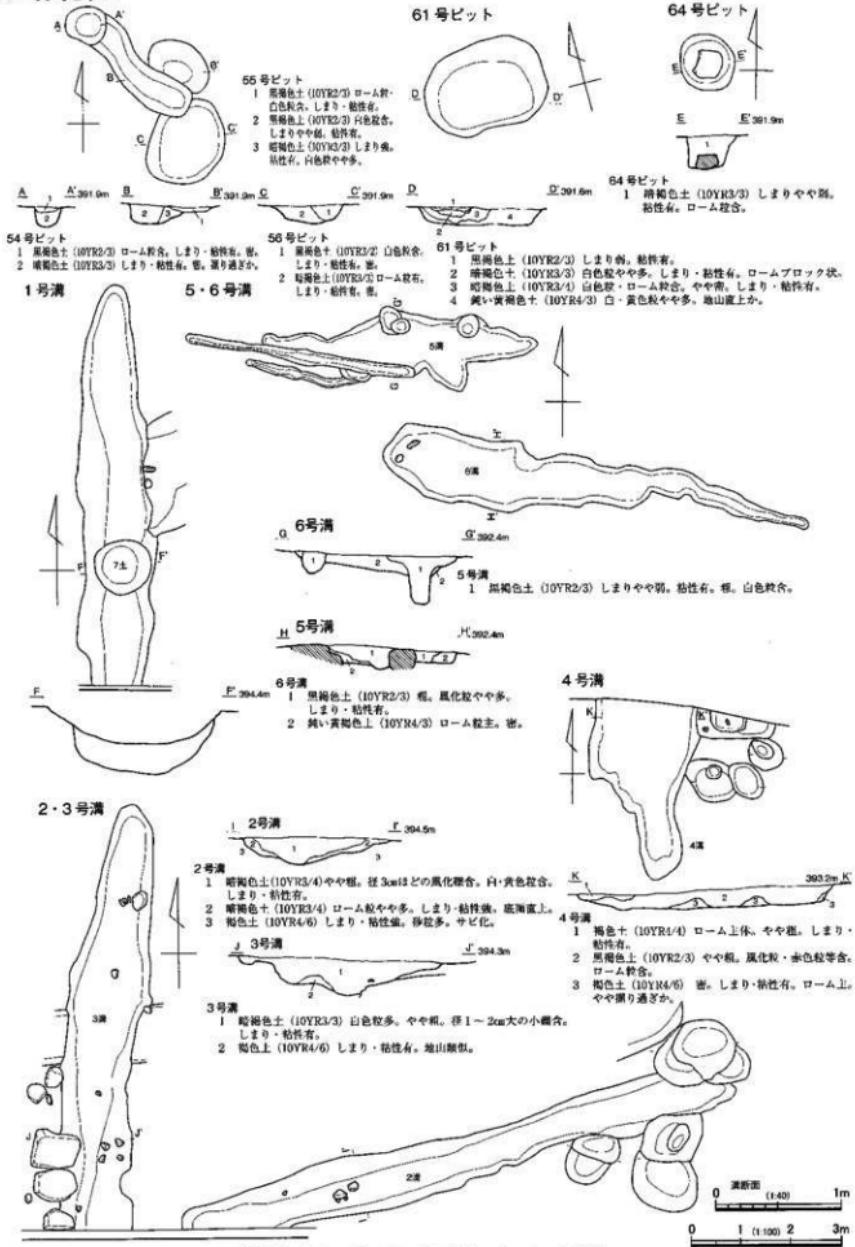


第19図 64・72・73・79号土坑、1～4・6～8・30～32・38・40・44～46号ピット



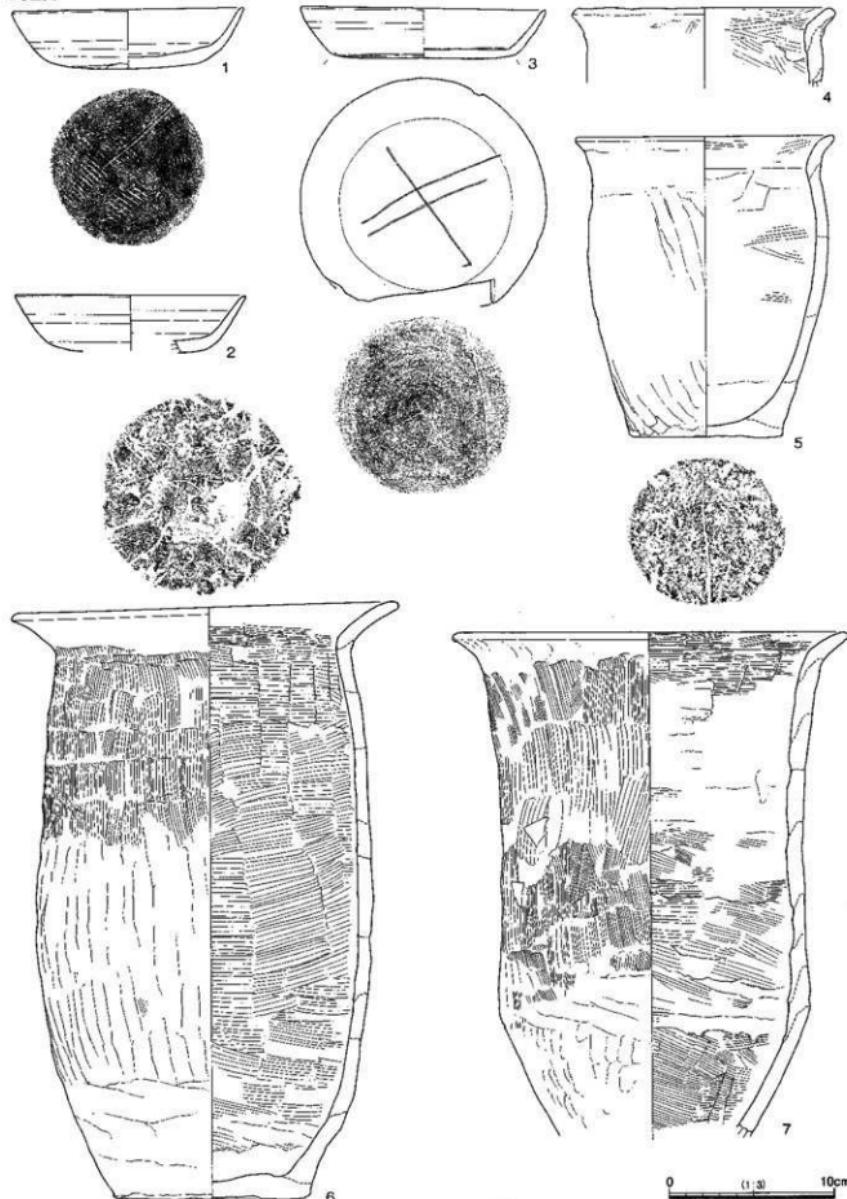
第20図 67・70・71・76～78号土坑、21～25号ビット

54～56号ピット

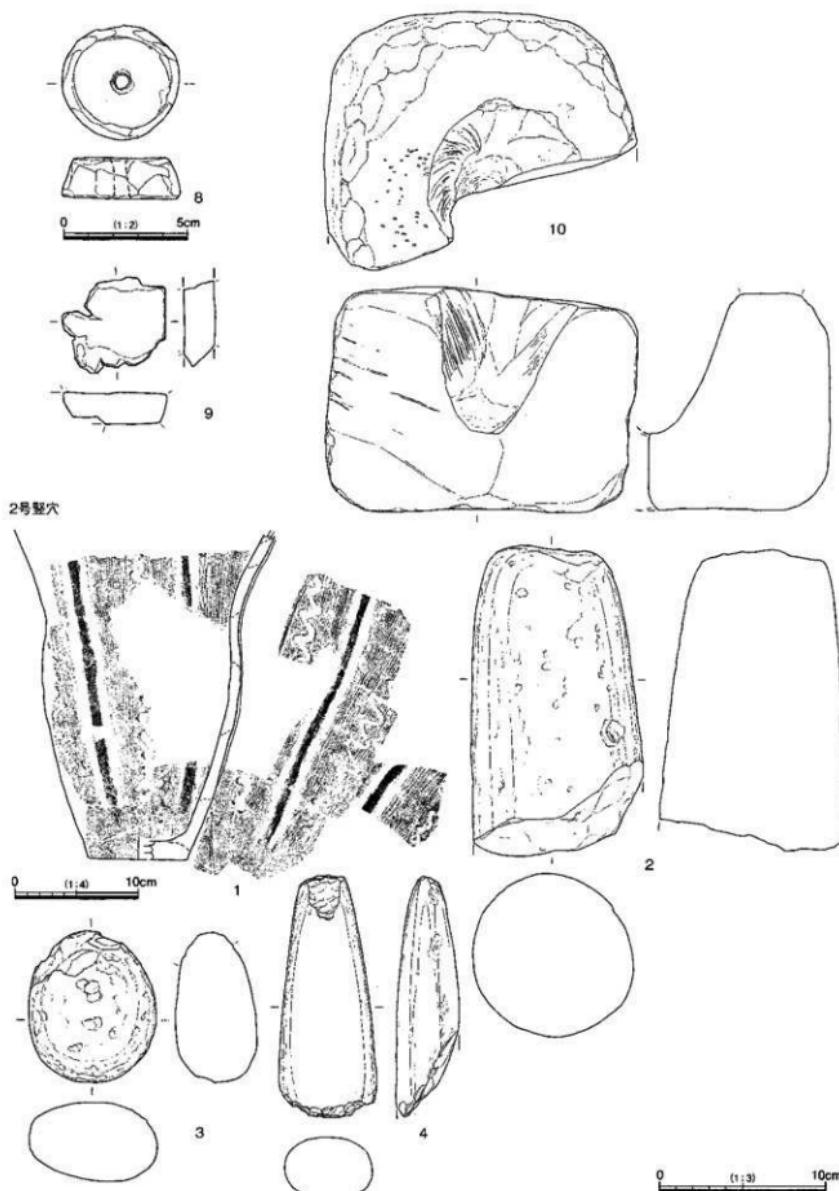


第21図 54～56・61・64号ビット、1～6号溝

1号竪穴

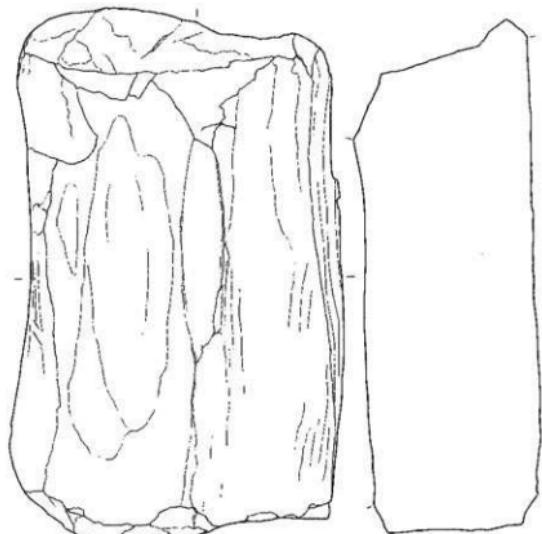
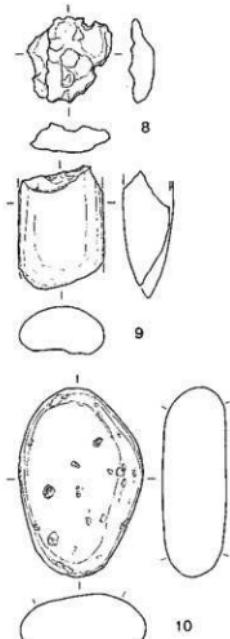
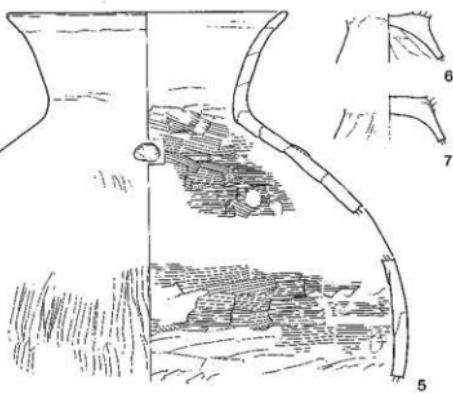
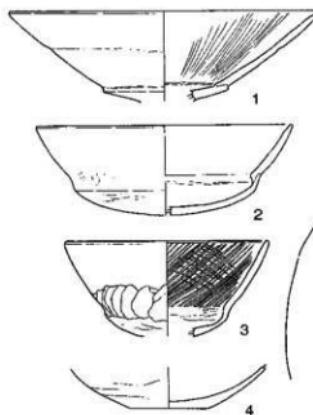


第22図 1号竪穴 遺物

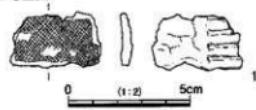


第23図 1・2号竪穴 遺物

4号竪穴

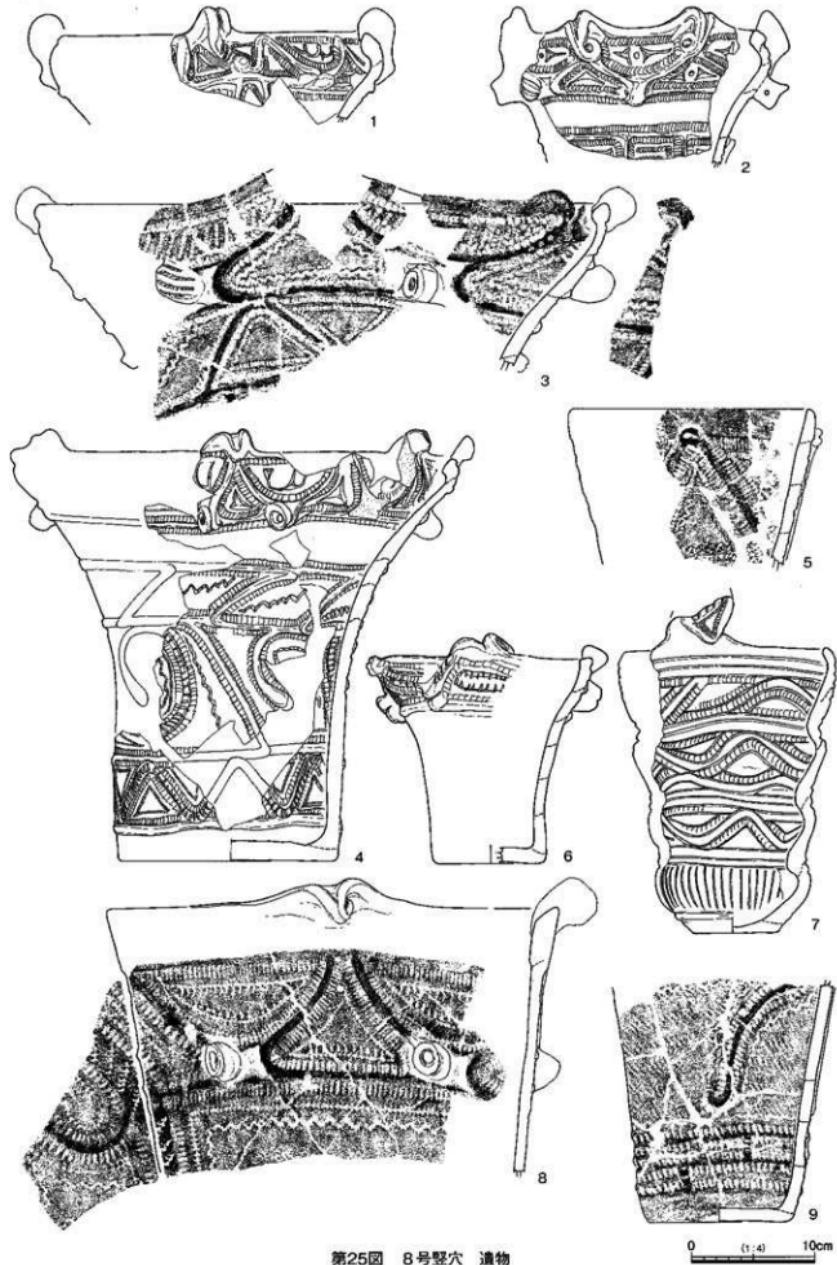


7号竪穴

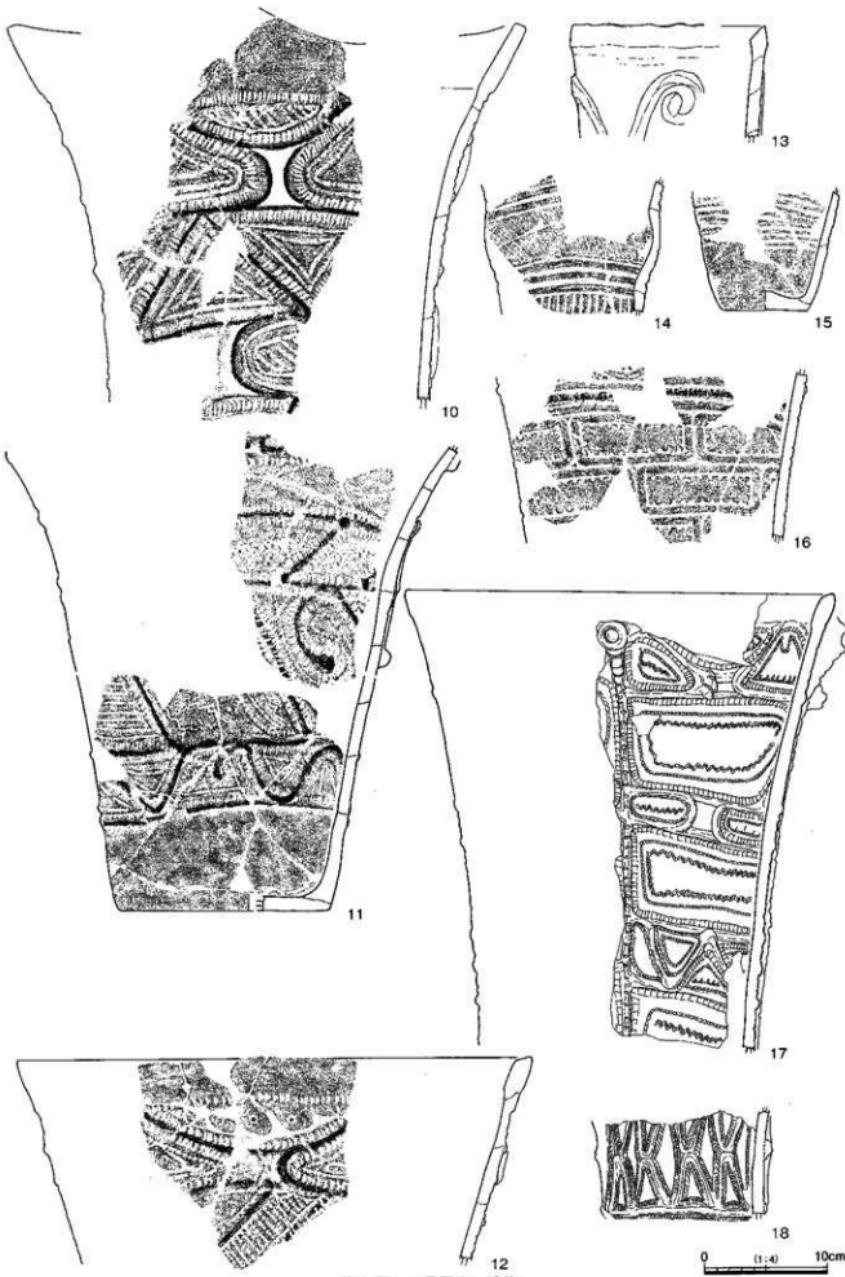


0 (1:2) 10cm

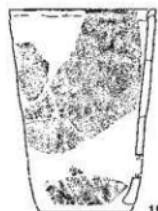
第24図 4・7号竪穴 遺物



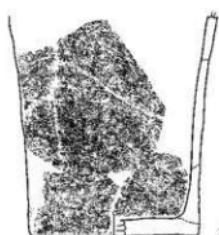
第25図 8号竪穴 遺物



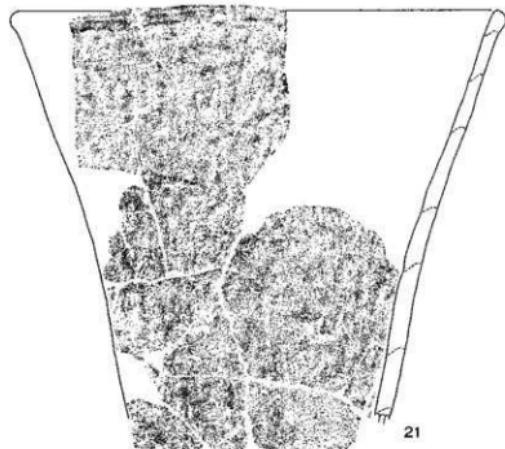
第26図 8号竪穴 遺物



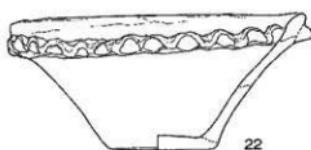
19



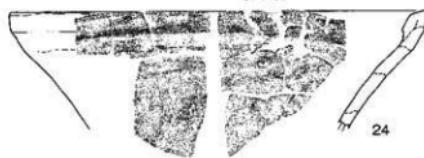
20



21



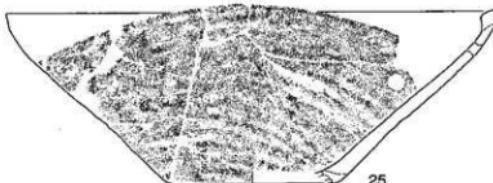
22



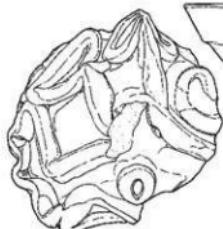
24



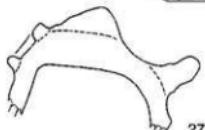
23



25



26



27

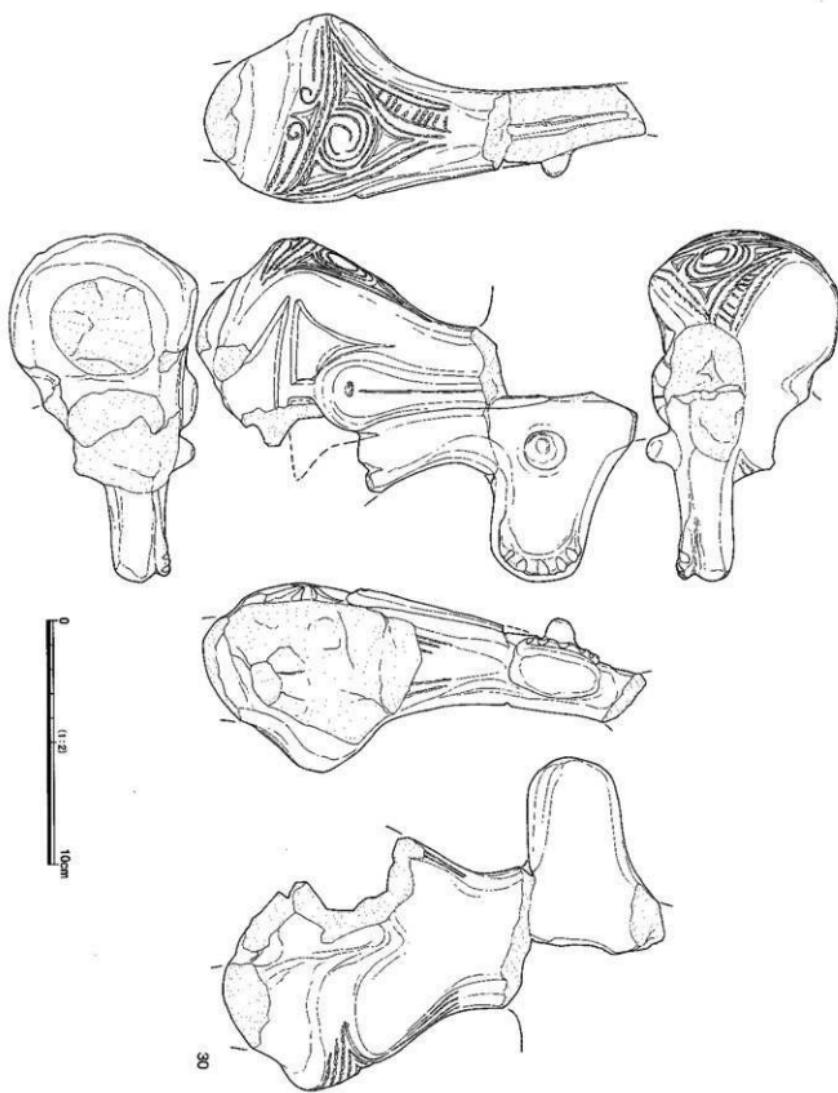


28

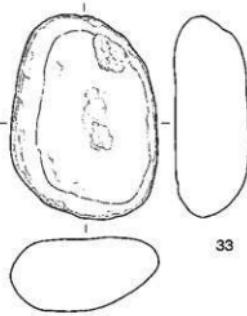
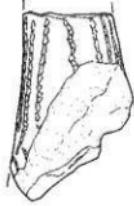
29

0 (1:4) 10cm

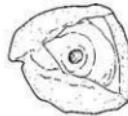
第27図 8号竪穴 遺物



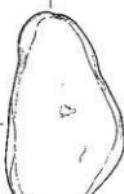
第28図 8号墳穴 遺物



31



32



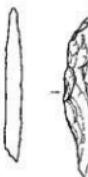
34



0 1:20 5cm



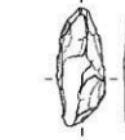
35



36



37



38



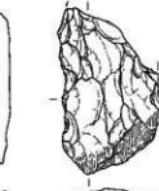
42



39



40



41

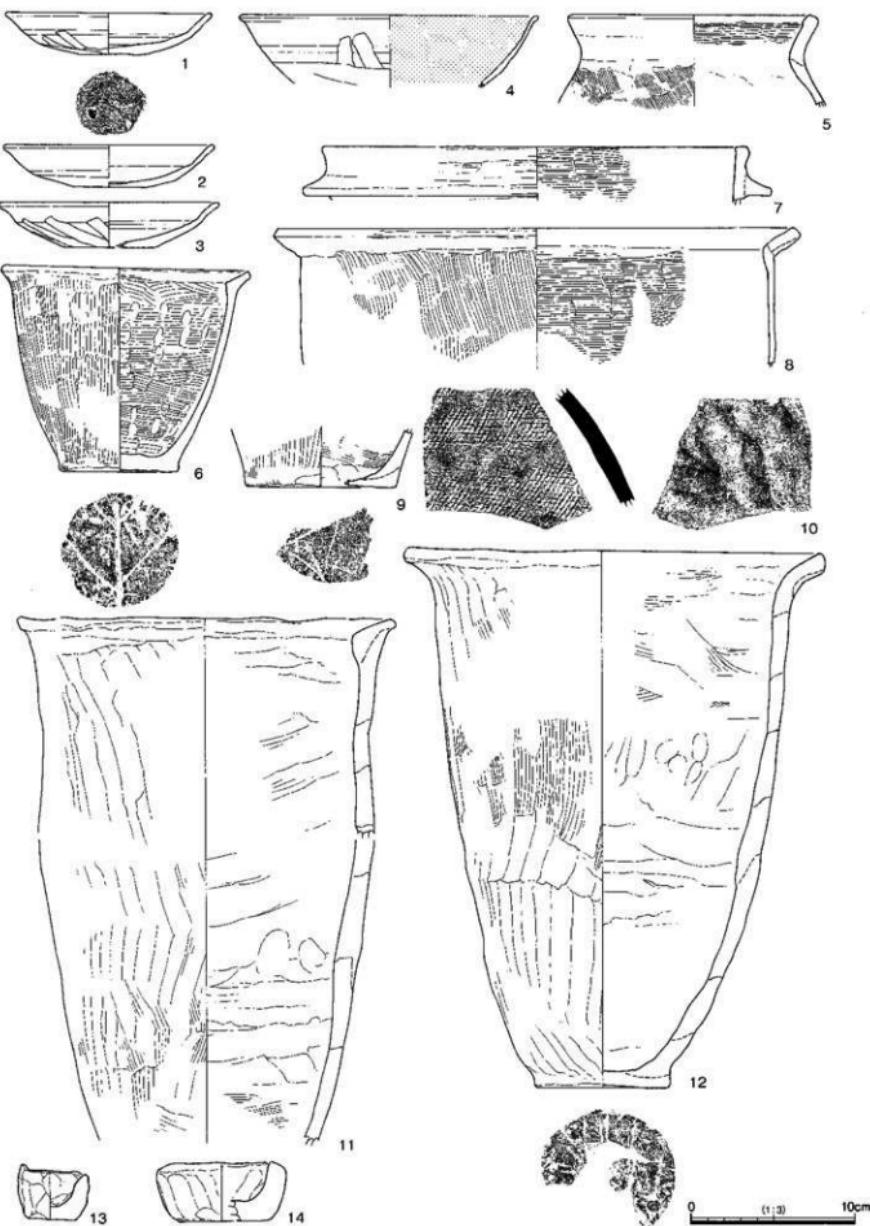


0 (1:3) 10cm

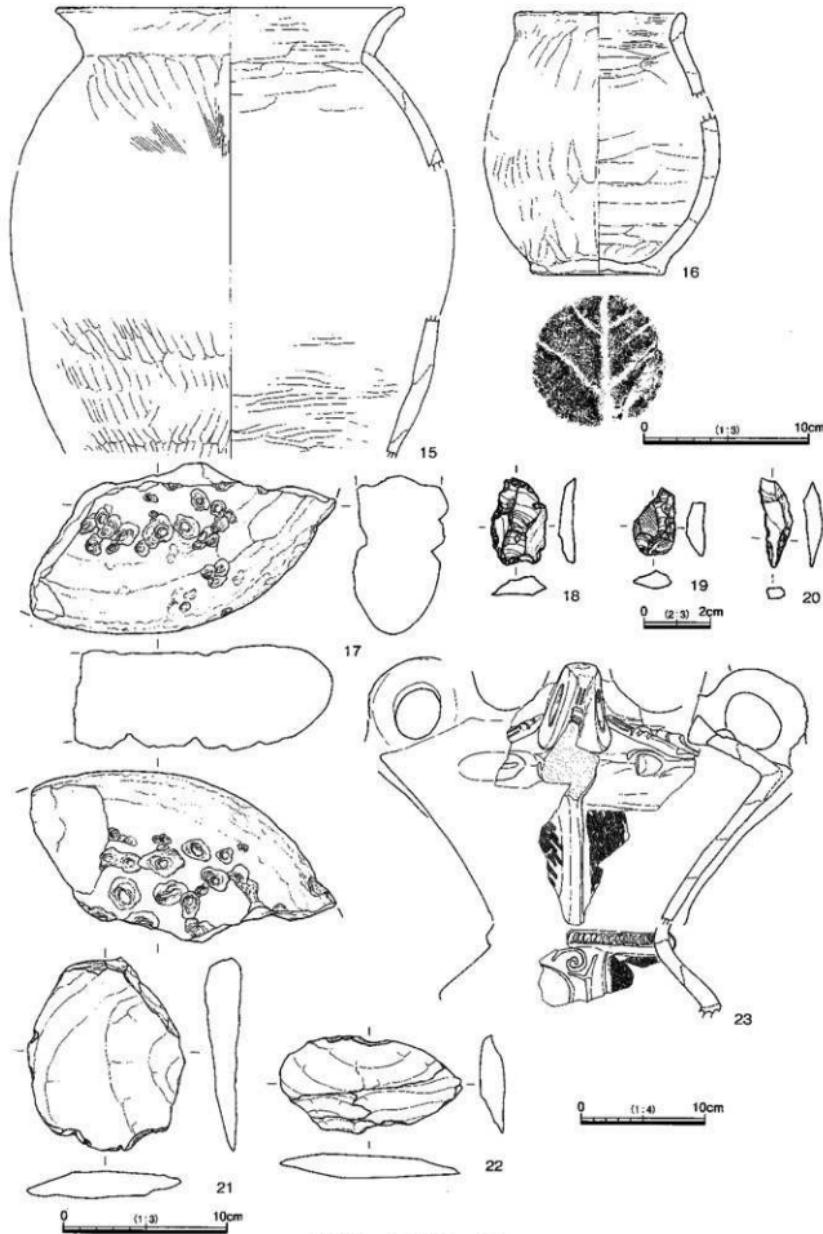
0 (2:3) 2cm

第29図 8号竪穴 遺物

9号竪穴

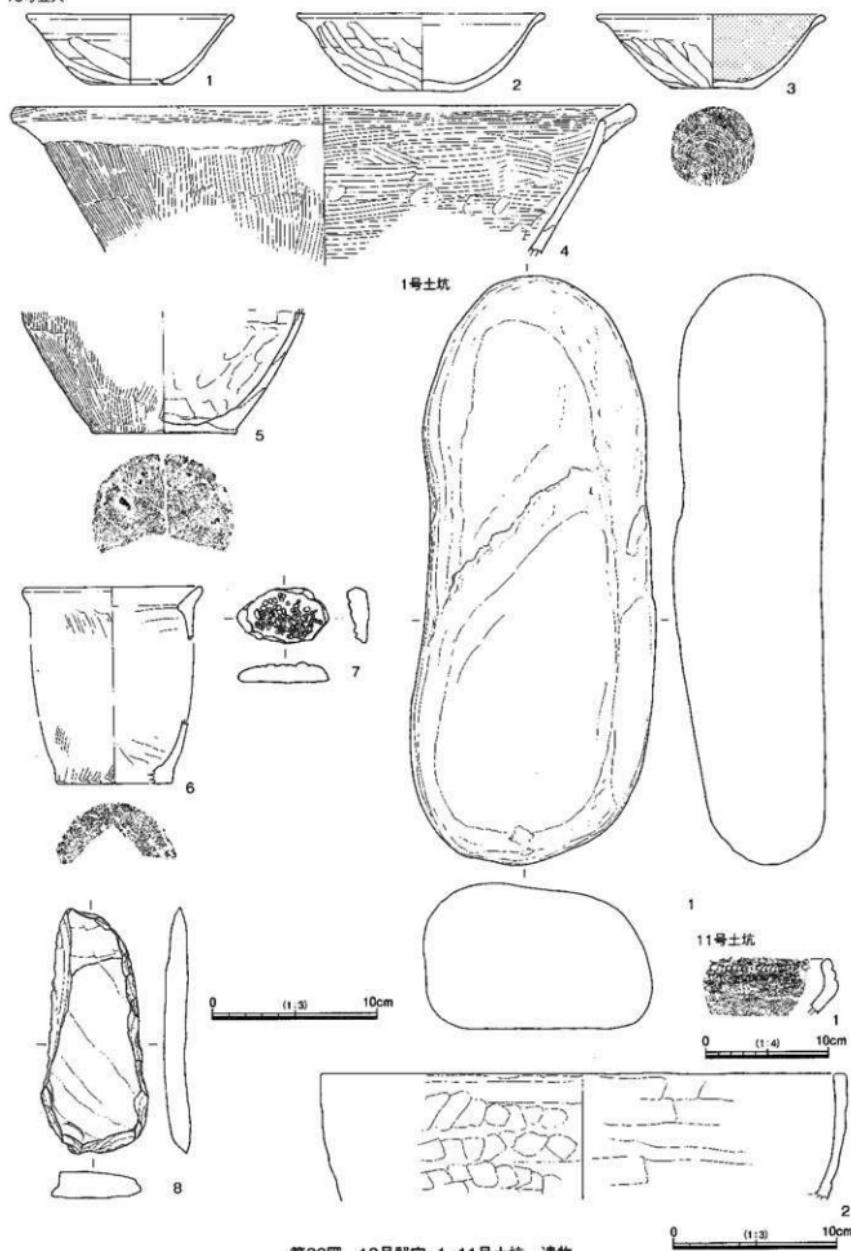


第30図 9号竪穴 遺物



第31図 9号竪穴 遺物

## 10号竖穴

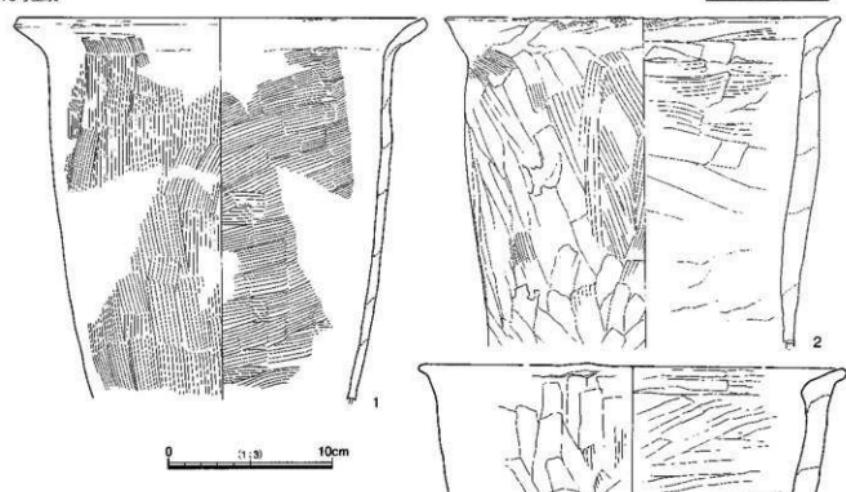


第32図 10号竖穴、1・11号土坑 遺物

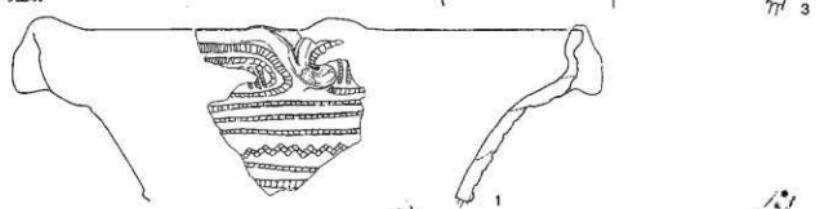
## 12号土坑



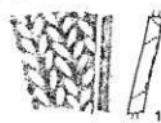
## 16号土坑



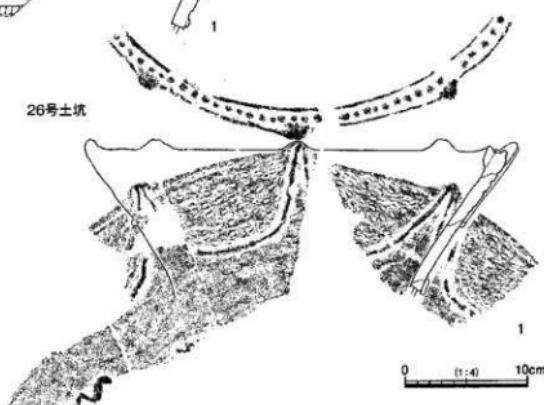
## 17号土坑



## 19号土坑



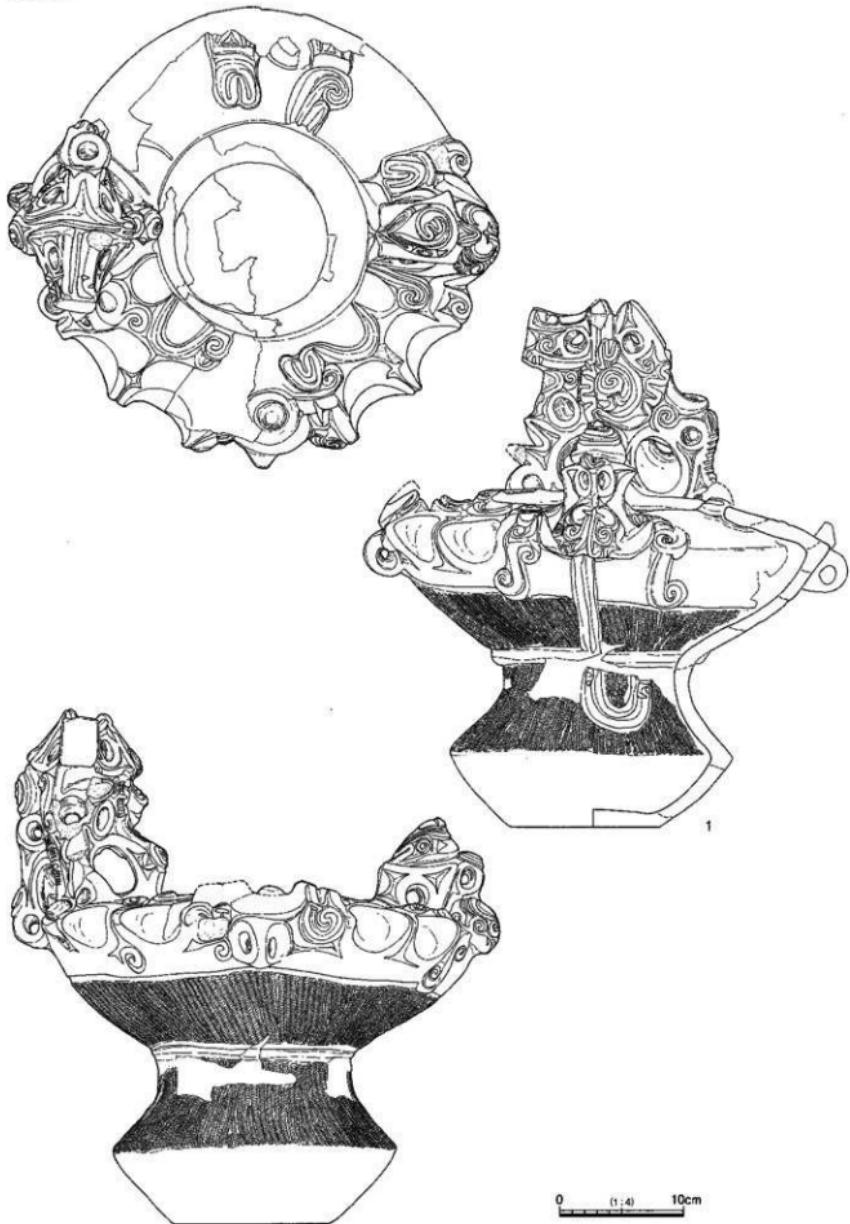
## 26号土坑



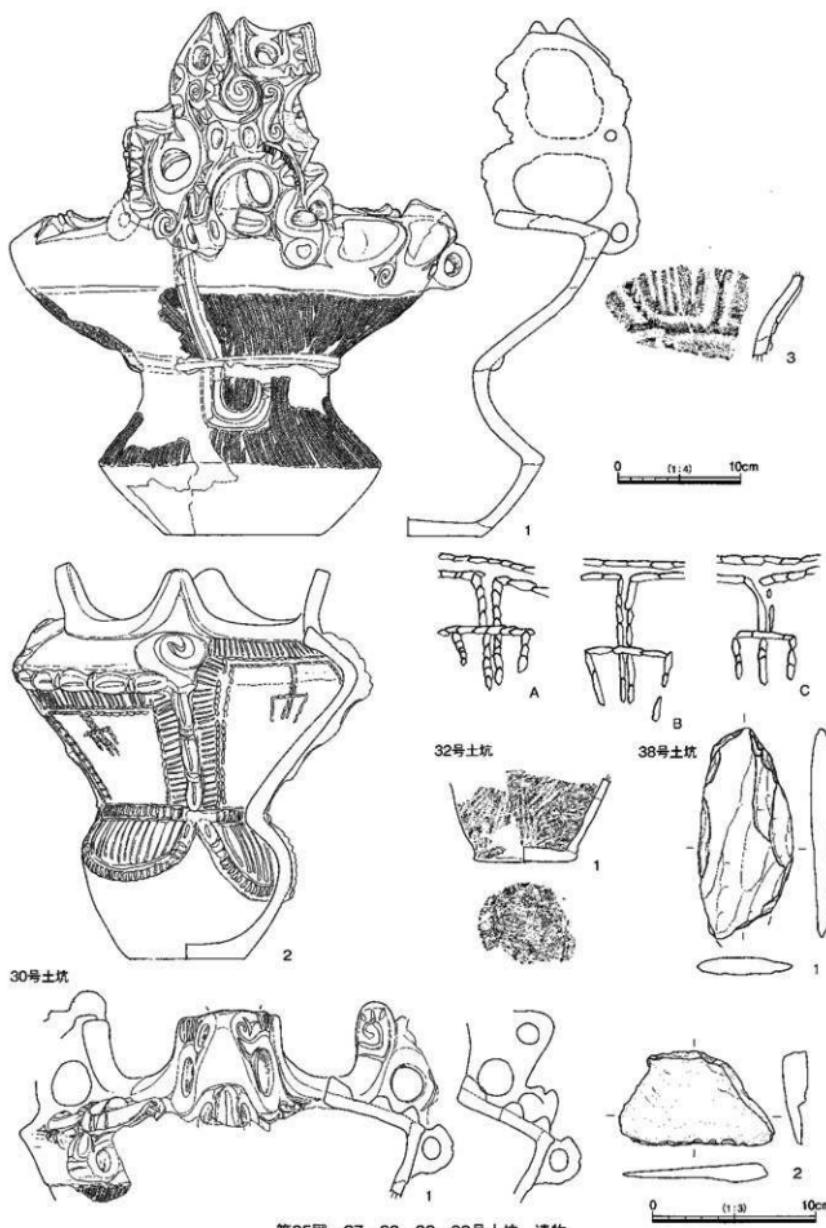
## 21号土坑



第33図 12・16・17・19・21・26号土坑 遺物

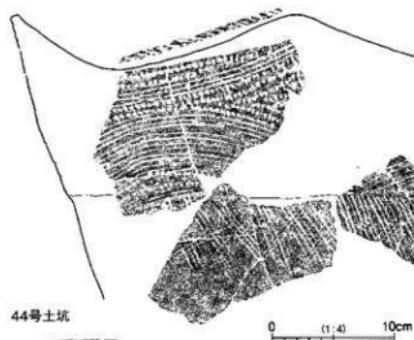


第34図 27号土坑 遺物

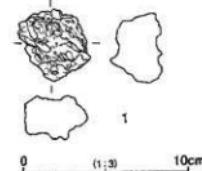


第35図 27・30・32・38号土坑 遺物

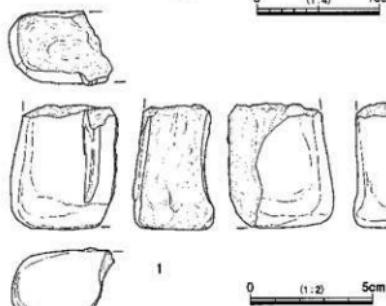
39号土坑



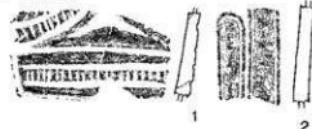
40号土坑



44号土坑



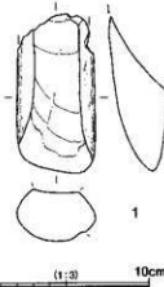
41号土坑



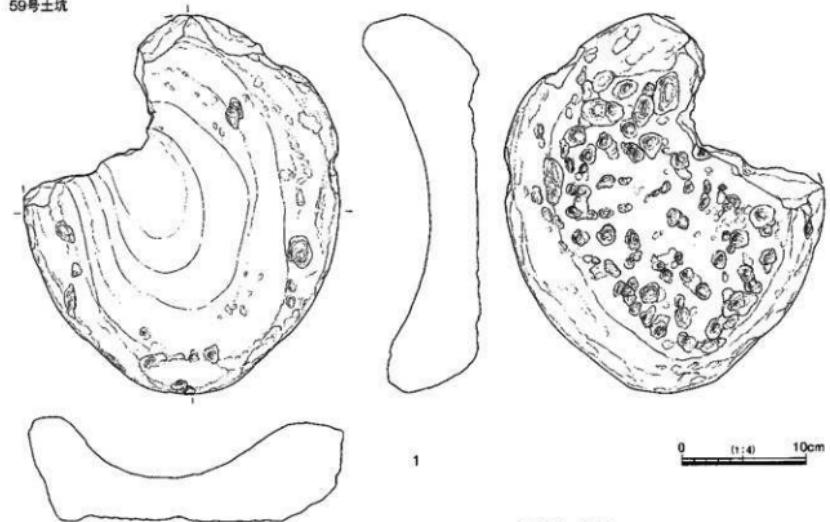
45号土坑



58号土坑

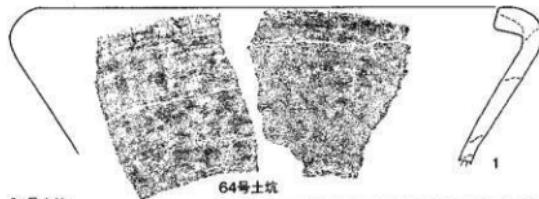


59号土坑

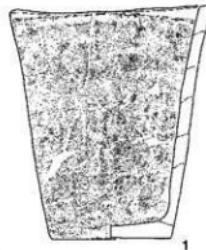


第36図 39~41・44・45・58・59号土坑 遺物

60号土坑



62号土坑



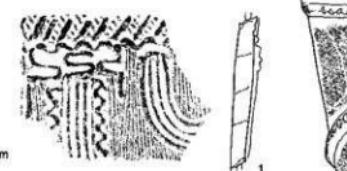
61号土坑



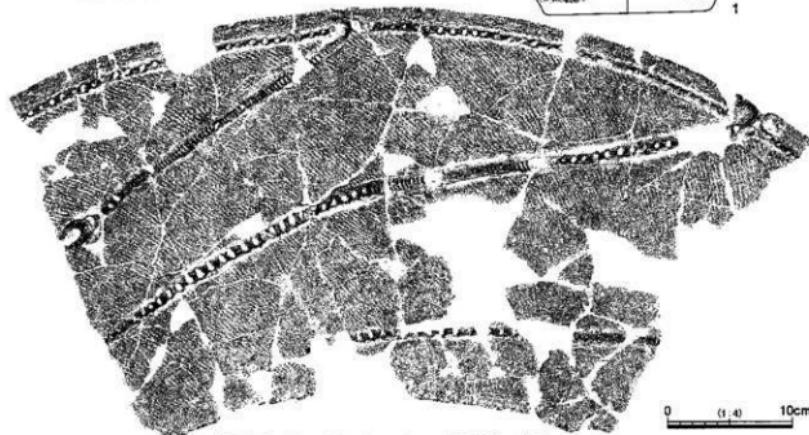
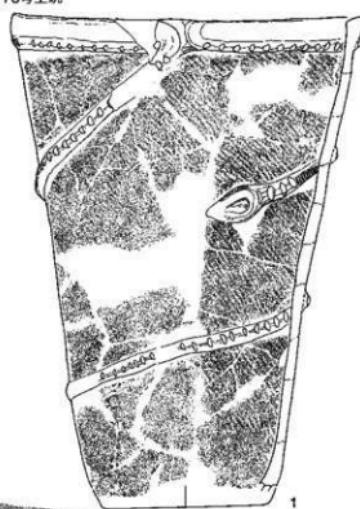
64号土坑



67号土坑

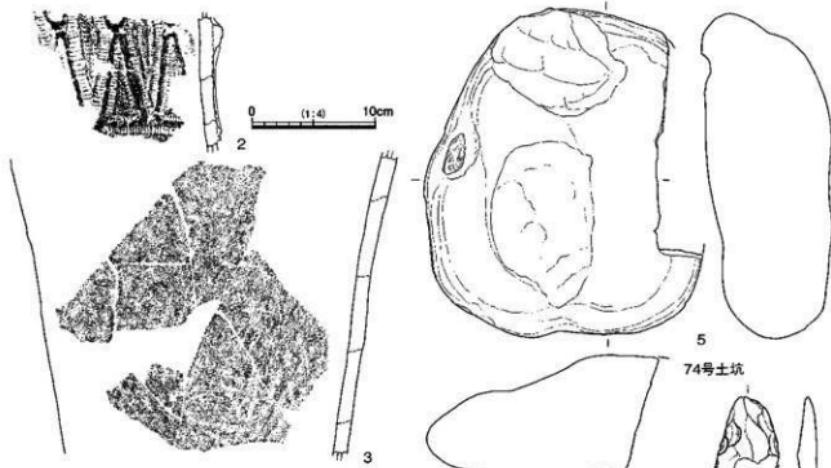


70号土坑

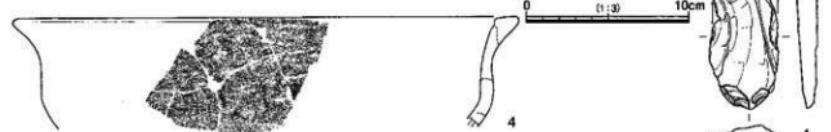


第37図 60～62・64・67・70号土坑 遺物

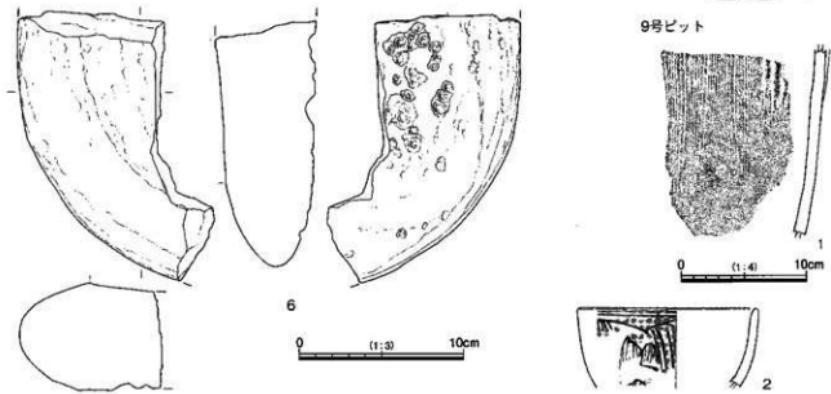
70号土坑



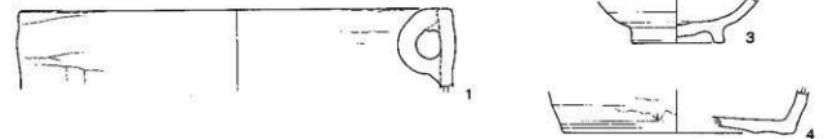
74号土坑



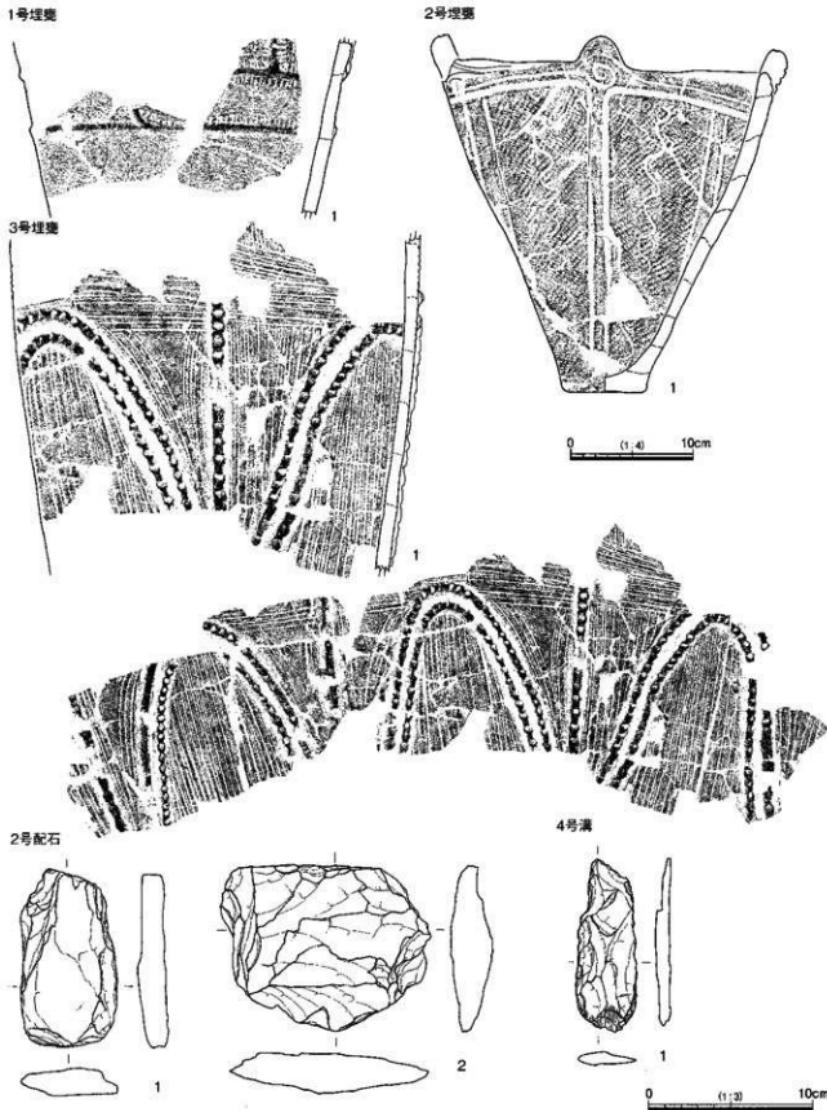
9号ピット



鉢



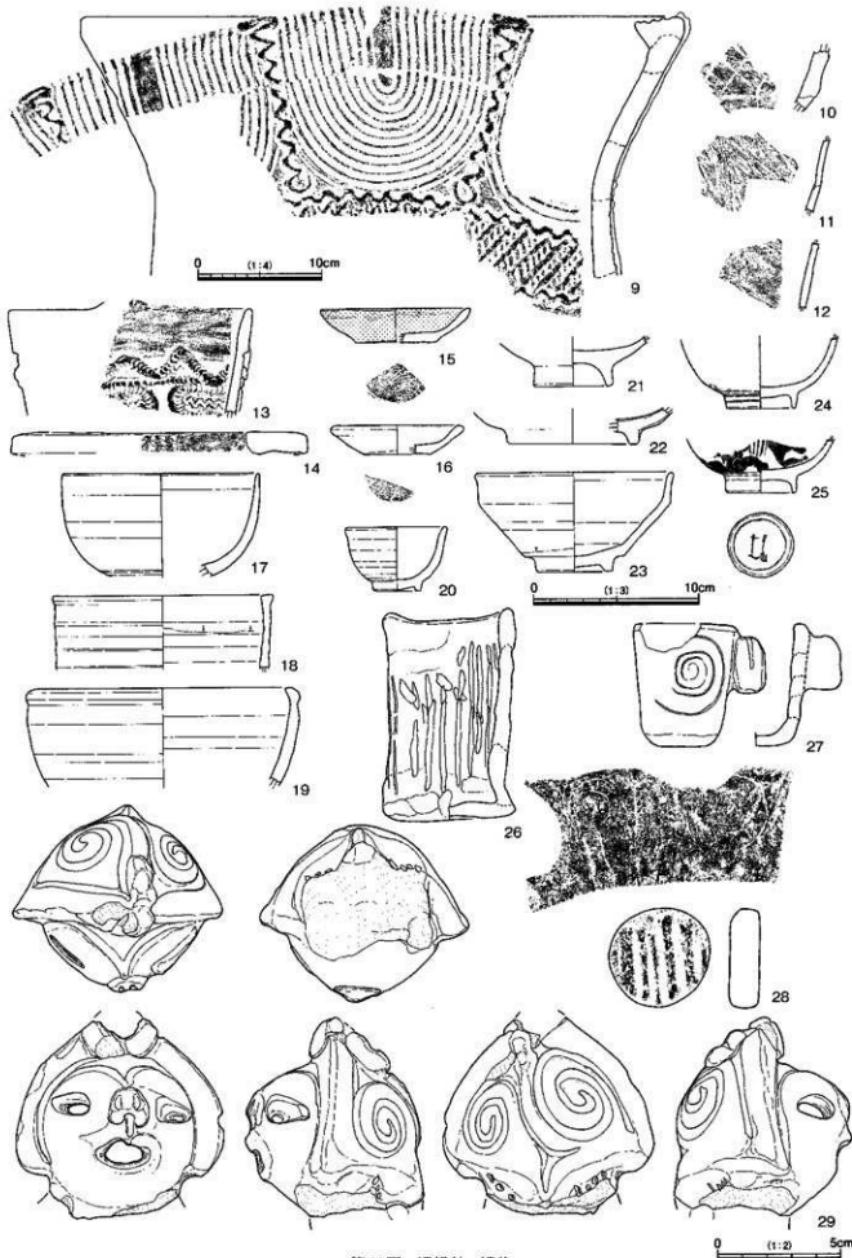
第38図 70・74号土坑、9号ピット、鉢 遺物



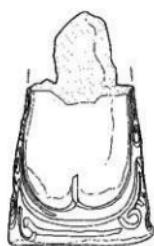
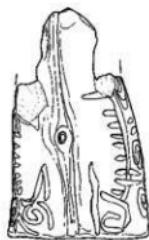
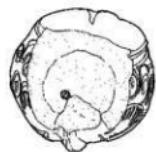
第39図 1～3号埋甕、2号配石、4号溝 遺物



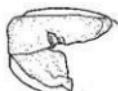
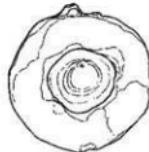
第40図 造構外 遺物



第41図 遺構外 遺物



30

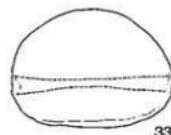
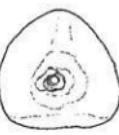


31

0 (1:2) 5cm

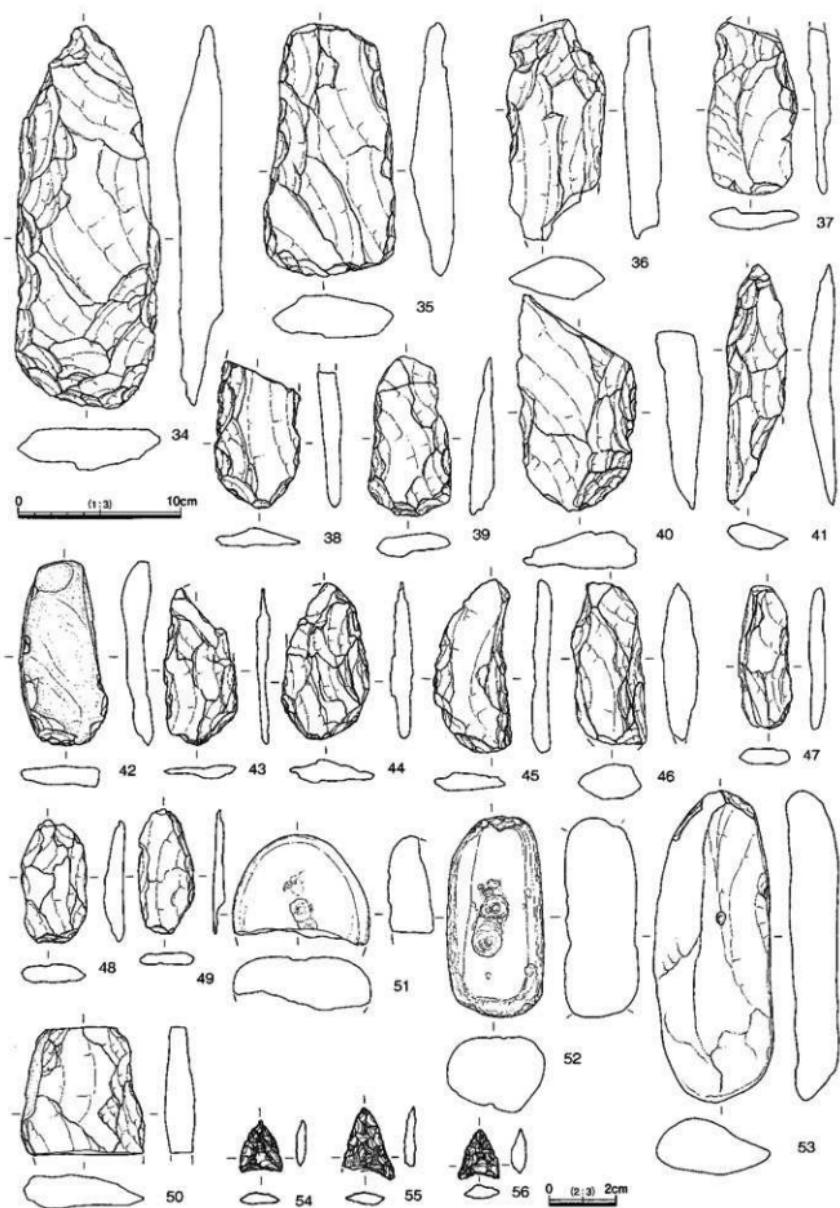


32

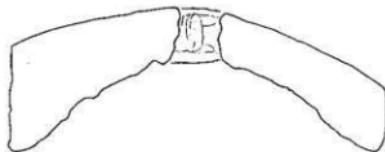
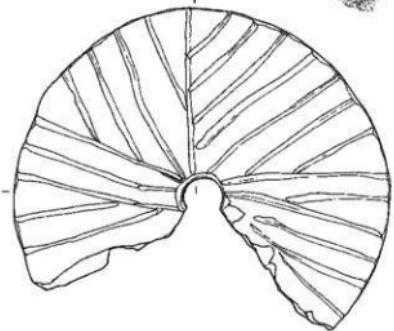
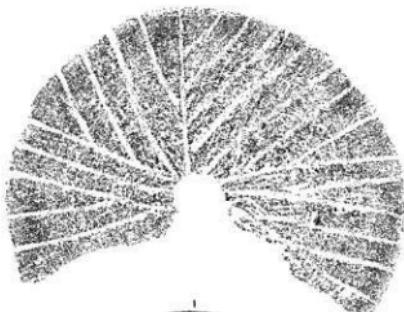


33

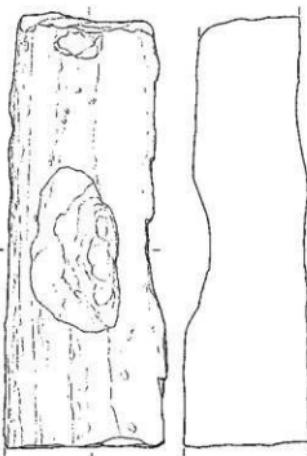
第42図 造構外 遺物



第43図 通構外 遺物

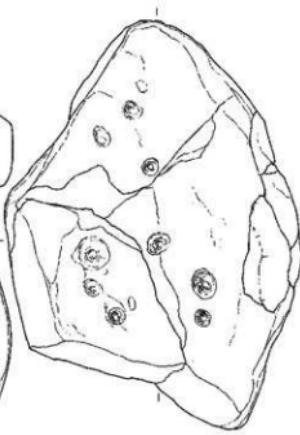


57



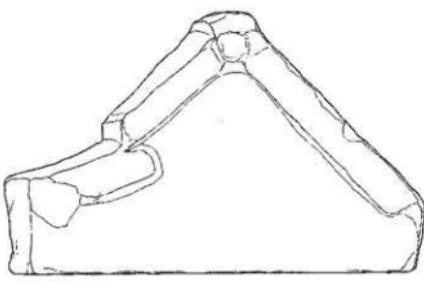
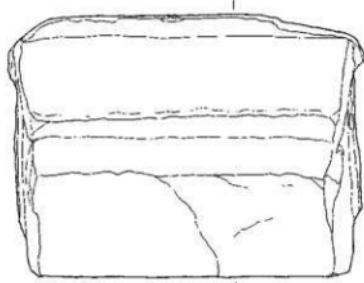
58

0 (1:3) 10cm

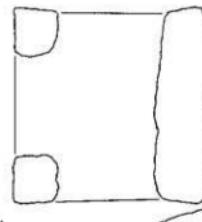


59

第44図 遺構外 遺物

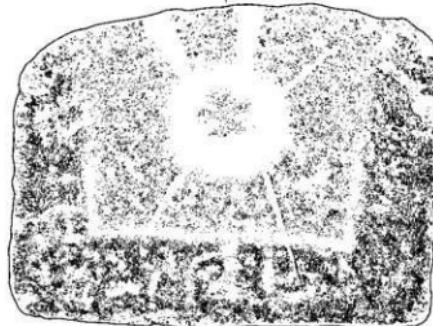
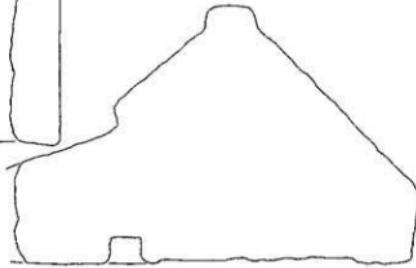


2

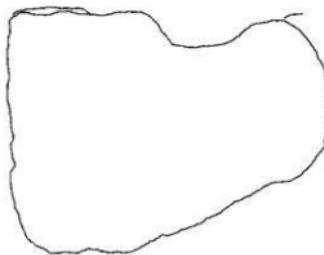


1

1

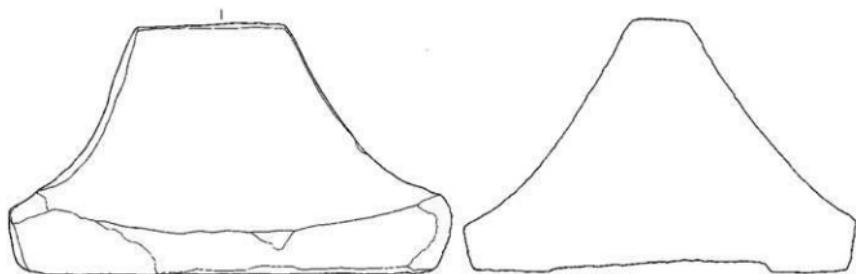


0 (1.4) 10cm

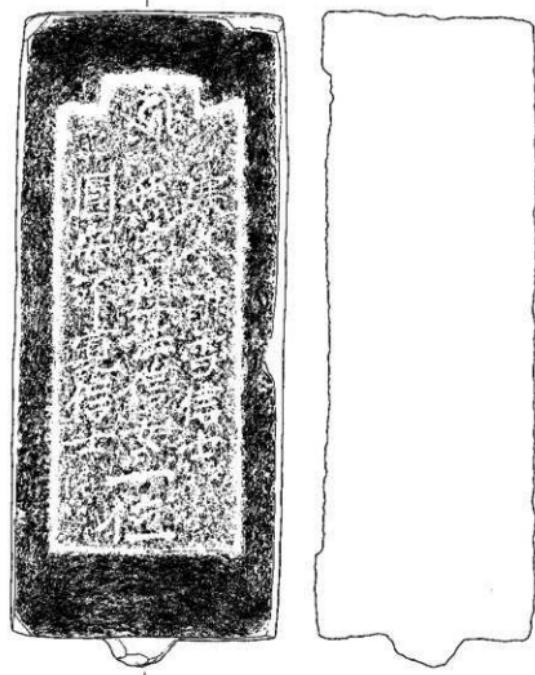


3

第45図 石祠・1号墓 遺物

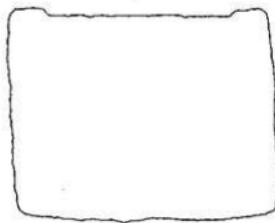


4



1

5



0 (1:4) 10cm

第46図 1号墓 遺物



1 空中写真  
(北より、积迦堂遺跡博物館方面をのぞむ)



2 空中写真 (上より)



1 1号竪穴 遺物出土状況（拡張前、北から）

2 同 遺物出土状況（拡張後、北から）

3 同 窟内遺物出土状況（南から）

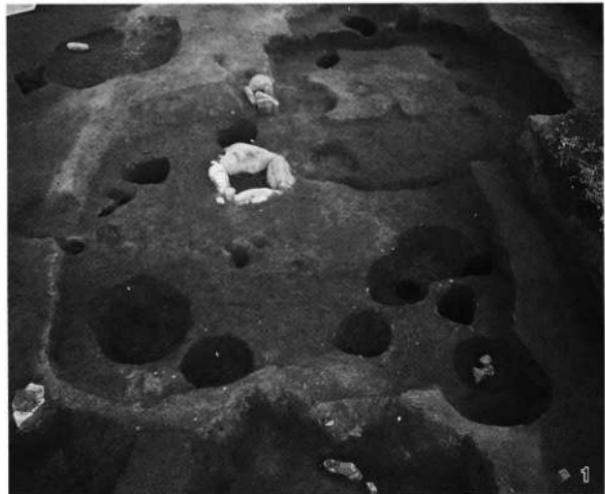
4 同 南壁付近出土状況

5 同 隻断面（東から）

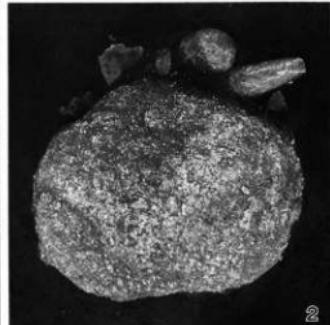
6 同 完掘状況（南から）

7 同 補石と支脚石





1



2

- 1 2号竪穴 完掘状況（西から）
- 2 同 磚と周囲の石器群
- 3 同 遺物出土状況
- 4 同 炉北西隅に立つ石棒
- 5 同 遺物出土状況
- 6 同 石開い炉完掘状況（西から）



3



4

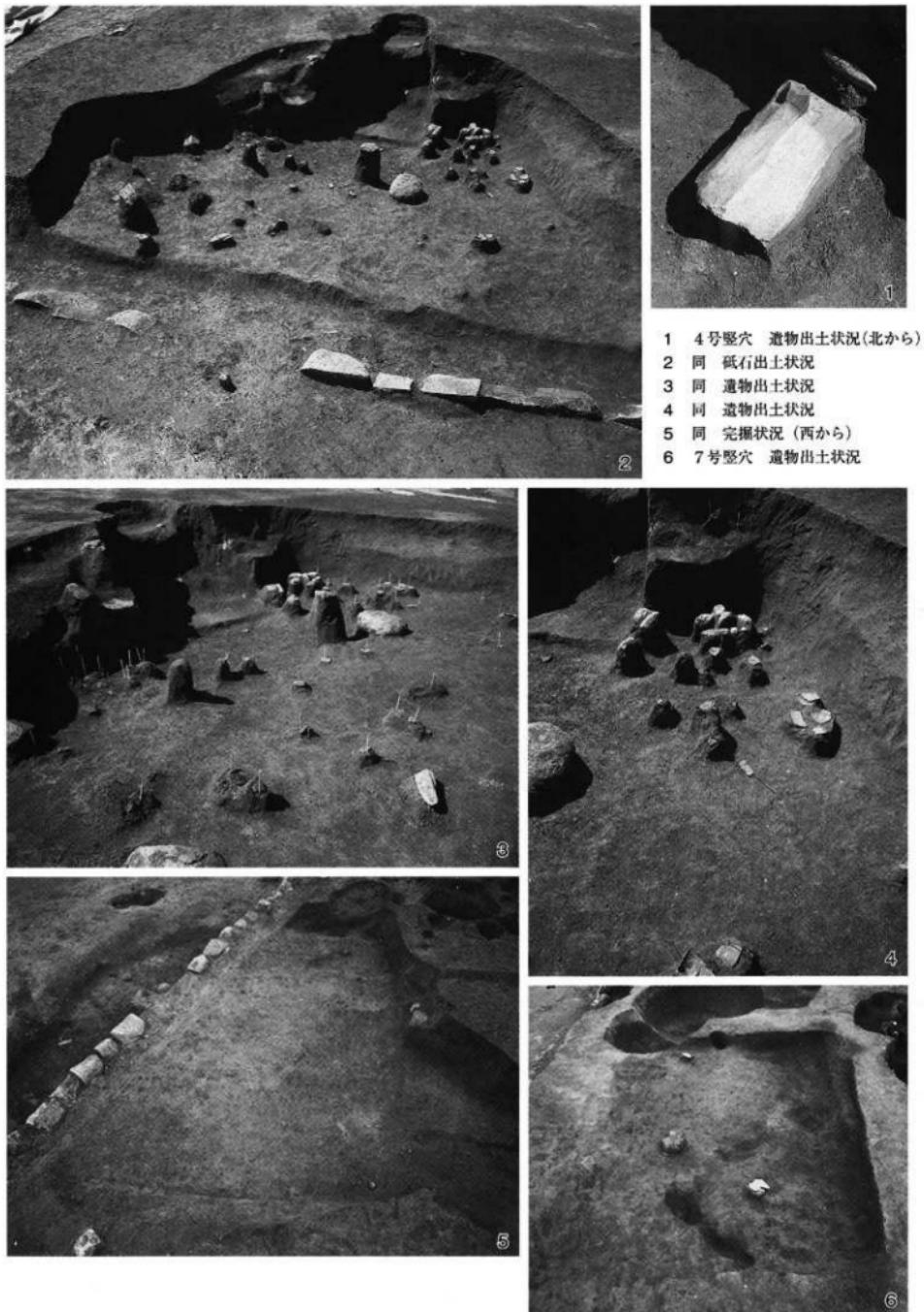


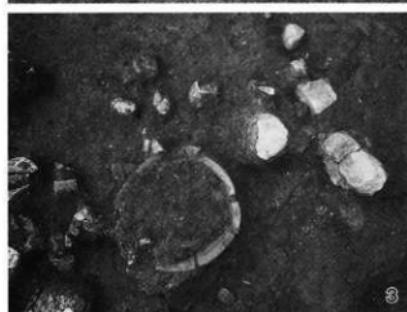
5



6

図版 4





1 8号竪穴 遺物出土状況

2 同

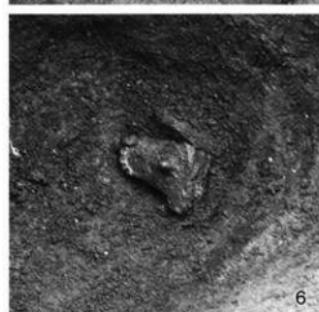
3 同

4 同

5 同 60号ピット

6 同 60号ピット内土偶出土  
状況7 同 110号ピット上層土偶  
出土状況

8 同 土偶出土状況

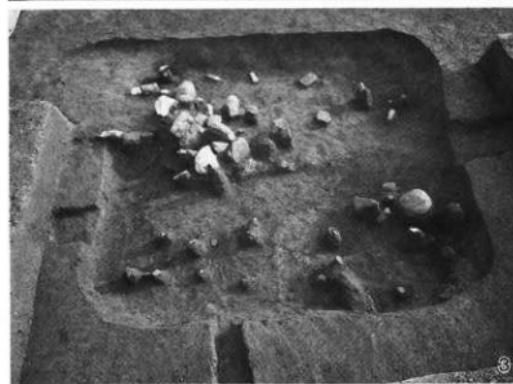


図版6



- 1 8号堅穴 炉  
2 同 完掘状況  
3 9号堅穴 遺物出土状況  
4 同 北竪  
5 同 完掘状況（西から）  
6 同 遺物出土状況（南東隅付近）





1 9号堅穴 東竈遺物出土状況  
(西から)

2 同 完掘状況

3 10号堅穴 遺物出土状況(北から)

4 同 竈付近遺物出土状況(西から)

5 同 完掘状況(西から)

6 同 竈完掘状況(西から)

7 同 竈前縛出土状況

8 同 竈完掘状況(西から)



1



2



3



4



5



6



7



8

1 11号竪穴 遺物出土状況(東から)

2 墓石 調査状況(北から)

3 墓石下層(東から)

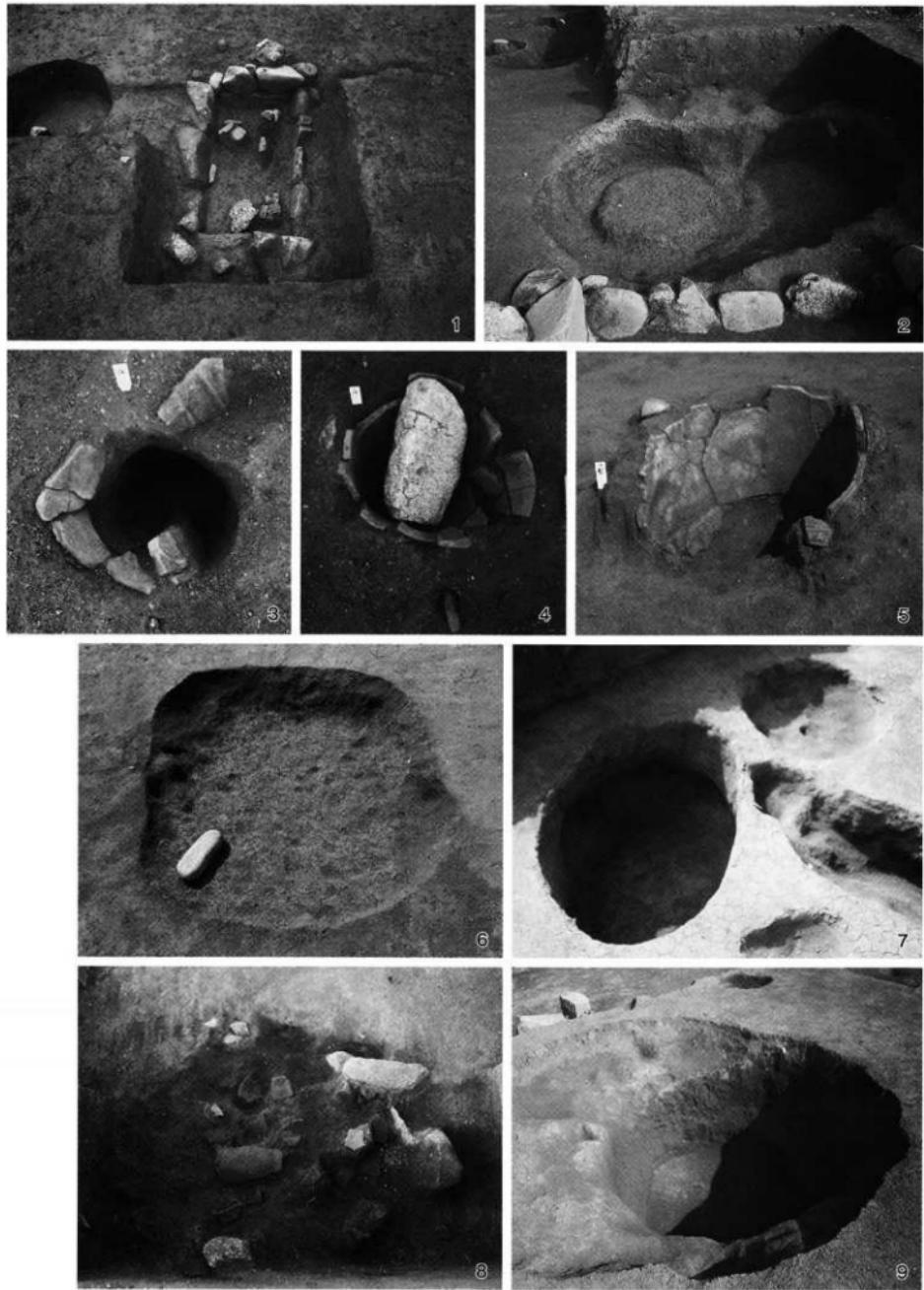
4 墓石 基部出土状況

5 石祠(南から)

6 同(西から)

7 1・2号配石 完掘状況(西から)

8 同 爆出土状況



1 1号配石 出土状況(東から)

2 2号配石(埋め桶遺構)

3 1号埋甕

4 2号埋甕

5 3号埋甕

6 1号土坑

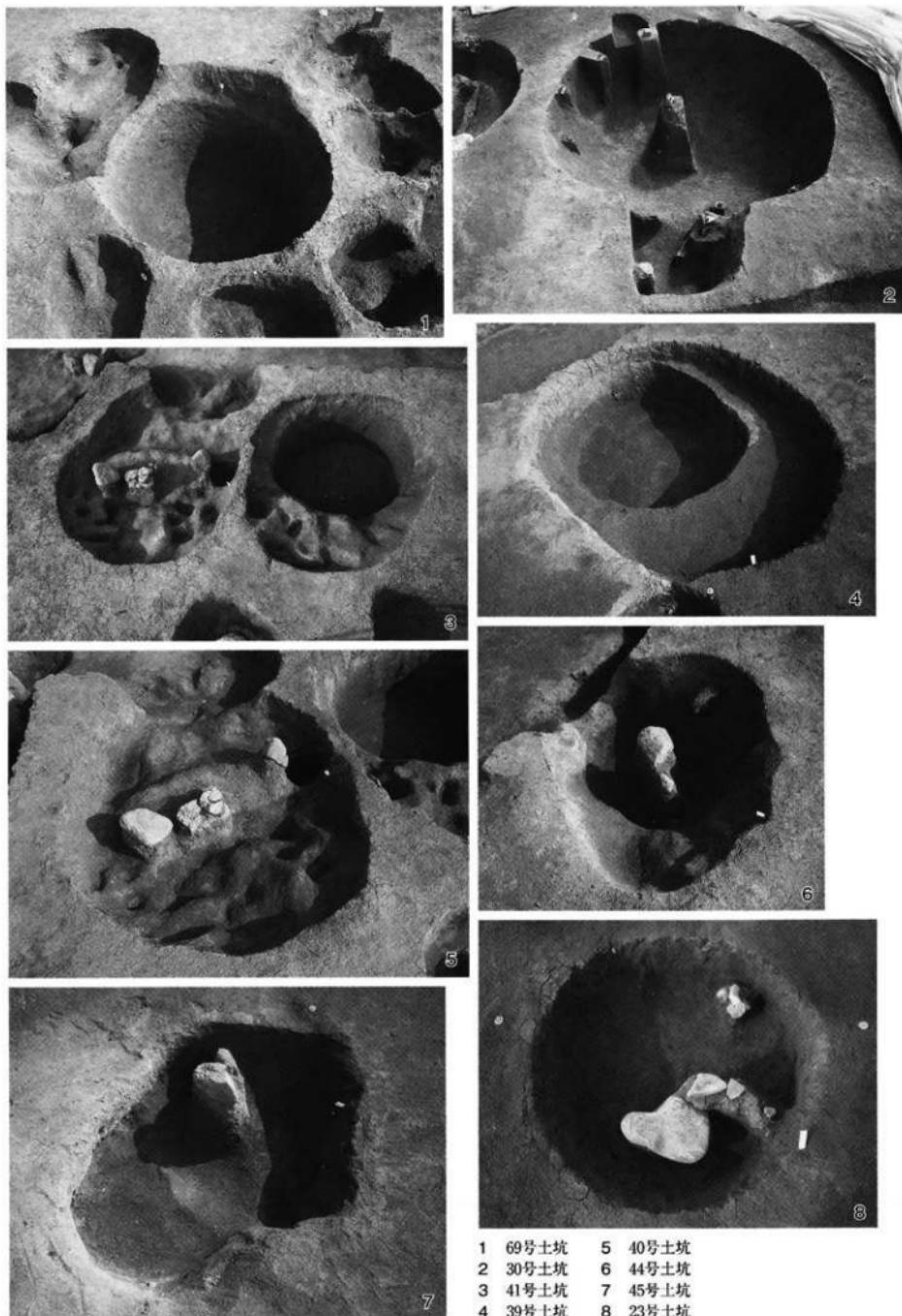
7 4号土坑

8 16号土坑

9

9

図版10





1 27号土坑 遗物出土状况 7 同 遗物出土状况  
2 同  
3 同  
4 同 同  
5 同 同  
6 同

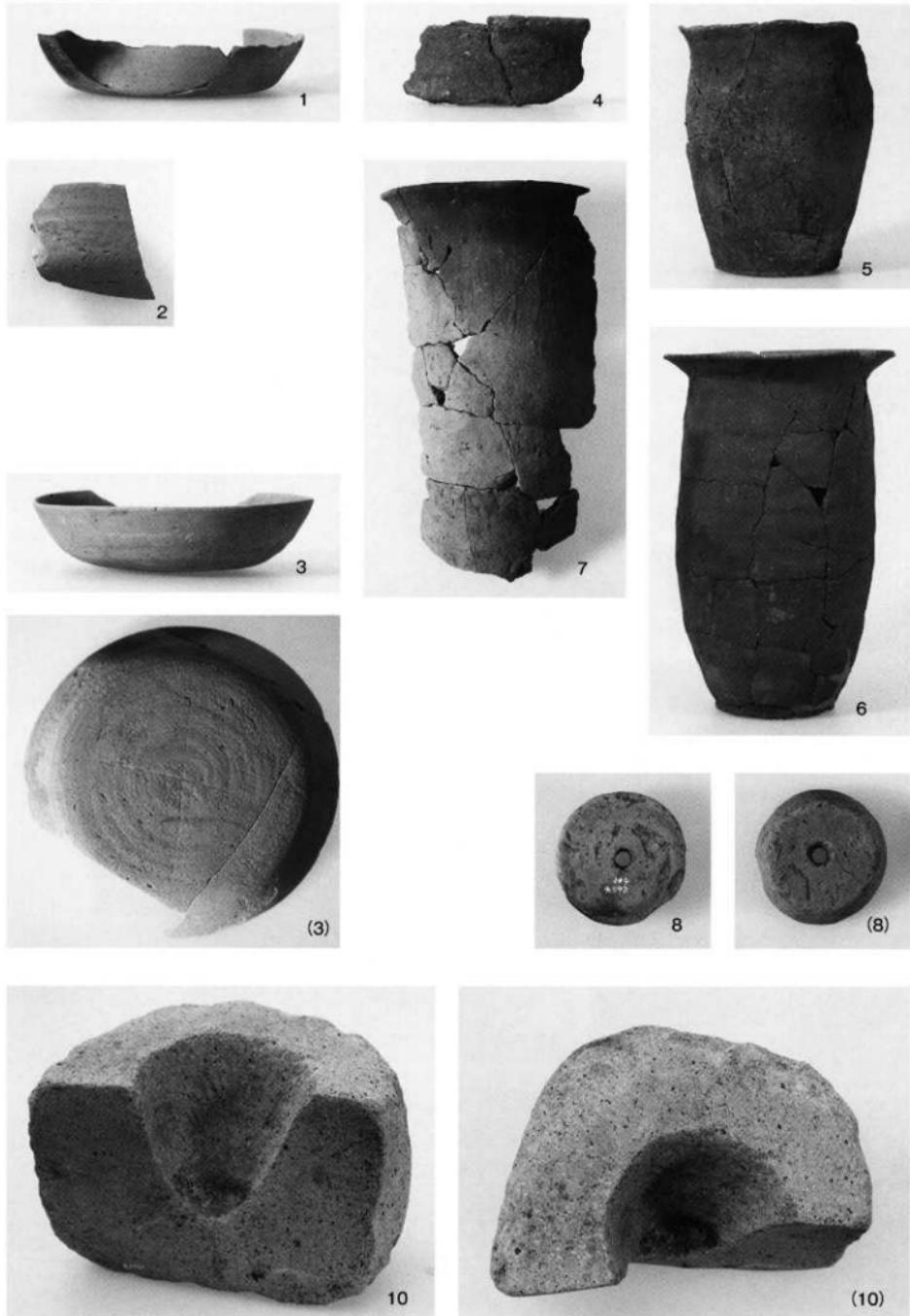


1 完掘状況（下段東から）



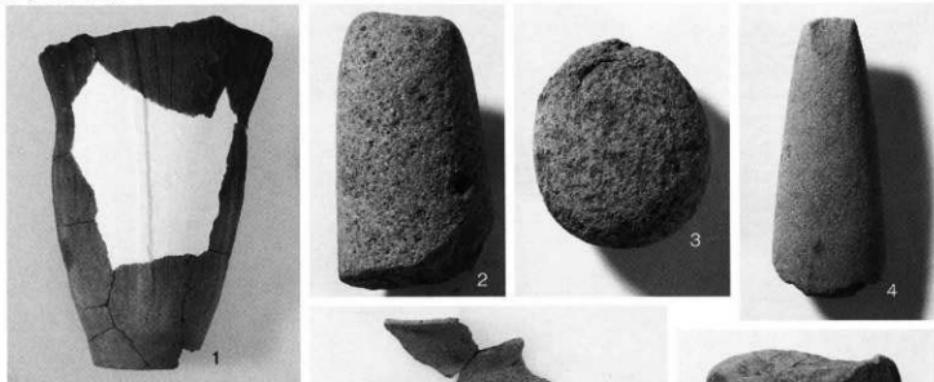
2 完掘状況（下段東から）

1号竪穴 遺物

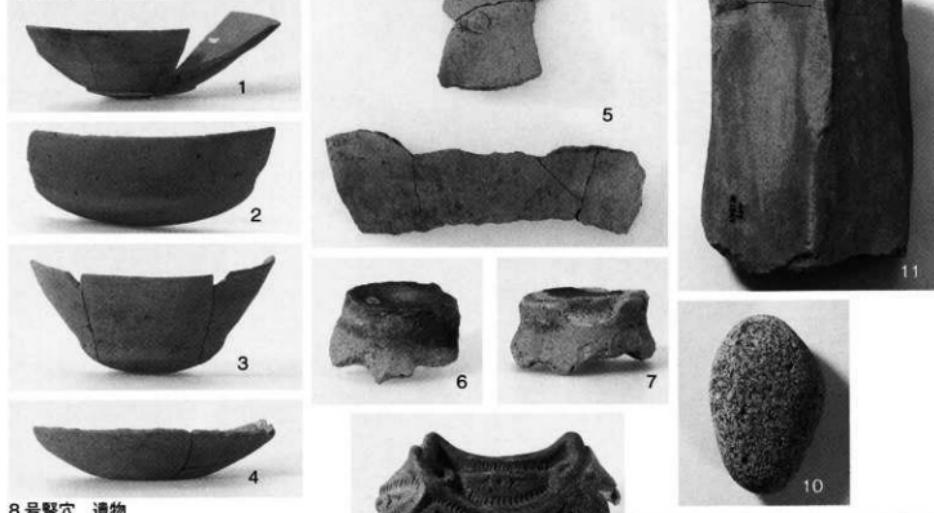


図版14

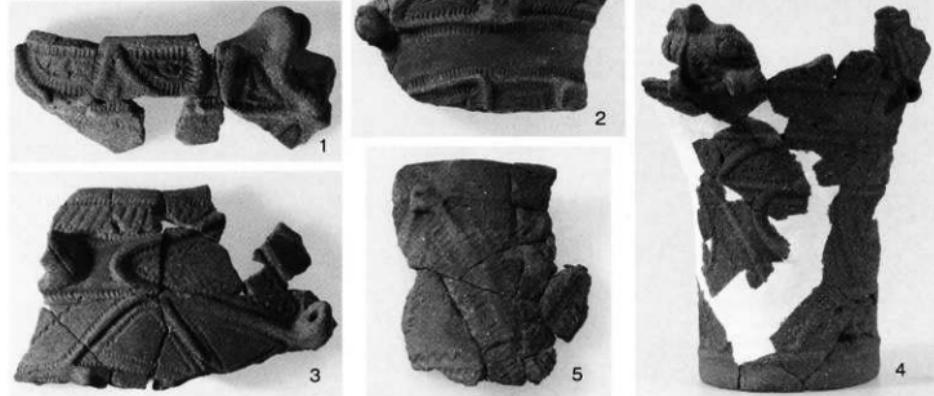
2号竪穴 遺物



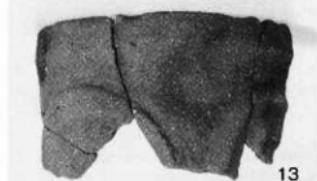
4号竪穴 遺物



8号竪穴 遺物

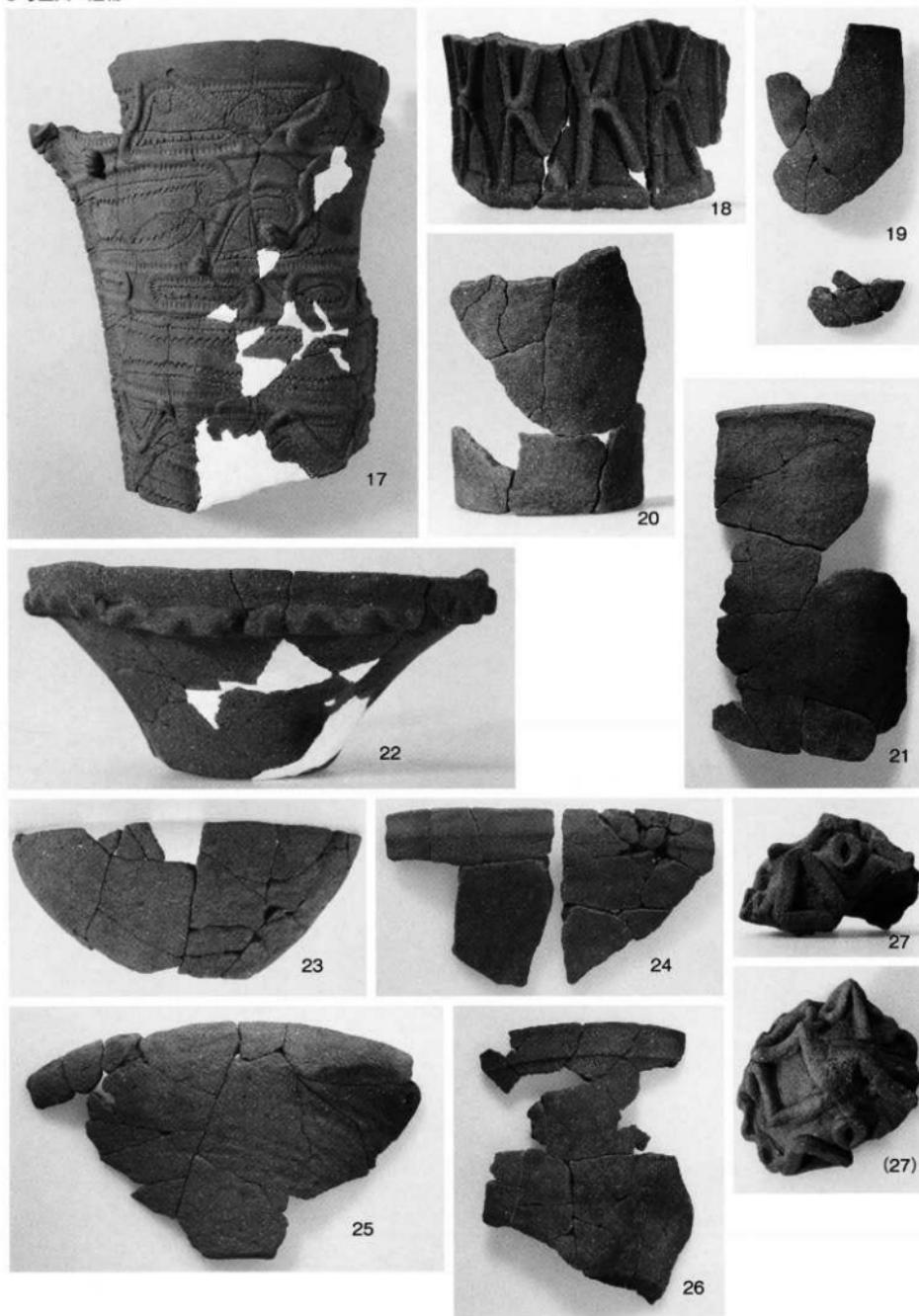


## 8号竪穴 遺物

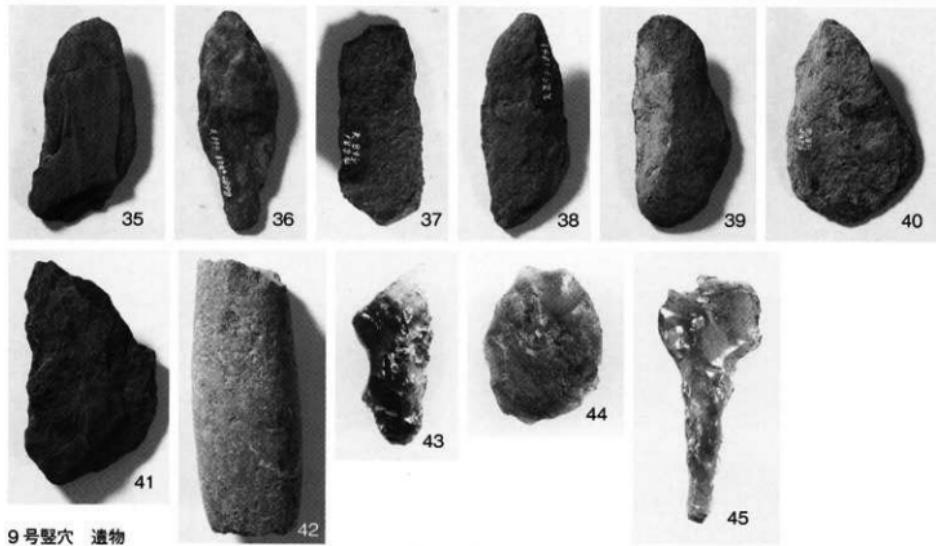
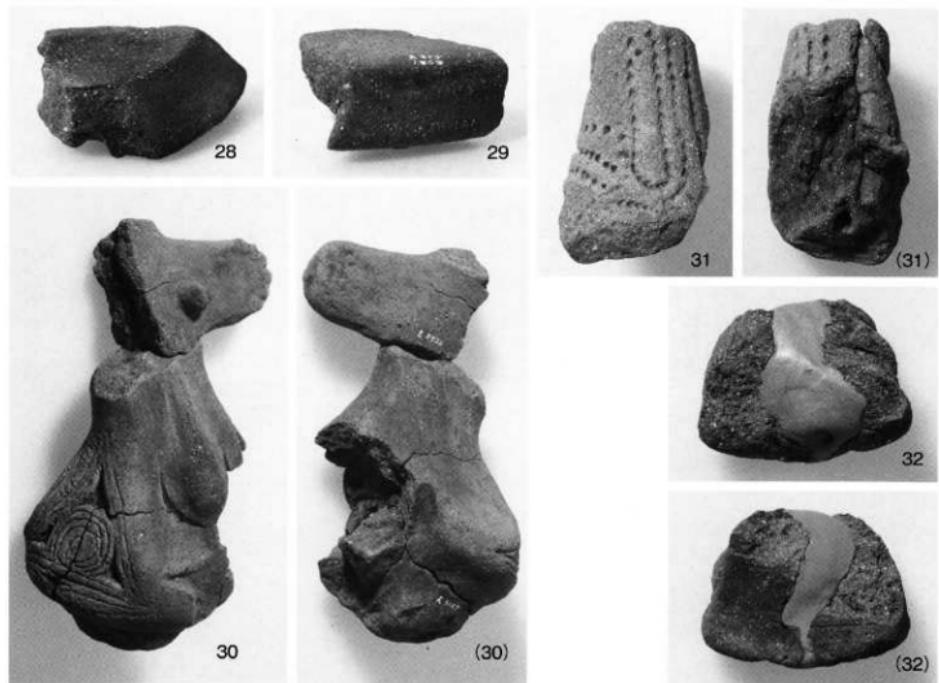


図版16

8号竪穴 遺物

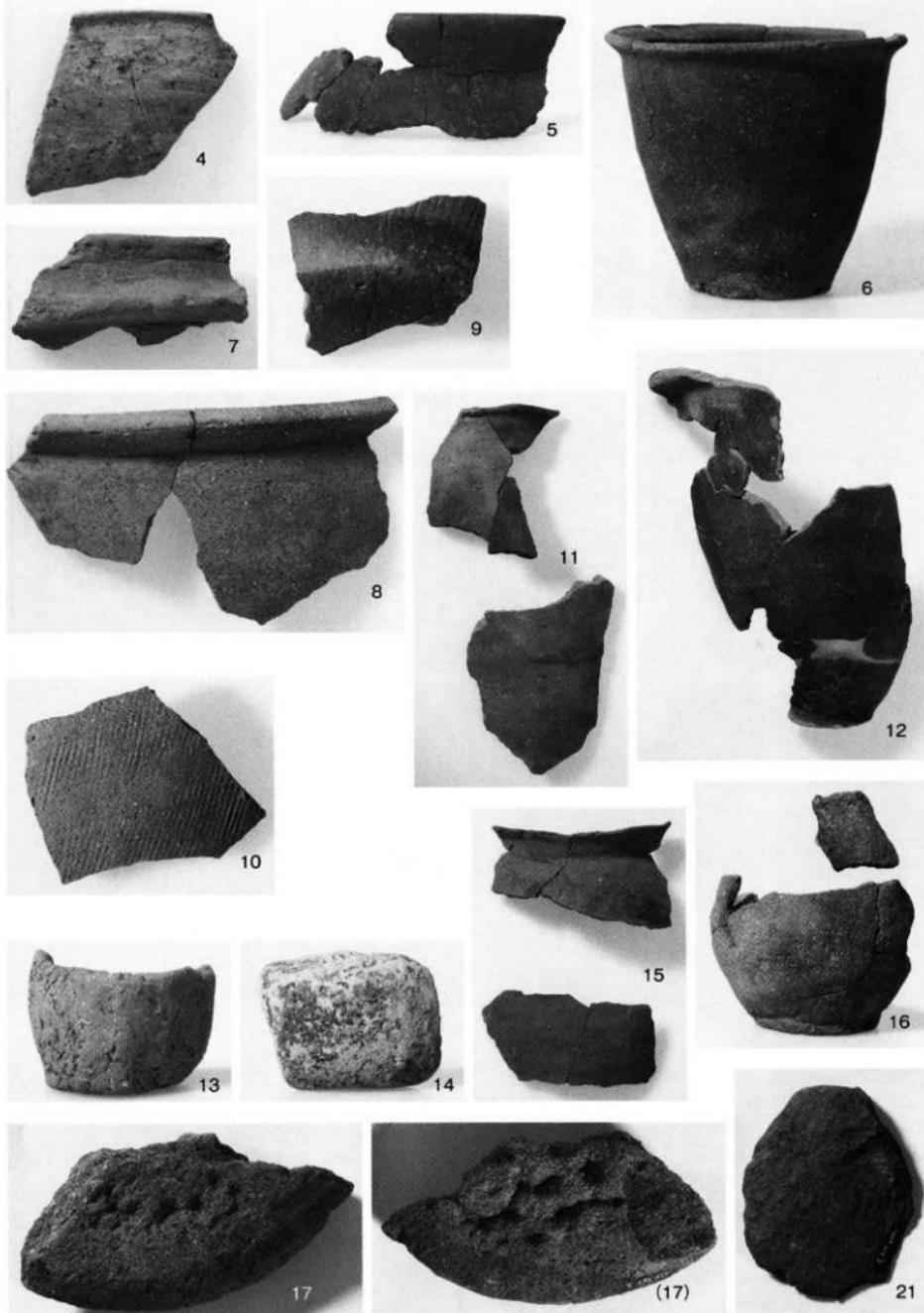


8号竪穴 遺物



图版18

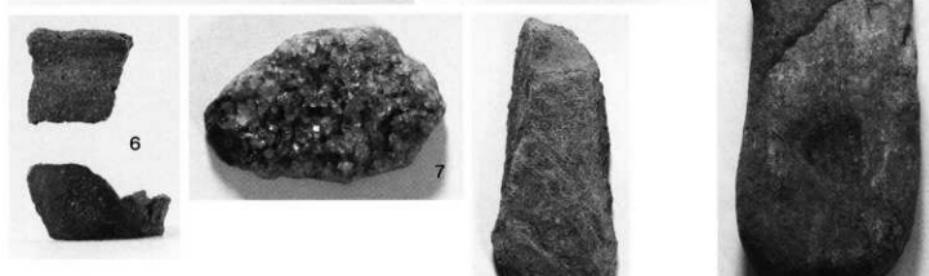
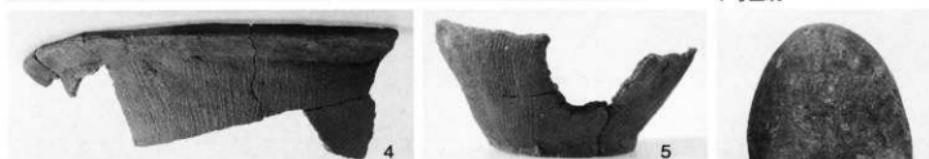
9号竖穴 遗物



10号竪穴 遺物



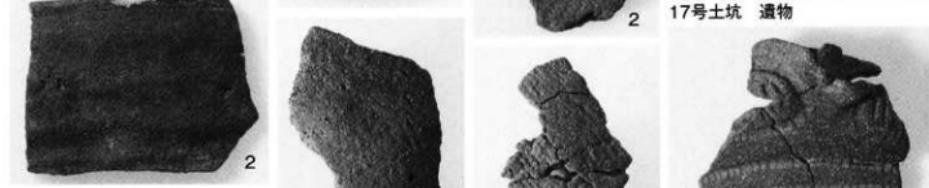
1号土坑



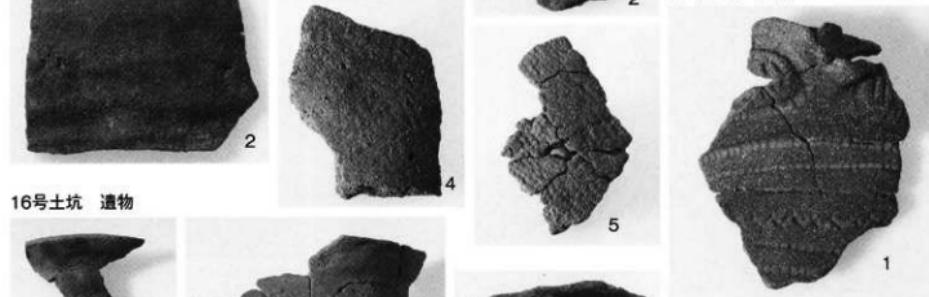
11号土坑 遺物



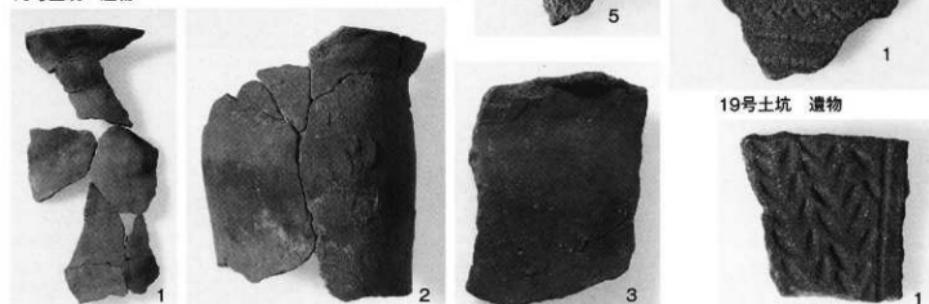
12号土坑 遺物



17号土坑 遺物



16号土坑 遺物



19号土坑 遺物

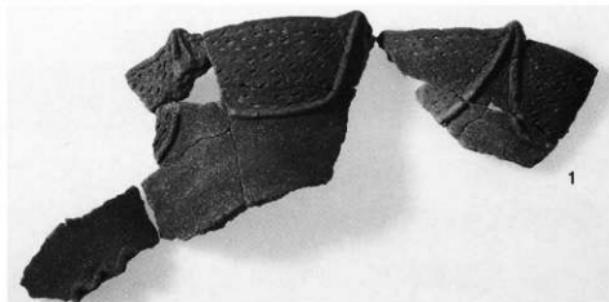


图版20

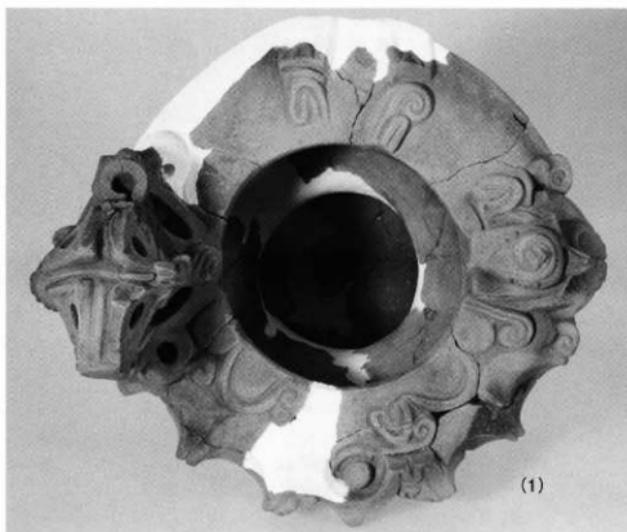
21号土坑 遗物



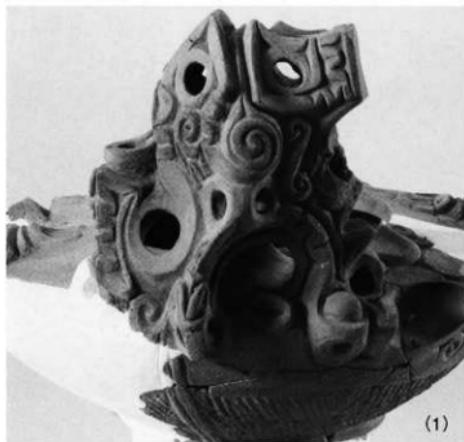
26号土坑 遗物



27号土坑 遗物



## 27号土坑 遺物



(1)



(1)



(1)



2



(2)

## 2の記号文



(A)



(B)



(C)

図版22

27号土坑 遺物



30号土坑 遺物



41号土坑 遺物



32号土坑 遺物



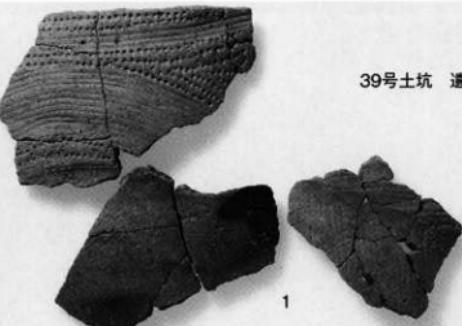
30号土坑 遺物



38号土坑 遺物 41号土坑 遺物



39号土坑 遺物



44号土坑 遺物



45号土坑 遺物



58号土坑 遺物



59号土坑 遺物



60号土坑 遺物



61号土坑 遺物



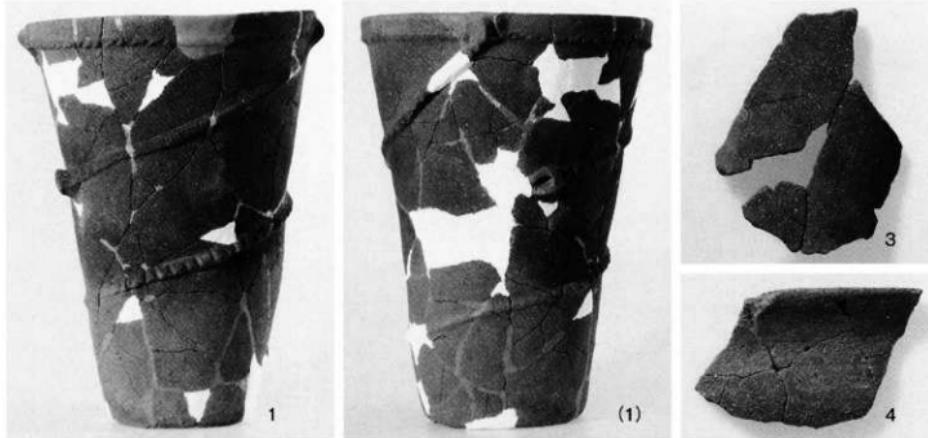
67号土坑 遺物



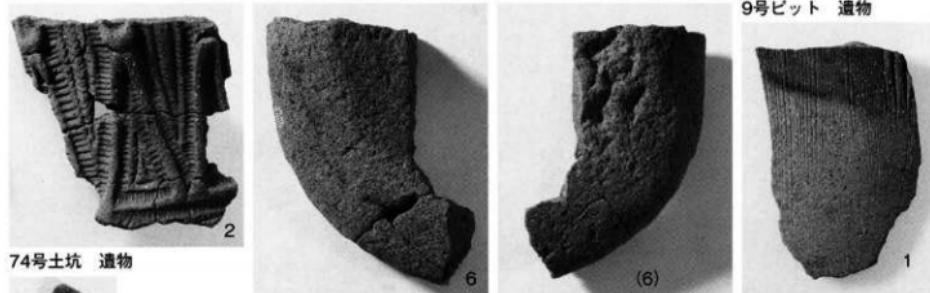
62号土坑 遺物



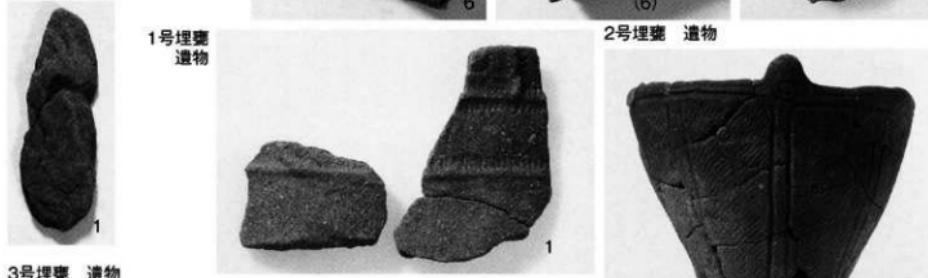
## 70号土坑 遺物



9号ピット 遺物



## 74号土坑 遺物



## 3号埋甕 遺物

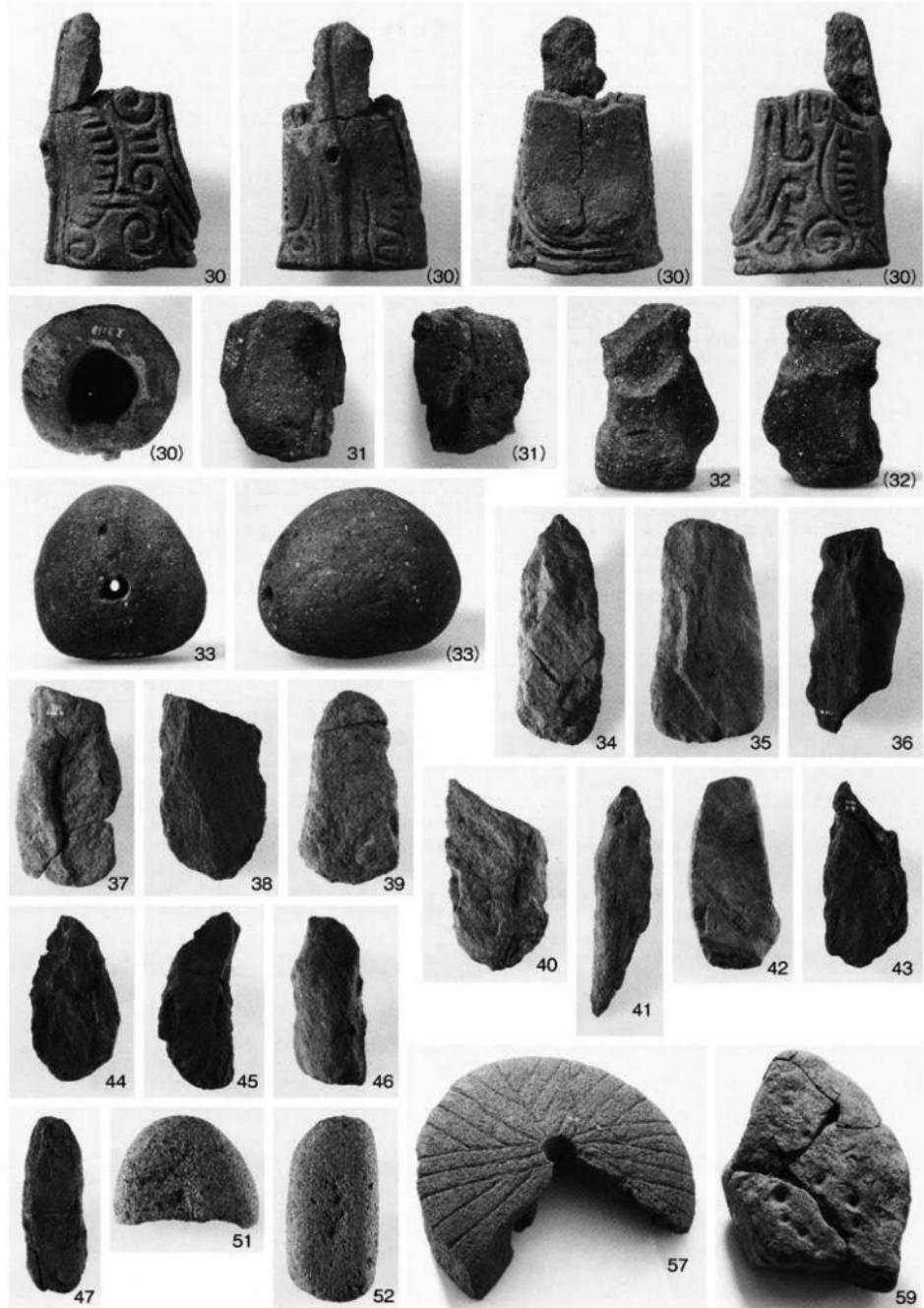


遺構外 遺物

## 遺構外 遺物



## 造構外 遺物



## 報告書抄録

ふりがな	てんじんどういせき					
書名	天神堂遺跡					
副書名	特別養護老人ホーム「ヒルズ勝沼」建設に伴う発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名	甲州市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第2集					
編著者名	鶴原功一					
編集機関	財団法人 山梨文化財研究所					
所在地	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566 TEL 055-263-6441					
発行年月日	2008年3月31日					

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
てんじんどういせき 天神堂遺跡	やまなしけんこう しゅうしかつぬま ちょうしもいわさき 山梨県甲州市勝沼町 下岩崎2089番地ほか	19213	勝沼 52	35° 39' 11"	138° 43' 07"	2006年 8月6日～ 10月14日	1376 m <sup>2</sup>	特別養護 老人ホー ム建設に 伴う

標高	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
392.4～ 394.6m	集落遺跡	縄文中・古 墳前・余良・ 近世	竪穴住居・土坑・ 溝・埋甕・埋め桶 遺構・畝状遺構・ 配石	縄文土器・石器・ 土偶・土師器・砥 石・鍛錬車・凹み 石	縄文時代中期の27号土坑から蛇体突起付 土器が出土。豊穴の別の柱穴から出土 した土偶片が複数。古墳時代前期の大形 砥石、奈良時代の凹み石（抜き臼）出土。

要約	縄文時代では縄文前期初頭の土坑をはじめ中期中葉、中期後半の竪穴各1軒のほか、土坑多数があり、中でも27号土坑から出土した2個体の井戸尻式土器のうち、ひとつは蛇体突起付深鉢という優品である。また土偶の出土も8点と住居軒数の割に多い。そのほか古墳時代前期・奈良時代の竪穴各1軒、平安時代の竪穴2軒、掘立柱建物1棟のほか、近世屋敷地に関わる配石、埋め桶遺構、畝状遺構がある。古墳時代以降の遺物としては奈良時代の抜き臼が注目される。
----	--

### 天神堂遺跡

—特別養護老人ホーム「ヒルズ勝沼」建設に伴う発掘調査報告書—

平成20年（2008）3月31日 発行

編集 財團法人山梨文化財研究所

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566 TEL 055-263-6441

発行 甲州市教育委員会・社会福祉法人景雲会・財團法人山梨文化財研究所

印刷 株式会社帝京サービス

